

○清澄寺大衆中 啓三四四 鈔二三五 語四五〇 拾七三一 扶一三三五
新春、慶賀自佗幸甚幸甚。去年不_レ來_ラ如何_シ定_メ有_リ子細_ニ歟。抑_モ企_テ參_リ詣_リ候_ハば伊勢公、御房に十住心論祕藏寶鑰二教論等の眞言の疏を借用候へ。如_キ是_レ眞言師蜂起之故_ニ申_ス之_ヲ。又止觀_ノ第一第二御隨身候へ東春輔正記_ナんぞや候らん。圓智房の御弟子に觀智房の持_チて候なる宗要集かし(貸)たび候へ。うれのみならずふみ(文)の候由も人人申_シ候し也。早々に返すべきのよし申させ給へ。今年は殊に佛法の邪正たださるべき年歟。淨顯、御房義城房等には申_シ給べし。日蓮が度度殺害せられんとし竝に二度まで流罪せられ。頸_ノを刎_レられんとせし事は別に世間の失_ト候はず。生身の虚空藏菩薩より大智慧を給_ハりし事ありき。日本第一の智者となし給へと申せし事を不便とや思_ヒ食_ケん。明星の如_クなる大寶珠を給_ヒて右の袖にうけとり候し故に。一切經を見候しかば八宗竝に一切經の勝劣粗_ト是_ヲを知りぬ。其上眞言宗は法華經を失_フ宗也。是は大_ニ事なり先_ツ序分に禪宗と念佛宗の僻見を責_メて見んと思ふ。其故は月氏漢土の佛法の邪正は且_ラ置_ク之_ヲ。日本國の法華經の正義を失_ッて一人もなく人の惡道に墮_ルる事は。眞言宗が影の身に隨_フがごとく山山寺寺ごとに法華宗に眞言宗

をあひりひ(翻)て如法の法華經に十八道をりへ懺_ム法に阿彌陀經を加へ。天台宗の學者の灌頂をして眞言宗を正とし法華經を傍とせし程に。眞言經と申_ハは爾前權經の内の華嚴般若にも劣_ルるを慈覺弘法これに迷惑して或は法華經に同じ或は勝_リたりなんと申_シて。佛を開眼するにも佛眼大日の印眞言をもつて開眼供養するゆへに。日本國の木畫の諸像皆無魂無眼の者となりぬ。結句は天魔入_リ替_リて檀那をほろぼす佛像となりぬ王法の盡_キんとするこれなり。此惡眞言かまくら(鎌倉)に來_リて又日本國をほろぼさんとす。其上禪宗淨土宗などと申_スは又いふばかりなき僻見の者なり。此を申_スば必日蓮が命_ヲと成_ルべしと存知せしかども。虚空藏菩薩の御恩をほ_ウ(報)せんがために。建長五年四月二十八日安房國東條郷清澄寺道善之房持佛堂の南面にして。淨圓房と申_ス者竝に少_シノ大衆にこれを申しはじめて其後二十餘年が間退轉なく申_ス。或は所を追_ヒ出_サれ或は流罪等。昔は聞く不輕菩薩の杖木等_ヲ今は見る日蓮が刀劍に當_ルる事を。日本國の有智無智上下萬人の云_フ日蓮法師は古の論師人師大師先德にすぐるべからずと。日蓮この不審をはらさんがために正嘉文永の大地震大長星を見て勘_ヘテ我朝に二_ツの大難あるべし所謂自界叛逆難佗國侵逼

難也。自界は鎌倉に權の大夫殿御子孫をしうち(同士打)出來すべし佗國侵逼難は四方よりあるべし。其中に西よりつよくせむべし。是偏に佛法が一國舉て邪なるゆへに梵天帝釋の佗國に仰つけてせめらるるなるべし。日蓮をだに用ぬ程ならば將門 純友 貞任 利仁 田村のやうなる將軍百千萬人ありとも叶ふべからず。これまことならずば眞言と念佛等の僻見をば信ずべしと申ひるめ候き。就中清澄山の大衆は日蓮を父母にも三寶にもをもひをとさせ給はば。今生には貧窮乞者とならせ給ひ後生には無間地獄に墮させ給ふべし。故いかんとなれば東條左衛門景信が悪人として清澄のかいし(飼鹿)等をか(狩)とり。房房の法師等を念佛者の所從にしなるとせしに。日蓮敵をなし領家のかたうどとなり。清澄二間の二箇の寺東條が方につくならば日蓮法華經をすてんと。せいじやう(精誠)の起請をかいて日蓮が御本尊の手にゆい結つけていのりて。一年が内に兩寺は東條が手をはなれ候しなり。此事は虚空藏菩薩もいか下かすてさせ給ふべき。大衆も日蓮を心へすにをもはれん人人は天にすてられたてまつらざるべしや。かう申せば愚癡の者は我をのろ(呪罵)と申ふべし。後生に無間地獄に墮せんが不便なれば申なり。領家の尼

とせんは女人なり愚癡なれば人人のいひを(嚇)せばさうとましまし候らめ。されども恩をしらぬ人となりて後生に惡道に墮させ給はん事ころ不便に候へども。又一には日蓮が父母等に恩をかほらせたる人なれば。いかにしても後生をたすけたてまつんどころいのり候へ。法華經と申御經は別の事も候はず。我は過去五百塵點劫より先の佛なり又舍利弗等は未來に佛になるべしと。これを信せざらん者は無間地獄に墮べし。我のみかう申ふにはあらず多寶佛も證明し十方の諸佛も舌をいたしてかう候。地涌千界文殊 觀音 梵天帝釋 日月 四天 十羅刹 法華經の行者を守護し給はんと説れたり。されば佛になる道は別のやうなし過去の事未來の事を申あて候がまことの法華經にては候なり。日蓮はいまだつくし(筑紫)を見ずわが(西戎)しらす。一切經をもて勘へて候へばすでに値ぬ。もししからは各各不知恩の人なれば無間地獄に墮給へしと申候はたがひ候べき歟。今はよし後をこらん(御覽)せよ。日本國は當時のゆき(壹岐)對馬のやうになり候はんずるなり。其時安房國にむこ(蒙古)が寄せて責候はん時。日蓮房の中せし事の合たりと申ふは。偏執の法師等が口すくめ(鍊縮)て無間地獄に墮せん事不便なり不便なり。

正月十一日

日 蓮花押

安房ノ國清澄寺大衆中

このふみはさど(佐渡)殿とすけあさり(助阿闍梨)御房と。虚空藏の御前にして大衆ごとによみさかせ給へ。

○南條殿御返事 啓三五三 鈔二五三 語五三 拾七五 扶一四五

はる(春)のはじめの御つかひ自佗申こめ(籠)まいらせ候。さては給はるところのすすの物の事もちる(餅)七十まい(枚)さけひとつ(酒一筒)いも(芋)いちだ河のりひとかみぶくろ(一紙袋)だいこん(大根)ふたつ(二把)やまのいも七ぼん等也。ねんごろの御心ざしはしなごのものにあらはれ候ぬ。法華經の第八ノ卷ニ云、所願不_レ虚_{シカラ}亦於_ニ現世_ニ得_ニ其福報_ヲ。又云、當_ニ於_ニ現世_ニ得_中現果報_ヲ等云云。天台大師云、天子、一言不_レ虚_{シカラ}。又云、法王不_レ虚_{シカラ}等云云。賢王となりぬればたとひ身をほろぼすともろら事せず。いわうや釋迦如來は普明王とればせし時ははんぶく(班足)王のたて(籠)へ入らせ給_キ不妄語戒を持させ給_シゆへ也。かり(迦梨)王とればせし時は實語少人大妄語入地獄とこりねはせありしか。いわ

うや法華經と申は佛我と要常說眞實となのらせ給_シ上。多寶佛十方の諸佛あつまらせ給_テ日月衆星のならばせ給_ヲがごとくに候しざせき(座席)也。法華經に_ルら事あるならばなに事をか人信_スべき。かゝる御經に一華一香をも供養する人は過去に十萬億の佛を供養する人也。又釋迦如來の末法に世のみだれたらん時王臣萬民心を一にして一人の法華經の行者をあだまん時。此行者かんばんち(旱魃)の小水に魚のすみ萬人にかこ(圍)まれたる鹿のごとくならん時。一人ありてとぶらはん人は生身の教主釋尊を一劫が間。三業相應して供養しまいらせたらんよりなを功德するべきよし如來の金言分明也。日は赫赫たり月は明明たり法華經の文字はかくかくめいめいたり。めいめいかくかくたるあきらかなる鏡にかを(顔)をうかべ。すめる水に月のうかべるがごとし。しかるに亦於現世得其福報の敕宣 當於今世得現果報の鳳詔。南條の七郎次郎殿にかぎりてむなしかるべしや。日は西よりいづる世 月は地よりなる時なりとも佛_ノ言_ハむなしからじとこり定させ給_シしか。これをもてれもふに慈父過去の聖靈は教主釋尊の御前にわたらせ給_ヒだんな(檀那)は又現世に大果報をまねかん事疑_ハあるべからず。かうじん(幸甚)かうじん。

正月十九日

日 蓮花押

南條殿御返事

明治三十六年一月十七日富士大石寺ニ於テ興上足ノ御寫本ヲモテ對校ス但シ月日ノ上ニ「建治二年到來」ト細注サレタリ(稻田海素虔記)

○松野殿御消息

微上三三 考四四五

柑子一籠種種ノ物送り給候。法華經第七ノ卷藥王品ニ云ク衆星之中ニ月天子最爲第一此法華經モ亦復如レ是ノ於テ千萬億種ノ諸ノ經法ノ中ニ最爲照明ニ云云。文の意は虚空の星は或は半里或は一里或は八里或は十六里也。天の滿月輪は八百里にてをはします。華嚴經六十卷或ハ八十卷 般若經六百卷 方等經六十卷 涅槃經四十卷三十六卷 大日經 金剛頂經 蘇悉地經 觀經 阿彌陀經等の無量無邊ノ諸經は星の如し。法華經は月の如しと説かれて候經文也。此レは龍樹菩薩 無著菩薩 天台大師 善無畏三藏等の論師人師の言にもあらず。教主釋尊の金言也譬へば天子の一言の如し。又法華經ノ藥王品ニ云ク有ニ能受ニ持是ノ經典者亦復如レ是ノ於テ一切衆生ノ中ニ亦爲第一等ニ云云。文の意は法華經を持つ人は男

ならば何なる田夫にて候へ。三界の主たる大梵天王 釋提桓因 四大天王 轉輪聖王 乃至漢土日本の國主等にも勝れたり。何況や日本國の大臣公卿源平の侍百姓等に勝れたる事申スに及ばず。女人ならば僑戸迦女 吉祥天女 漢の李夫人 楊貴妃等の無量無邊の一切の女人に勝れたりと説れて候。案ずるに經文の如く申さんとすればをびただしき様なり。人もちるん事もかたし。此を信せしと思へば如來の金言を疑ふ失は經文明かに阿鼻地獄の業と見へぬ。進退わづらひ有り何がせん。此法門を教主釋尊は四十餘年が間は智の内にかくさせ給。さりとはとて御年七十二と申せしに南閻浮提ノ中天竺王舍城の丑寅耆闍崛山にして説かせ給。今日日本國には佛御入滅一千四百餘年と申せしに來りぬ。夫より今七百餘年也。先キ一千四百餘年が間は日本國の人國王大臣乃至萬民一人も此事を不知。今此の法華經わたらせ給へども或は念佛を申。或は眞言にいとまを入れ禪宗持齋なんぞ申。或は法華經を讀。人は有しかども。南無妙法蓮華經と唱る人は日本國に一人も無し。日蓮始て建長五年夏の始より二十餘年が間唯一人。當時の人の念佛を申すやうに唱れば人どとに是を笑ひ。結句はのりうち切り流し頸をはねんとせらるること。一日二

日一月二月一年二年ならざればこらふ(堪)へしともをばは候はねども。此經の文を見候へば檀王と申せし王は千歳が間阿私仙人に責つつかはれ身を牀となし給ふ。不輕菩薩と申せし僧は多年が間惡口罵詈せられ刀杖瓦礫を蒙り。藥王菩薩と申せし菩薩は千二百年が間身をやき七萬二千歳ひぢ(臂)を焼給ふ。此を見はんへるに何なる責有りともいかでか。さてせき(盡)留むべきと思ふ心に今まで退轉候はず。然に在家の御身として皆人にくみ候に。而もいまだ見參に入候はぬに何と思食して御信用あるやらん。是偏に過去の宿植なるべし。來生に必佛に成らせ給べき期の來りてもよを(催)すこゝろなるべし。其上經文には鬼神の身に入る者は此の經を信せず。釋迦佛の御魂の入りはれる人は此の經を信すと見へて候へば。水に月の影の入ぬれば水の清がごとく。御心の水に教主釋尊の月の影の入給ふ歟とたのもしく覺へ候。法華經の第四法師品ニ云有レ人求テ佛道ニ而於ニ一劫ノ中ニ合掌ニ在ニ我前ニ以テ無數ノ偈ヲ讚由ニ是ノ讚佛ニ故ニ得ニ無量ノ功德ヲ歎ニ美持經者ヲ其福復過レ彼等云云。文の意は一劫が間教主釋尊を供養し奉るよりも。末代の淺智なる法華經の行者の上下萬人にあだまれて。餓死すべき比丘等を供養せん功德は勝るべしとの經文

なり。一劫と申すは八萬里なんど候はん青めの石を。やすり(磨)を以て無量劫が間する(磨)ともつさまじきを。梵天三銖の衣と申してきはめてほろくうつくしき(羅綺)あま(天)の羽衣を以て。三年に一度下てなづ(撫)るになでつく(盡)したるを一劫と申す。此間無量の財を以て供養しまいらせんよりも。濁世の法華經の行者を供養したらん功德はまさるべきと申す文也。此事信じがたき事なれども法華經はこれにていをびただしく。ことごとしき事どもあまた侍べり。又信せじと思へば多寶佛は證明を加へ教主釋尊は正直の金言となのらせ給ふ。諸佛は廣長舌を梵天につけ給ぬ。父のゆづりに母の狀をうるゑて賢王の宣旨を下し給が如し。三ツ是一同也誰か是を疑はん。されば是を疑し無垢論師は舌五ツに破れ嵩法師は舌ただれ。二階禪師は現身に大蛇となる徳一は舌八ツにさげにき。其のみならず此法華經並に行者を用ひずして。身をりんじ家をうしない國をほろぼす人人月支震且に其數をしらす。第一には日天朝に東に出給に大光明を放ち天眼を開きて南閻浮提を見給に。法華經の行者あれば心に歡喜し行者をにくむ國あれば天眼をいからして其國をにらみ給。始終用はずして國の人にくめば其故と無いくさ(軍)をこり。佗國より其國を破

るべしと見へて候。昔し徳勝童子と申せしをさな(幼)き者は土ノ餅を釋迦佛に供養し奉りて阿育大王と生じて。閻浮提の主と成りて結句は佛になる。今の施主の菓子等を以て法華經を供養します。何か十羅刹女等も悦給らん。悉く盡しがたく候。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

二月十七日

松野殿御返事

日 蓮花押

○南條殿御返事 敬上三 考四六

いも(幸)のかしら河のり又わさび(山葵) 一人一人の御志承候ぬ。鳥のかいこ(卵)をやしなひ牛の子を牛のねぶ(懸)るが如し。夫衣は身をつゝみ食は命チをつぐ。されば法華經を山中にして讀まいらせ候人をねんごろにやしなはせ給ふは。釋迦佛をやしなひまいらせ法華經の命チをつぐにわらずや。妙莊嚴王は三聖を山中にやしなひて沙羅樹王佛となり。檀王は阿私仙人を供養して釋迦佛とならせ給ふ。されば必ずよみかかねどもよみかく人を供養すれば佛になる事疑ひなかりけり。經ニ云、是人於佛道ニ決定無有疑也。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

建治二年三月十八日

日 蓮花押

謹上 南條殿御返事

橘三郎殿太郎大夫殿一紙に云云恐れ入候。返返ははき(伯耆)殿讀聞。せまいらせ給へ。

○富木尼御前

簾目一貫並つゝ(筒)ひと給候畢。や(筒)のはしる事は弓のちからくも(雲)のゆくことはりう(龍)のちから。をどこ(男)のしわざは女のちからなり。いまときとの(富木殿)のこれへ御わたりある事尼ごせん(御前)の御力なり。けふり(煙)をみれば火をみるあめ(雨)をみればりうをみる。をどこをみれば女をみる。今どきとのにけさん(見参)つかまつれば尼ごせんをみたてまつるとをばう。ときとの(富木殿)の御物がたり候はこのはわ(此母)のなげきのなかにりんずう(臨)慈のよくをばせしと。尼がよくわたりかんびやう(看病)せし事のうれしと。うつのよ(世)にむす(志)るべしどもをばへすとよろこばれ候なり。なによりも

富木尼御前 (遺二〇ノ四六)

千三百八十一

(續下ノ十)

をばつか(覺束)なき事は御所勞なり。かまへてさもと三年はじめ(始)のごとくにさうち(炎治)せさせ給へ。病なき人も無常まぬかれがたし。但しとしのはてにはあらず。法華經の行者なり非業の死にはあるべからず。よも業病にては候はじ。設業病なりとも法華經の御力たのもし。阿闍世王は法華經を持て四十年の命をのべ陳臣は十五年の命をのべたり。尼こせん又法華經の行者なり御信心月のまさるがごとくしを(朝)のみつがごとし。いかでか病も失壽も(びざるべきと強盛にをばしめし。身を持し心に物をなげかざれ。なげき出來時はゆき(壹岐)つしま(對馬)の事だざひふ(太宰府)の事。かまくら(鎌倉)の人人の天の樂のごと(如)にありしが。當時つくし(筑紫)へむか(向)へばとど(留)まる女ごゆく(往)をとこ。はなるるとき(離時)はかわ(皮)をはぐ(剝)がごとくかを(顔)とかをとをとりあわ(取合)せ。目と目をあわせてなげき(歎)しが。次第にはな(離)れてゆい(由比)のはまいなぶら(稻村)こしごへ(腰越)さかわ(酒匂)はこねさか(稻根坂)一日二日すぐるほどに。あゆみ(歩)あゆみとを(遠)ざかるあゆみ(歩行)をかかわ(川)も山もへだ(隔)て雲もへだつれば。うちうら(添)ものはなみ(涙)となり。とも(絆)ならものはなげき(歎)なり。いかにかなし(悲)かるらむ。

かくなげ(歎)かんぼとにもうこ(蒙古)のつわもの(兵)せめ(攻)きたらば。山か海もいけどり(生捕)かぶね(舟)の内かかうらい(高麗)かにてうき(憂)めにあはん。これひとへに失もなく(失)なくて日本國の一切衆生の父母とたる法華經の行者日蓮を。ゆへ(謂)もなく或はのり或は打(打)或はこうぢ(街路)をわたし。ものにくるい(狂)しか十羅刹のせめ(責)をかほり(被)てなれる事なり。又又これより百千萬億倍たへ(堪)がたき事ともいで来るべし。不思議を目の前に御らんあるがかし。我等は佛に疑(疑)なしとをばせばなに(何)のなげき(歎)か有(有)べき。ささき(皇妃)になりてもなにかせん天に生てもようしなし。龍女があと(跡)をつぎ摩訶波舍波提比丘尼のれち(列)につらなるべし。あらうれしあらうれし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱(唱)させ給へ。恐恐謹言。

三月二十七日

日 蓮花押

尼こせん(御前)へ

明治三十五年四月一日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲモテ拜照シ奉ル但シ此書全紙七枚ナリ(續田海素度記)

○忘持經事

啓二七七八

鈔一七三三

註一七三六

拾四一八

扶一〇三六

所_レ忘_レ給_レ御持經追_テ持_キ修行者_ニ遺_ハ之_ヲ。魯_ノ哀公云_ク有_リ人好_ク忘_ル者_一移_タ宅_ニ乃_チ忘_リ其妻_云云。孔子云_ク又有_リ好_ク忘_ル甚_キ於_此者_上桀_紂之君_ハ乃_チ忘_リ其_身等_云云。夫_樂特_尊者_ハ忘_ル名_ヲ此_レ閻浮_{第一}好_ク忘_ル者_也。今_常忍_上人_ハ忘_ル持_經日本_{第一}好_ク忘_ル之_仁歟。大通_結緣_ノ輩_ハ忘_ル衣_珠經_三千_塵劫_ヲ脚_ニ躡_シ資_路。久_遠下_種之_人忘_ル良_藥送_ニ五_百塵_點顛_ニ倒_ニ途_ノ嶮_地。今_真言_宗念_佛宗_禪宗_律宗_等學_者等_ハ忘_ル失_シ佛_陀ノ_本意_ヲ經_ニ歷_未來_無數_劫沈_ニ淪_阿鼻_ノ火_坑。自_リ此_レ第_一好_ク忘_ル者_所謂_今世_ノ天_台宗_ノ學_者等_ト與_ニ持_經者_等誹_ニ謗_日蓮_ヲ扶_ニ助_念佛_者等_ヲ是_也。背_レ親_ニ付_レ敵_ニ持_レ刀_ヲ破_ル自_ヲ此_等且_置之_ヲ。夫_常啼_菩薩_ハ向_テ東_ニ求_ニ般_若財_童子_ハ向_テ南_ニ得_ル華_嚴。雪_山ノ_小兒_ハ半_偈投_身樂_法梵_志一_偈劍_レ皮_ヲ。此_等皆_上聖_大人_也檢_其迹_ヲ居_地住_ニ尋_其本_ヲ等_妙耳。身_ハ入_テ八_熱得_ニ火_坑三_昧心_ハ入_テ八_寒證_ニ清_涼三_昧身_心共_ニ無_レ苦_{。譬}如_下放_矢射_ニ虛_空握_石投_水。今_常忍_貴邊_ハ末_代ノ_愚者_見思_未斷_凡夫_也。身_ハ非_俗非_道禿_{居士}心_ハ非_善非_惡羝_羊耳。雖_然一_人悲_母有_リ堂_朝出_テ詣_主君_ニ夕_ニ入_テ返_私宅_ニ所_ハ營_爲悲_母ノ_所存_孝心_耳。而_去月_下旬_之比_爲示_生死_理趣_ニ黃

泉_ノ道_ニ此_與貴_邊一_歎言_ク齡_既及_ニ九_旬留_子去_レ親_雖爲_ニ次_第情_案事_ノ心_去後_不可_來期_三何_月日_ニ母_無國_ニ自_今後_誰可_拜。離_別難_忍之_間舍_利懸_頸任_足出_テ大_道自_下州_至于_甲州_ニ其_中間_往復_復及_三千_里。國_皆飢_饉山_野充_滿盜_賊宿_宿乏_少糧_米我_身羸_弱所_從若_亡牛_馬不_合期_{。峨}峨_大山_重重_漫漫_大河_多多_登高_山頭_天下_幽谷_足踏_雲非_鳥難_渡非_鹿難_越眼_眩足_冷羅_什三_藏葱_嶺役_優婆_塞大_峰只_今云_云。然_後尋_入深_洞見_一庵_室。法_華讀_誦音_響青_天一_乘談_義言_聞山_中。觸_案內_入室_教主_釋尊_ノ御_寶前_安置_母骨_ヲ。五_體投_地合_掌開_二兩_眼拜_尊容_ヲ歡_喜餘_身心_苦忽_息。我_頭ハ_父母_ノ頭_我足_ハ父_母ノ_足我_十指_ハ父_母ノ_十指_我口_ハ父_母ノ_口譬_ハ如_三種_子菓_子身_ト與_影。教_主釋_尊成_道淨_飯摩_耶得_道。吉_占師_子青_提女_目隄_尊者_ハ同_時成_佛也。如_是觀_時無_始業_障忽_消心_性妙_蓮忽_開給_フ歟。然_後隨_分爲_佛事_無事_故還_給云_云。恐_恐謹_言。

富木入道殿

明治三十五年三月二十六日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ全ク九丁ト八十四行ナリ(稻田海素處記)

○種種御振舞御書 啓三〇七。鈔一八六 語三五六 記下二四 拾五三三 扶一一五二

去文永五年後、正月十八日。西戎大蒙古國より日本國ををらう(襲)べきよし牒状をわたす。日蓮が去文應元年太歲庚申に勘へたりし立正安國論すこしもたが(違)わす符合しぬ。此書は白樂天が樂府にも越へ佛の未來記にもをどらす。未代の不思議なに事かこれにすぎん。賢王聖主の御世ならば日本第一之權狀(軍事)にもをこな(行)われ現身に大師號もあるべし。定て御たづね(尋)ありていくさ(其義)の僉義(せんぎ)をもいゐあわせ。調伏なんども申つつけられぬらんとをもひしにかし申る。國に賢人なんどもあるならば不思議なる事かな。これはひとへにただ事にはあらず。天照大神正八幡宮の僧につい(託)て。日本國のたすかるべき事を御計(うら)のあるかともわるべきに。さはなくて或は使を惡口し或はあざむき或はとりも入らず或は返事もなし。或は返事をなせども上へも申さず。これひとへにただ事にはあらず。設日蓮が身の事なりとも。國主となりまつり(政)事をなさん人人は取りつぎ申たらんには政道の法がかし。いわうやこの事は上の御大事いできらむ(出來)のみならず。各各の身にあたりてをほいなるなき出來すべき事がかし。而るを用る事こりなくとも惡口まではあまりなり。此ひとへに日本國の上下萬人一人もなく法華經の強敵となりてとしひさし(年久)くなりぬれば。大禍のつもり大鬼神の各各の身に入上へ。蒙古國の牒狀に正念をぬかれてくるう(狂)なり。例せば殷の紂王に比干といひし者(諫)めをなせしかば用はずして胸(むね)を穿る。周文武王にほろばされぬ。吳王は伍子胥がいさめを用はず自害をせさせしかば越王勾踐(こうせん)の手にかかる。これもかれ(彼)がどどくなるべかといひよいよふびん(い)をばへて。名をもをします命(いのち)をもすもて強盛に申はりしかば。風天なれば渡大なり龍大なれば雨たけきやうに。いよいよわたをなしますますにくみて御評定に僉議あり。頸をばぬべきか鎌倉ををわるべきか。弟子檀那等をば所領あらん者は所領を召して頸を切れ或はるう(籠)にてせめあるいは遠流すべし等云云。日蓮悦んで云、本より存知の旨なり。雪山童子は半偈のために身をなげ。常啼菩薩は身をうり。善財童子は火に入り。樂法梵士(がくはふせんじ)は皮をはぐ。藥王菩薩は臂をやく。不輕菩薩は杖木をかうむり。師子尊者は頭をはねられ。提婆菩薩は外道にころさる。此等はいかなりける時やと勘うれば。天台大師は適時而已とかかれ。章安大師は取捨得

宜^ニ不可^一一向^ニとしるされ。法華經は一法なれども機にしたがひ時によりて其行萬差なるべし。佛記云^テ我滅後正像二千年過ぎて末法の始に此法華經の肝心題目の五字計^リを弘めんもの出來すべし。其時惡王惡比丘等大地微塵より多^クして。或は大乗或は小乗等をもてまうは(競)んはどに。此題目の行者にせめられて在家の檀那等をかたらひて。或はのり或はうち或はろうに入^レ或は所領を召^シ或は流罪或は頸をはぬべし。なほいふども退轉なくひろむるはどならば。あだをなすものは國主はどし打^チをはじめ餓鬼のごとく身をくらひ。後には佗國よりせめらるべし。これひとへに梵天帝釋日月四天等、法華經の敵なる國を佗國より責^ムさせ給^フなるべしとてかかれて候^フ。各各我弟子とならん人人は一人もをく(應)しをもはるべからず。をや(親)をもひめて(妻子)をももひ所領をかへりみることなかれ。無量劫よりこのかたをや(親子)のため所領に命^メすてたる事は大地微塵よりもをほし。法華經のゆへにはいまだ一度もすてず。法華經をばうこばく(若干)行せしかどもかゝる事出來せしかば退轉してやみにき。譬ばゆ(湯)をわか(沸)して水に入れ火を切^ルにどげ(遂)ざるがごとし。各各思^ヒ切^リ給^ヘ此身を法華經にかうるは石に金をかへ糞^ニ米を

種牛の
ひき所
た。

かうるなり。佛滅後二千二百二十餘年が間迦葉 阿難等 馬鳴 龍樹等 南岳 天台等 妙樂 傳教等だにもいまだひろめ給^フぬ。法華經の肝心諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字。末法の始に一間浮提にひろまらせ給^フべき瑞相に日蓮さまがけ(魁)したり。わたうども(和蘇)二陳二陳つづきて迦葉 阿難にも勝ぐれ天台 傳教にもこへよかし。わづかの小島のぬしら(主等)がをど(威嚇)さんをか(恐)ては閻魔王のせち(意)をばいかんがすべき。佛の御使となのりながらをく(應)せんは無下の人人なると申^スふくめぬ。さりし程に念佛者持齋眞言師等自身の智は及ばず訴状も叶^ハざれば。上郎尼(じやうに)でせんたちにとりつきて種種にかま(構)へ申^ス。故最明寺ノ入道殿 極樂寺ノ入道殿を無間地獄に墮^テたりと申^ス。建長寺 壽福寺 極樂寺 長樂寺 大佛寺等をやま(構)はらへと申^ス。道隆上人 良觀上人等を頸をはねよと申^ス。御評定になにとなくとも日蓮が罪禍まぬかれがたし但し上^ノ件の事一定申^スかど。召^シ出てたづねらるべしとて召^シ出^サされぬ。奉行人の云^フ上^ノのをばせかくのごとしと申せしかば。上^ノ件の事一言もたがはず申^ス。但^シ最明寺殿極樂寺殿を地獄といふ事はうらごととなり。此法門は最明寺殿極樂寺殿御存生の時より申せし事なり。詮するところ上^ノ件の事どもは此國を

をもひて申事なれば。世を安穩にたもたんとをばさば彼法師ばらを召合あてきこしめせ。さなくして彼等にかわりて理不盡ことごとに失たに行いるるはどならば國に後悔ありて。日蓮御勘氣をかほらば佛の御使つかひを用もちぬになるべし。梵天帝釋日月四天の御どがめありて。遠流死罪の後百日一年三年七年が内に自界叛逆難とて此御一門どしうちありて。其後は佗國侵逼難とて四方よりことには西方よりせめられさせ給たまへし。其時後悔あるべし平、左衛門ノ尉と申付たましかども。太政の入道のくるひあらじやうにすこしもはばかる事なく物にくるう。去文永八年太歲九月十二日御勘氣をかほる。其時の御勘氣のやうも常ならず法にすぎてみゆ。了行りやうが謀反ををこし大夫、律師が世をみださんとせしをめしとられしにもこねたり。平、左衛門ノ尉大將として數百人の兵者つはものにどうまろ胸丸き著せてるばうし烏帽子かけてして眼まなこをいからし聲をあらうす。大體事の心を案するに太政入道の世をとりながら國をやぶらんとせしに似たり。ただ事ともみへず。日蓮これを見てをもうやう日ひごろ月つきごろをもひまうけたりつる事はこれなり。さいわひなるかな法華經のためいに身をすてん事よ。くささかうへ臭頭をはなたれば沙いに金かねをかへ石いに珠たまを

あき實なへるがごとし。さて平、左衛門ノ尉が一の郎従少輔房せうぼうと申者はしりよりて。日蓮が懷中せる法華經の第五卷を取り出してれもて面を二度さいなみ呵責てさんざんどうちちらす。又九卷の法華經を兵者つはものども打うちちらしてあるいは足にふみあるいは身にまどひ。あるいはいたじき板敷たみ等家の二三間にもちらさぬ所もなし。日蓮大高聲を放はなて申まあらしろ、平、左衛門ノ尉がものにくるうを見よ。とのばら殿恩但今いま日本國の柱をたをすどよばはりしかば上下萬人あわてて見みし。日蓮こり御勘氣をかほればをく應して見ゆへかりしに。さはなくしてこれはひ餅がことなりとやをもひけん。兵者どもものいろ色こりへんじて見へしが。十日並な十二日の間眞言宗の失あ禪宗 念佛等 良觀が雨ふらさぬ事。つぶさ具に平、左衛門ノ尉にいるさかせてありしに。或ははとわらひ或はいかりなんぞせし事どもはしげければしるさず。せん詮するところは六日十八日より七月四日まで良觀が雨のいのり祈して。日蓮にかかれてふらしかねあせ汗をながしなんだ涙のみ下くだりて雨ふらざりし上逆風ひまなくてありし事。三度までつかひ使者をつかわして二丈のほり堀をこへぬもの十丈二十丈のほりをこうべきか。いずみしきぶ和

泉式部) いろごのみ(好色)の身にして八齋戒にせいせるうた(和歌)をよみて雨を
 ふらし。能因法師が破戒の身としてうたをよみて天雨を下せしに。いかに二
 百五十戒の人人百千人あつまりて。七日二七日せめさせ給に雨の下らざる
 上二大風は吹候ず。これをもつて存せさせ給へ各各の往生は叶ませきとせ
 められて。良觀がなきし事人人につきて讒せし事一一に申せしかば。平ノ左
 衛門ノ尉等かたうと(方人)しかなへずしてつまりふし(詰伏)し事どもはしげけ
 ればかかず。さては十二日の夜武藏ノ守殿のあづか(預)りにて夜半に及(及)頸を
 切がために鎌倉をいでしにわかみやこうち(若宮小路)にうちつゝみ(包)て四方
 に兵のうちつゝみてありしかども。日蓮云々各各さわ(騷)がせ給なべち(別)
 の事はなし。八幡大菩薩に最後に申すべき事ありとて馬よりさしをりて高聲
 に申やう。いかに八幡大菩薩はまこと(實)の神か。和氣の清丸が頸を刎られ
 んどせし時は長一丈の月と顯れさせ給。傳教大師の法華經をから(讀)せさせ
 給し時はむらさき(紫)の袈裟を御布施にさづけさせ給。今日蓮は日本第
 一の法華經の行者なり其上身に一分のあやまちなし。日本國の一切衆生、法
 華經を誘じて無間大城にねつべきをたすけんがために申、法門なり。又大蒙古

國よりこの國をせむるならば天照大神正八幡とても安穩にねはすべきか。其
 上釋迦佛法華經を説給しかば多寶佛十方の諸佛菩薩あつまりて。日と日と
 月と月と星と星と鏡と鏡とをならべたるがごとくなりし時。無量の諸天並に
 天竺漢土日本國等の善神聖人あつまりたりし時。各各法華經の行者にをるか
 (疎略)なるまじき由の誓状まいらせよとせめられしかば。一一に御誓状を立
 られしがかし。さるにては日蓮が申すまでもなしいうぎ(急)いうぎこり誓状の
 宿願をとげ(遂)させ給べきに。いかに此處にはをちあわせ給はぬとたかだ
 か(高さ)と申す。さて最後には日蓮今夜頸切て靈山淨土へまいりてあらん時
 は。まづ天照太神正八幡こり起請を用ぬかみに候けれとさしきりて教主
 釋尊に申上候はんずる。いた(痛)しとねばさばいさ(いさ)いうぎ御計あるべし
 とて又馬にのりぬ。ゆい(由比)のはまにうちいでて御りやう(驚)のまへにいた
 りて又云。しばしとのばらこれにつぐ(告)べき人ありとて。中務三郎左衛門、
 尉と申す者のもとへ熊王と申す童子をつかわしたりしかばいさ(いさ)いでぬ。今夜
 頸切られへまかるなり。この數年が間願する事これなり。此娑婆世界にしてき
 じ(維)となりし時はたか(鷹)につかまれぬすみ(真)となりし時はねこにくらわ

れき。或はめ(妻)にこ(子)にかたきに身を失し事大地微塵より多し。法華經の御ためには一度失^タことなし。されば日蓮貧道の身と生^まれ父母の孝養心にたらず國の恩を報すべき力なし。今度頸^ネを法華經に奉^じて其功德を父母に回向せん。其あまりは弟子檀那等にはふく(配當)べしと申せし事これなりと申せしかば。左衛門尉兄弟四人馬の口にとりつきてこしごへ(腰越)たつ(龍)の口にゆきぬ。此にて有^らんずらんとをもうとこるに。案(案)は守兵士(守兵士)もうちまはりさわぎしかば。左衛門尉申^すやう只今なりとな(遊)く。日蓮申^すやう不かくのどのばらかなれほどの悦(悦)をばわらへかし。のかた(かた)をく(約束)をばたがへらるるぞと申せし時。江のし(江)のかた(かた)よ(よ)月のさ(さ)とくひかりたる物まり(鞠)のやうにて辰巳のかた(かた)戌亥のかたへひかりわたる。十二日の夜の明けぐれ(味爽)人の面(面)もみ(み)ざりしが。物のひかり月よ(夜)のやうにて人人の面もみなみゆ。太刀取(太刀取)目くらみたふれ臥(つ)兵(兵)共(共)ち怖(おそ)れけう(醒)め(醒)めて一町計(一町計)はせのき。或は馬よりをりてかしてま(ま)り或は馬(馬)上(上)にてう(う)す(ま)り(躊躇)れるもあり。日蓮申^すやういかにとのばらか(か)る大(大)に禍(わざ)なる召人(めしや)にはとを(遠)のく(近)打(打)ちよ(れ)や打(打)ちよ(れ)やとたかたか(か)とよ(ば)われ(れ)もい(う)ぎ(ぎ)よ(る)人(人)もな

し。さてよ(夜)あ(あ)げ(げ)ば(ば)い(い)か(か)に(に)頸(けい)切(き)べ(べ)く(く)わ(わ)い(い)る(る)ぎ(ぎ)切(き)べ(べ)し。夜明(やあ)な(な)ば(ば)み(み)ぐる(る)し(見)苦(く)かり(り)なん(ん)と(と)す(す)め(め)勤(勤)し(し)か(か)も(も)ど(ど)か(か)くの(の)へ(へ)ん(ん)じ(じ)(返)事(事)も(も)な(な)し。はるか計(り)あり(り)て云(い)く(く)さ(さ)か(か)み(み)(相)撲(撲)の(の)ち(ち)依(依)智(智)と申(と)申(と)ころ(ころ)へ入(い)せ給(い)へと申(と)申(と)。此(こ)は道(みち)知(し)る(る)者(もの)な(な)し(し)さ(さ)う(う)ち(ち)(先)打(うち)す(す)べ(べ)しと申(と)申(と)もう(もう)つ(つ)人(ひと)も(も)な(な)かり(り)しかば。さてやす(やす)ら(ら)う(小)懸(懸)は(は)ど(ど)に(に)或(た)兵(ひょう)士(し)の云(い)く(く)り(り)れ(れ)こ(こ)う(う)の道(みち)にて候(ま)へと申(と)申(と)しかば。道(みち)にま(ま)か(か)せて(て)ゆ(ゆ)く。午(ご)の時(とき)計(けい)に(に)む(む)ち(ち)(依)智(智)と申(と)申(と)ころ(ころ)へゆ(ゆ)き(き)つ(つ)たり(り)しかば。本(ほん)間(ま)の六(む)郎(ら)左(さ)衛(ゑ)門(もん)が(が)い(い)へ(へ)入(い)り(り)ぬ(ぬ)。酒(さけ)と(と)り(り)よ(よ)せ(せ)て(て)もの(もの)ふ(ふ)き(き)も(も)に(に)ま(ま)あ(あ)り(り)しかば。各(各)か(か)へ(へ)る(る)と(と)て(て)か(か)う(う)な(な)た(た)れ(れ)(低)頭(とう)手(て)を(を)あ(あ)さ(さ)へ(へ)て(て)申(と)申(と)や(や)う。この(この)は(は)ど(ど)は(は)い(い)か(か)なる(る)人(ひと)にて(て)や(や)を(を)ば(ば)す(す)ら(ら)ん。我(わ)等(ら)が(が)た(た)の(の)み(み)て(て)候(ま)阿(あ)彌(あ)陀(だ)佛(ぶつ)を(を)う(う)し(し)ら(ら)せ(せ)給(い)う(う)け(け)給(い)ら(ら)れ(れ)ば(ば)い(い)く(く)み(み)ま(ま)ら(ら)せ(せ)て(て)候(ま)の(の)あ(あ)たり(り)(親)を(を)が(が)み(み)ま(ま)い(い)ら(ら)せ(せ)候(ま)の(の)事(こと)も(も)を(を)見(み)て(て)候(ま)へ(へ)ば(ば)。た(た)う(う)と(と)さ(さ)に(に)と(と)し(し)こ(こ)る(る)申(と)申(と)る(る)念(ねん)佛(ぶつ)は(は)す(す)て(て)候(ま)ぬ(ぬ)と(と)て(て)ひ(ひ)う(う)ち(ち)ふ(ふ)ぶ(ぶ)ろ(ろ)(火)打(うち)鐘(かね)より(より)す(す)ず(す)珠(たま)數(かず)と(と)り(り)い(い)だ(だ)して(して)す(す)つ(つ)る(る)者(もの)あり。今(いま)は(は)念(ねん)佛(ぶつ)申(と)申(と)と(と)せ(せ)い(い)じ(じ)や(や)う(誓)狀(じやう)を(を)た(た)つ(つ)る(る)者(もの)も(も)あり。六(む)郎(ら)左(さ)衛(ゑ)門(もん)が(が)郎(ら)從(じゆ)番(ばん)を(を)ば(ば)う(う)け(け)と(と)り(り)ぬ(ぬ)。さ(さ)ぬ(ぬ)も(も)ん(ん)の(の)と(と)よ(よ)う(左)衛(ゑ)門(もん)尉(ゑ)も(も)か(か)へ(へ)り(り)ぬ(ぬ)。其(その)日(ひ)戌(い)の時(とき)計(けい)に(に)か(か)ま(ま)くら(ら)(鎌)倉(倉)より(より)上(かみ)の御(ご)使(し)と(と)て(て)た(た)て(て)ぶ(ぶ)み(み)(立)文(ぶん)を(を)も(も)つ(つ)て(て)來(き)ぬ(ぬ)。頸(けい)切(き)

どうかさね(重)たる御使かともものふどもはをもひてありし程に。六郎左衛門が代右馬、じようと申者立ぶみもちてはしり來りひざまづ(跪)ひて申す。今夜にて候べしあらあさましやと存て候つるにかゝる御悦の御ふみ來候。武藏守殿は今日卯時にあたみ(熱海)の御ゆ(湯)へにて候へば。いろざあやなき(無益)事もやとまづこれへはしりまいりて候と申す。かまくらより御つかひは二時にはしりて候。今夜の内にあたみの御ゆへははしりまいるべしとてまかりいでぬ。追状云々此人はとが(失)なき人なり。今しばらくありてゆる(赦)させ給へしあやまち(過)しては後悔あるべしと云云。

鈔一四九 壽二五三 上三四 拾三九 扶九二

其夜は十三日兵士ども數十人坊の邊り並に大庭になみ

自是以下古米騷三星下鈔一而出出二錄内十四卷初紙一啓二五一 註一五二

出でて月に向ひ奉りて。自我偈少少よみ奉り諸宗の勝劣法華經の文あらわら申して。抑今の月天は法華經の御座に列りまします名月天子がかし。寶塔品にして佛敕をうけ給と囑累品にして佛に頂をなで(摩)られまいらせ。如三世尊の敕當三具奉行と誓状をたてし天がかし。佛前の誓は日蓮なくば虚くてこりをばすべけれ。今かゝる事出来せばいろざ悦をなして法華經の行者に

もかはり佛敕をもはたして誓言のしるし(驗)をばとげ(送)させ給へし。いかに今しるしのなきは不思議に候ものかな。何なる事も國になくしては鎌倉へもかへらんとお思はず。しるしころなくともうれし(懽)がをにて澄渡らせ給へはいかに。大集經には日月不現明とどかれ仁王經には日月失度とどかれ最勝王經には三十三天各生三瞋恨とどころ見侍る。いかに月天いかにか月天とせめしかば。其しるしにや天より明星の如なる大星下りて前の梅の木のかかりてありしかば。ものふども皆るん(縁)よりとびをり或は大庭にひれふ(平伏)し或は家のうしろ(後)へにげ(逃)ぬ。やがて即天かきくもりて大風吹きて江の島のなるとて空のひびく事大なるつづみ(鼓)を打つがごとし。夜明ければ十四日卯時に十郎入道と申すもの來りて云る。昨日の夜の戌の時計にかうどの(守殿)に太なるさわぎあり。陰陽師を召して御うらなひ候へば。申せしは大に國みだれ候べし此御房御勘氣のゆへなり。いろざいろざ召かわさずんば世の中いか候へかるらんと申せば。ゆりさせ給へ候と申す人もあり。又百日の内軍あるべしと申つればうれを待てしとも申す。依智にして二十餘日其間鎌倉に或は火をつくる事七八度或は人をころす事ひまなし。讒言の

者共の云、日蓮が弟子共の火をつくるなりと。さもあるらんとて日蓮が弟子等を鎌倉に置、べからずとて二百六十餘人にする(記)さる皆遠島へ遣すべし。ろ(牢)にある弟子共をば野をばねらるべしと聞ふ。さる程に火をつくる者は持齋念佛者が計り事なり。其由はしげければかかず。同十月十日に依智を立、て同十月二十八日に佐渡國へ著ぬ。十一月一日に六郎左衛門が家のうちしろみの家より塚原と申、山野の中に。洛陽の蓮臺野のやうに死人を捨つる所に一間四面なる堂の佛もなし。上はいたま(板間)あはず四壁はあばらに雪ふりつもあり(障)て消る事なし。かゝる所にしきかは(敷皮)打しき養うちきて夜をわかし日をぐらす。夜は雪雷電ひまなし晝は日の光もささせ給はず心細かるべしすまる(住居)なり。彼李陵が胡國に入りてがんからくつ(藤)にせめられし。法道三藏の徽宗皇帝にせめられて面にかなやき(火印)をさされて。江南にはな(放)たれしも只今とればゆ。あられし(釋)や檀王は阿私仙人にせめられて法華經の功德を得給。不輕菩薩は上慢の比丘等の杖にあたりて一乗の行者といはれ給ふ。今日蓮は末法に生て妙法蓮華經の五字を弘、てかゝるせめ(責)にあへり。佛滅度後二千二百餘年が間恐は天台智者大師も一切世

間多怨難信の經文をば行じ給はず。數數見擯出の明文は但日蓮一人也。一句一偈我皆與授記は我也。阿耨多羅三藐三菩提は疑なし。相摸守殿こり善知識よ平ノ左衛門こり提婆達多も。念佛者は瞿伽利尊者持齋等は善星比丘。在世は今にあり今は在世なり。法華經の肝心は諸法實相とどかれて本末究竟等とのべ(宣)られて候は是也。摩訶止觀第五云、行解既勤三障四魔紛然競起。又云、如下猪、指金山、衆流、入海、薪、熾、於火、風、益、求羅耳等云云。釋の心は法華經を教のごとく機に叶ひ時に叶、て解行すれば七ツの大事出來す。其中は天子魔とて第六天の魔王或は國主或は父母或は妻子或は檀那或は惡人等について。或は隨つて法華經の行をさ(支)或は違してさうべき事也。何れの經をも行せよ佛法を行するには分分に隨、て留難あるべし。其中に法華經を行するには強盛にさうべし。法華經ををしへの如く時機に當、て行するに殊に難あるべし。故に弘決ノ八云、若知衆生不出、生死、不慕佛乘、魔於是人猶生親、想等云云。釋の心は人善根を修すれども念佛眞言禪律等の行をなして法華經を行せざれば。魔王親のれもひをなして人間につきて其人をもてなし供養す。世間の人に實の僧と思はせんが爲也。例せば國主のた

とむ僧をば諸人供養するが如し。されば國主等のかたきにするは既に正法を行するにてある也。釋迦如來の御ためには提婆達多より第一の善知識なれ。今の世間を見るに人をよくなす(成)ものはかたうど(方人)よりも強敵が人をばよくなしけるなり。眼前に見ゆたり此鎌倉の御一門の御繁昌は義盛と隱岐の法皇ましまさずんば争か日本の主となり給へべき。されば此人人は此御一門の御ためには第一のかたうどなり。日蓮が佛にならん第一のかたうどは景信法師には良觀 道隆 道阿彌陀佛 平ノ左衛門ノ尉 守殿ましまさずんば。争か法華經の行者とはなるべきと悦ぶ。かくてすす程に庭には雪つもりて人もかよはず堂にはあらし風より外はをどづるものなし。眼には止觀法華をさらし口には南無妙法蓮華經と唱へ。夜は月星に向ひ奉りて諸宗の違目と法華經の深義を談ずる程に年もかへりぬ。いづく(何處)も人の心のはかな(果敢)さは。佐渡の國の持齋念佛者の唯阿彌陀佛 生喻房 印性房 慈道房等の數百人より合て會議すと承る。聞ふる阿彌陀佛の大怨敵一切衆生の惡知識の日蓮房此國にながされたり。なにとなくとも此國へ流されたる人の始終いけ(活)らるる事なし。設ひいけ(活)らるるともかへ(歸)る事なし。又打てころしたれども御どがめ(咎)なし。

なし。塚原と云ふ所に只一人あり。いかにがう(剛)なりとも力つよく(強)とも人なき處なれば集つていころせ(射殺)かしと云ふものもありけり。又なにとなくとも頸を切らるべかりけるが。守殿の御臺所の御懷妊なればしばらくさられず終には一定ときく。又云、六郎左衛門ノ尉殿に申てき(切)ずんばはかちうべしと云ふ。多の義の中にこれについて守護所に數百人集りぬ。六郎左衛門ノ尉の云、上より殺しまいすまじき副狀下りてあなづ(獲)るべき流人にはあらず。あやま(過)ちあるならば重連が大なる失なるべし。うれよりは只法門にてせめ(攻)よかしと云ければ。念佛者等或は浄土の三部經或は止觀或は眞言等を。小法師等が頸にかけさせ或はわき(腋)にはさ(挟)ませて正月十六日にあつまる。佐渡國のみならず越後 越中 出羽 奥州 信濃等の國國より集れる法師等なれば。塚原の堂の大庭山野に數百人六郎左衛門ノ尉兄第一家。さらぬもの百姓の入道等かすをしらす集りたり。念佛者、口口に惡口をなし眞言師は面面に色を失ひ天台宗が勝つべきよしをのしる。在家の者どもは聞ふる阿彌陀佛のかたきよとのしり。さわぎひびく事震動雷電の如し。日蓮は暫くさはがせて後各各しづませ給へ。法門の御爲にころ御渡りあるらめ

悪口等よしなしと申せしかば。六郎左衛門を始て諸人然るべしとて。悪口
 せし念佛者をばうくび(素首)をつきいだ(突出)しぬ。さて止観真言念佛の法門
 一一にかれが申様をでつしあげ(塵揚)て承伏せさせては。ちやうとはつめ(詰)
 つめ一言二言にはすぎず。鎌倉の眞言師 禪宗念佛者 天台の者よりもはか
 なきものどもなれば只思ひやらせ給へ。利劔をもてうり(瓜)をきり大風の草
 をなび(靡)かすが如し。佛法のねるかなるのみならず或は自語相違し。或は
 經文をわすれて論と云ひ釋をわすれて論と云ふ。善導が柳より落テ弘法大師
 の三鈷を投たる大日如來と現たる等をば。或は妄語或は物にくるへる處を一
 一にせめたるに。或は悪口し或は口を閉ぢ或は色を失ひ。或は念佛ひ(辯)が事
 也けりと云ふものもあり。或は當座に袈裟平念珠をすてて念佛申まじさよし
 誓狀を立る者もあり。皆人立チ歸る程に六郎左衛門尉も立チ歸る一家の者も
 返る。日蓮不思議一云はんと思て六郎左衛門尉を大庭よりよび(呼)返して
 云。いつか鎌倉へのば(登)り給へべき。かれ答テ云。下人共に農せさせて七月の
 比と云云。日蓮云。弓箭とる者はを、やけの御大事にあひて所領とも給へり候
 をころ。田畠つくとば申せ。只今いくと(軍)のあらんするに急さうちのは

高名して所知を給らぬか。さすがに和殿原はさがみ(相摸)の國には名ある
 侍(さむらい)がかし。田舎にて田のくりいくさにはづれ(外)たらんは恥なるべしと申せ
 しかば。いかにや思ひげにてわはて(急遽)てもものいはず。念佛者持齋在家の
 者どももなにと云ふ事やと怪(あや)しむ。さて皆歸しかば去年の十一月より勘へた
 る開目抄と申文二卷造たり。頸切るるならば日蓮が不思議ととめ(留)んと
 思て勘へたり。此文の心は日蓮により(依)て日本國の有無はあるべし。譬へ
 ば宅に柱なければたまたま人に魂なければ死人也。日蓮は日本の人の魂
 也。平ノ左衛門既に日本の柱をたを(倒)しぬ。只今世亂てうれどもなくゆめ
 (夢)の如くに妄語出来して。此御一門としうちして後には佗國よりせめらるべ
 し。例せば立正安國論に委しきが如し。かやうに書付て中務三郎左衛門、
 尉が使にとらせぬ。のきたる弟子等もあらざ(強義)かなと思へども力及ば
 ざりげにてある程に。二月の十八日に島に船づく。鎌倉に軍あり京にもあり
 ろのやう申計なし。六郎左衛門尉其夜にはやふぬ(早舟)をもて一門相具し
 てわたる。日蓮にたな心を合せてたすけさせ給へ。去正月十六日の御言いか
 によと此程疑申つるにいくはどなく三十日が内にあひ候ぬ。又蒙古國も一

定渡り候へなん念佛無間地獄も一定にて候はんずらん。永く念佛申候まじと申せしかば。いかに云々とも相模守殿等の用ひ給はざらんには日本國の用ひまじ用ゐずは國必ず亡ぶべし。日蓮は幼若の者なれども法華經を弘めれば釋迦佛の御使がかし。わづかの天照大神正八幡など申は此國には重んずられども梵釋日月四天に對すれば小神がかし。されども此神人などをあやまち(過)ぬれば只の人を殺せるには七人半など申がかし。太政入道隱岐、法皇等のほるび給しは是也。此はうれにはにるべくもなし。教主釋尊の御使なれば天照大神正八幡宮も頭をかたふ(傾)け手を合せて地に伏し給べき事也。法華經の行者をば梵釋左右に侍り日月前後を照し給ふ。かゝる日蓮を用ゐるともあしく(悪)うやま(敬)はば國亡ぶべし。何況數百人にくませ二度まで流しぬ。此國の亡ん事疑なかるべけれども。且く禁をなして國をたすけ給へど。日蓮がひからればこゝろ今までは安穩にありつれどもはら(法)に過れば罰あたりぬるなり。又此度用ひずは大蒙古國より打手(うちて)を向て日本國ほるぼさるべし。ただ平ノ左衛門尉が好むわざわひなり。和殿原とても此島とても安穩なるまじき也と申せしかば。あさましげにて立ち歸ぬ。さて在

家の者ども申けるは此御房は神通の人にてましますかあられろしれろし。今は念佛者をもやしな(養)ひ持齋をも供養すまじ。念佛者良觀が弟子の持齋等が云々此御房は謀叛の内に入りたりけるか。さて且くありて世間しづまる。又念佛者集りて會議す。かう(斯)てあらんには我等かつたしぬ(賊死)べしいかにもして此法師を失はばや。既に國の者も大體つきぬいかんがせん。念佛者の長者、唯阿彌陀佛持齋の長者、性諭房、良觀が弟子、道觀等。鎌倉に走り登りて武藏守殿に申す。此御房島に候ものならば堂塔一字も候べからず僧一人も候まじ。阿彌陀佛をば或は火に入、或は河にながす。夜もひるも高き山に登りて日月に向て大音聲を放て上を呪咀し奉る。其音聲一國に聞ふと申る武藏守前司殿是をきき上へ申すまでもあるまじ。先國中のも日蓮房につくならば或は國をた(逐)ひ或はろ(牢)に入よと私の下知を下す。又下文下る。かくの如く三度。其間の事申さざるに心をもて計ぬべし。或は其前をどを(通行)れりと云つてろうに入、或は其御房に物をまいら(進)せけり。云つて國をたひ或は妻子をとる。かくの如くして上へ此由を申されければ。案に相違して去文永十一年二月十四日、御赦免の狀同三月八日に島につきぬ。念佛

著等僉議して云、此れ程の阿彌陀佛の御敵善導和尚 法然上人をのる(駕)ほどの者が。たまたま御勘氣を蒙りて此島に放されたるを御赦免あるとていけ(生)て歸さんは心う(邊)事也と云つて。やうやうの支度ありしかども。何なる事はや有けん思はざるに順風吹き來りて島をばたちしかば。あはい(間合)あしければ百日五十日にもわたらず。順風には三日なる所を須臾の間に渡りぬ。越後のこう(國府) 信濃の善光寺の念佛者持齋眞言等は雲集して僉議す。島の法師原は今までいけてかへす(生還)は人かたたい(を馬)也。我等はいかにも生身の阿彌陀佛の御前をば(邊)をす(通)まじと僉議せしかども。又越後のこうより兵者どもあまた日蓮に(添)て善光寺をとりしかば力及ばず。三月十三日に島を立上りて同三月二十六日に鎌倉へ打入りぬ。同四月八日平左衛門尉に見参しぬ。さき(前)にはにるべくもなく威儀を和らげてただし(正)くする上。或入道は念佛をとふ或俗は眞言をとふ或人は禪をとふ。平左衛門尉は爾前得道の有無をとふ。一一に經文を引いて申す。平左衛門尉は上の御使の様に大蒙古國はいつか渡り候へきと申す。日蓮答云、今年は一定也。それにては日蓮已前より勘へ申すをば御用ひなし。譬は病の起りを知らざらる人の

病を治せば彌よ病は倍增すべし。眞言師だにも調伏するならば彌よ此國軍にまく(負)べし穴賢穴賢。眞言師摠じて當世の法師等をもて御祈り有るべからず。各各は佛法をしらせ給つてねわすにころ申す。もしらせ給はめ。又何なる不思議にやあるらん佗事にはことにして日蓮が申す事は御用ひなし。後に思合させ奉らんが爲に申す。隱岐ノ法皇は天子也權ノ大夫殿は民がかし。子の親をあたまんをば天照大神うけ給はんや。所從が主君を敵とせんをば正八幡は御用ひあるべしや。いかなりければ公家はまけ給ける。此は偏に只事にはあらず。弘法大師の邪義 慈覺大師 智證大師の僻見をまことと思つて。叡山東寺園城寺の人人の鎌倉をあたみ給へしかば還著於本人とて其失還て公家はまけ給ぬ。武家は其事知らずして調伏も行はざればかち(勝)ぬ。今又かくの如くなるべし。る(假夷)は死生不知のもの安藤五郎は因果の道理を辨へて堂塔多く造りし善人也。いかにとして頸をばるぐにとられぬる。是をもて思つに此御房たちだに御祈りあらば入道殿事にあひ給ぬと覺候。あなかしこあなかしこ。さいはざりけるとればせ候などしたか(剛強)に申付候ぬ。自是以下古來號二法印祈雨鈔一而出二

録内二十三卷初紙一啓三〇九 鈔一八三六
語三五三 下三三 拾五三三 扶一一三三

さてかへり(歸)さき(前)聞しかば同四月十日より

阿彌陀堂法印に仰付られて雨の御いのりあり。此法印は東寺第一の智人を
 みる(御室)等の御師弘法大師 慈覺大師 智證大師の眞言の祕法を鏡にかけ。天
 台華嚴等の諸宗をみな胸にうかべたり。うれに隨て十日よりの祈雨に十一
 日に大雨下りて風ふかず雨しづかにて一日一夜ふりしかば。守殿御感のお
 まりに金三十兩むま(馬)やうやうの御ひきで物ありときこふ。鎌倉中の上下
 萬人手をたゞき口をすくめ(蹙)てわらうやうは。日蓮ひが法門申すすでに頸
 をぎられんとせしが。とかう(左右)してゆり(免)たらばさではなくして念佛禪
 をうしるのみならず。眞言の密教なんどもうしるゆへにかゝる法のしるし
 (驗)めでたしとのしりしかば。日蓮が弟子等けう(興)さめてこれは御あら義
 と申せし程に。日蓮が申やうはしばしま(待)て弘法大師の惡義まことにて國
 の御いのり(祈)となるべくば。隱岐ノ法皇ころいくさ(軍)にかち給はめ。をむる
 (御室)最愛の兒(ち)せいたか(勢多進)も頸をさられざるらん。弘法の法華經を華嚴
 經にをとれりとかける狀は十住心論と申文(ま)にあり。壽量品の釋迦佛をば凡
 夫なりとする(記)されたる文は祕藏寶鑰に候。天台大師をぬす(盜)人とかける
 狀は二教論にあり。一乘法華經をとける佛をば。眞言師はさもの(履)とり

も及はずとかける狀は正覺房が舍利講の式にあり。かゝる僻事(ひがこと)を申人の弟子
 阿彌陀堂の法印が日蓮にかつならば。龍王は法華經のかたきなり梵釋四王は
 せめられなん子細(こま)あらんずらんと申せば。弟子どものいはくいかなる子細
 のあるへ(ま)ごとをこつ(嘲)笑し程に。日蓮云、善無畏も不空も雨のいのりに
 雨はふりたりしかども大風吹てありけるとみゆ。弘法は三七日すぎて雨をふ
 らしたり。此等は雨ふらさぬがごとし。三七二十一日にふらぬ雨やあるべき
 設ふりたりともなんの不思議があるべき。天台のごとく千觀なんのごとく
 一座なんごころたう(原)とけれ。此は一定やう(機)あるべしといふもあはせず
 大風吹來る。大小の舍宅堂塔古木御所等を或は天に吹のぼせ或は地に吹
 くれ。うらには大なる光(物)とび地には棟梁みだれたり。人人をもふきこる
 (吹)殺し牛馬を(た)ふれぬ。惡風なれども秋は時なればなをゆる(許)すかた
 もあり此は夏四月なり。其上(うへ)日本國にはふかず但關東八箇國八箇國にも武藏
 相摸の兩國と兩國の中には相州につよくふく。相州にもかまくら(鎌倉)かまぐ
 らにも御所若宮建長寺極樂寺等につよくふけり。ただ事どもみへすひとへに
 をのいのりのゆへにやとをばへてわらひ口すめせし人人もけう(興)さめて

ありし上。我弟子どももあら不思議やと舌をふる。本より(期)せし事なれば三度國をいさめんにもちるすば國をさるべしと。されば同五月十二日にかまぐちをいでて此山に入り。同十月に大蒙古國よせて壹岐對馬の二箇國を打取らるのみならず。太宰府もやぶられて少貳入道大友等さきにけ(聞逃)ににけ其外の兵者ども其事どもなく大體打られぬ。又今度よせるならばいかに此國よはよは(弱)と見ゆるなり。仁王經には聖人去時七難必起等云云。最勝王經云、由愛敬惡人治罰善人故乃至佗方怨賊來國人遭喪亂等云云。佛説まことならば此國に一定惡人のあるを國主たつとませ給て善人をあだませ給にや。大集經云、日月不現明四方皆亢旱如是不善業惡王惡比丘毀壞我正法云云。仁王經云、諸惡比丘多求名利於國王太子王子前自説破佛法因緣破國因緣其王不別信聽此語是為破佛法破國因緣等云云。法華經云、濁世惡比丘等云云。經文まことならば此國に一定惡比丘のあるなり。夫寶山には曲林をさ(後)る大海には死骸をとめず。佛法の大海一乘の寶山には五逆の瓦礫四重の濁水をば入るれども誹謗の死骸と二闍提の曲林をばをさめざるなり。されば佛法を習人後世をねがは

ん人は法華誹謗をねるべし。皆人をばするやうはいかにか弘法慈覺等をうしる人を用へべきと。佗人はさてをさぬ安房國の東西の人人は此事を信すべき事なり。眼前の現證あり。いのもりの圓頓房清澄の西堯房道義房かたうみの實智房等はたうと(實)かりし僧がかし。此等の臨終はいかながありけんと尋へし。これらはさてをさぬ。圓智房は清澄の大堂にして三箇年が間一字三禮の法華經を我とかきたてまつりて十卷をうら(讀)にをばへ。五十年が間一日一夜に二部づつよまれしがかし。かれをば皆人は佛になるべしと云云。日蓮より念佛者よりも道義房と圓智房とは無間地獄の底にをつべしと申たりしか。此人人の御臨終はよく候けるかいかに。日蓮なくば此人人をば佛になりぬらんとをばすべけれ。これをもつてしるしめせ。弘法慈覺等はあさましき事どもはあれども。弟子ども隠せしかば公家にもしらせ給はず。末の代はいよいよあをく(仰)なり。あらはす人なくば未來永劫までもさであるべし。拘留外道は八百年ありて水となり。迦毗羅外道は一千年すぎてこそ其失はあらわれしか。夫人身をうくる事は五戒の力による。五戒を持てる者をば二十五の善神これをまほる上。同生同名と申して二の天生れしよりこ

のかた左右のかた(肩)に守護するゆへに失なくて鬼神おたむことなし。しかるに此國の無量の諸人なげきをなすのみならず。ゆきつしま(豊後對馬)の兩國の人皆事にあひぬ太宰府又申はかりなし。此國はいかなるとか(失)のあるやらんしらまほし(欲)き事なり。一人二人より失もあるらめりこばく(若干)の人人いかん。これひとへに法華經をさぐ(下)る弘法、慈覺、智證等の末の眞言師。善導、法然が末の弟子等。達磨等の人人の末の者ども國中に充滿せり。故に梵釋四天等、法華經の座の誓狀のごとく頭破作七分の失にあてらるるなり。疑云、法華經の行者をあだむ者は頭破作七分ととかれて候に。日蓮房をりしれども頭もわれぬは。日蓮房は法華經の行者にはあらざるかと申は道理也とをばへ候はいかん。答云、日蓮を法華經の行者にてなしと申さば。法華經をなげすてよとかけける法然等、無明の邊域としるせる弘法大師、理同事勝と宣たる善無畏、慈覺等が法華經の行者にてあるべきか。又頭破作七分と申事はいかなる事ぞ。刀をもてきるやうにわるるとしれるか。經文には如阿梨樹枝とてころとかれたれ。人の頭に七滴あり七鬼神ありて一滴食へば頭をいたむ。三滴を食へば壽絶とす七滴皆食へば死するなり。今の世の人人は皆

頭(阿梨樹)の枝のごとくにわれたれども惡業ふかくしてしらざるなり。例せばてをい(手負)たる人の或は酒にゑひ或はね(癪)いりぬればをぼねざるが如し。又頭破作七分と申は或は心破作七分とも申して。頂の皮の底にある骨のひびたふ(響破)るなり。死する時はわるる事もあり。今の世の人人は去正嘉の大地震文永の大彗星に皆頭われて候なり。其頭のわれし時せひせひやみ(喘息)五藏の損せし時あかさ(赤痢)腹をやみしなり。これは法華經の行者をりしりしゆへにあたりし罰とはしらすや。自是已下以三餘内二十卷三十六紙光日之未文二百四十餘字而改爲三此章之斷落されば鹿は味ある故に人に殺され龜は油ある故に命を害せらる(女人はみめ形よければ嫉む者多し。治國者には佗國の恐れあり有財者は命危し。法華經を持つ者は必成佛し候。故に第六天の魔王と申三界の主此經を持つ人をば強に嫉み候也。此魔王疫病の神の目にも見ぬずして人に付候やうに。古酒に人の酔候如く國主父母妻子に付て法華經の行者を嫉むべしと見ぬて候。少も不違、當時の世にて候。日蓮は南無妙法蓮華經と唱る故に二十餘年所を追はれ二度まで御勘氣を蒙り。最後には此山にこもる。此山の體たらくは西は七面の山東は天子のたけ(櫻)北は身延、山南は鷹取の山、四ツの山高きこと天に付

鳥さかしまこと飛鳥もとびがたし。中に四ツの河あり所謂富士河 早河 大白河 身延河也。其中に一町ばかり間の候に庵室を結て候。晝は日のみす夜は月を拜せず冬は雪深く夏は草茂り。問、人希なれば道をふみ(踏)わくることかたし。殊に今年(今)は雪深くして人間、ことなし。命を期として法華經計りをたのみ奉り候に御音信ありがたく候。しらす釋迦佛の御使歎過去の父母の御使歎と申、ばかりなく候。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

○光日房御書

啓二九一

鈔一八一七

語三〇〇

記下二

拾五三

扶一〇八〇

去文永八年太歲辛未九月のころより御勘氣をかほりて北國の海中佐渡の嶋にはなたれたりしかば。なにとなく相州鎌倉に住には生國なれば安房國はこひ(戀)しかりしかども。我國ながらも人の心もいかにとやむつ(罷)びにく(悪)くありしかば。常にはかよう事もなくしてすぎしに。御勘氣の身となりて死罪となるべかりしが。しばらく國の外にはなたれし上はをぼるげ(小慈)ならではかまくら(鎌倉)へはかへるべからず。かへらずば又父母のはか(墓)をみる身となりがたしとをもひつづけしかば。いまたらとびたつばかりくやくしく

てなごかかゝる身とならざりし時。日にも月にも海もわたり山をもこゑて父母のほかをもみ。師匠のありやう(有様)をもとひをとづれ(音信)ざりけんとなげかしくて。彼蘇武が胡國に入りて十九年かり(雁)の南へとびけるをうらやみ。仲丸が日本國の朝使としてもろこし(唐)にわたりてありしが。かへされずしてとし(年)を経しかば月の東に出たるをみて。我國みかさ(御笠)の山にも此月は出させ給て。故里の人も只今月に向てながむらんと心をすましてけり。此もかくをもひやりし時我國より或人のびん(便)につけて衣をたびたりし時。彼の蘇武がかりのあし此は現に衣あり。にるべくもなく心なくさみて候しに。日蓮はさせる失あるべしとはをもはねども。此國のならひ念佛者と禪宗と律宗と眞言宗にすかされぬるゆへに。法華經をば上にはたうとむよしをふるまへ心には入るるゆへに。日蓮が法華經をいみじきよし申せば威音王佛の末の末法に不輕菩薩をにくみしごとく。上一人より下萬人にいたるまで名をもきかじまして形をみる事はをもひよらず。さればたとひ失なくともかくなさるる上はゆるしがたし。ましていわうや日本國の人の父母よりもるく日月よりもたかくたのみたまへる念佛を無間の業と申。禪宗は天魔の

所爲 眞言は亡國の邪法 念佛者禪宗律僧等が寺をばやさはらひ念佛者どもが
 頸をはねらるべしと申上。故最明寺 極樂寺の 兩入道殿を阿鼻地獄に墮給
 たりと申候との大禍ある身なり。此等程の大事を上下萬人に申つけられぬ
 る上は。設ひららごととなりとも此世にはうかびがたし。いかにいれやこれ
 はみな朝夕に申晝夜に談せしうへ。平ノ左衛門、周等の數百人の奉行人に申
 きかせいかはとが(科)に行へとも申やむまじきよしした、かにいゝるきか
 せぬ。されば大海のうこのちびさ(千引)の石はうかぶとも天よりふる雨は地
 にをちすとも。日蓮はかまくらへは還るべからず。但し法華經のまことにね
 はしまし日月我をすて給はずば。かへり入又父母のはかをもみるへんもあ
 なんと心づよくをもひて。梵天帝釋日月四天はいかになり給ぬるやらん。天
 照大神正八幡宮は此國にをはせぬか。佛前の御起請はひなしくて法華經の行
 者をばすて給か。もし此事叶はずば日蓮が身のなにもならん事はをしから
 ず。各各現に教主釋尊と多寶如來と十方諸佛の御寶前にして誓狀を立給し
 が。今日蓮を守護せずして捨給ならば正直捨方便の法華經に大妄語を加へ給
 へるか。十方三世の諸佛をたぼらかし奉れる御失は。提婆達多が大妄語にもて

へ瞿伽利尊者が虚誑罪にもまされたり。設ひ大梵天として色界頂に居し于
 眼天といはれて須彌頂にればすとも。日蓮をすて給ならば阿鼻の炎には
 たさぎとなり無間大城にはいづるご(期)ればせじ。此罪をうるしとればさば
 いろぎいろぎ國土にするしをいたし給へ。本國へかへし給へと高き山にのぼ
 りて大音聲をはなちてさげびしかば。九月の十二日に御勘氣十一月に謀反の
 ものいできたり。かへる年の二月十一日に日本國のかため(警固)たるべき大
 將どもよしなく打ころされぬ。天のせめという事あらはなり。此にやをどる
 かれけん弟子どもゆるされぬ。而どもいまたゆりざりしかばいよいよ強盛に
 天に申せしかば。頭の白鳥とび來ぬ。彼燕たむ(丹)太子の馬鳥のれい(例)
 日藏上人の山がらすかしらもしろくなりにけり我かへるべき時やきぬらん
 どながめし此なりと申もあへず。文永十一年二月十四日の御赦免狀同三
 月八日に佐渡の國につきぬ。同十三日に國を立てまらら(綱羅)とらうつ(津)に
 をりて十四日はかのつにとどまり。同十五日に越後の寺どまり(泊)のつにの
 くべきが。大風にはなたれさいわひ(幸)にふつかち(二日程)をすぎてかしはさき
 (相時)につきて。次日はこち(國府)につきて十二日へて三月二十六日に鎌倉

へ入。同四月八日に平ノ左衛門ノ尉に見参す。本よりせし事なれば日本國のほろびんを助がために三度いさめん御用なくば。山林にまじわるべきよし存せしゆへに同五月十二日に鎌倉をいでぬ。但本國にいたりて今一度父母のはかをもみんとをもへども。にしき(難)をきて故郷へはかへれといふ事は内外のをきてなり。させる面目もなくして本國へいたりなば不孝の者にてやあらんすらん。これはどのかた(難)かりし事だにもやぶれてかまぐらへかへり入身なれば。又にしきをきるへんもやあらんすらん。其時父母のはかをもみよかすとふかくをもうゆへにいまに生國へはいたらねども。さすがこひしくて吹風立くも(雲)までも東のかたと申せば庵をいでて身にふれ庭に立てみるなり。かゝる事なれば故郷の人は設心よせにねるはぬ物なれども。我國の人といへばなつかしくてはんべるところに。此御ふみを給て心もあらずしていらざる(急)いらざる(赦)きてみ候へば。をとくし(一昨年)の六月の八日にいや(彌)四郎にをくれ(後)てとかかれたり。御ふみもひらかざりつるまではうれし(難)くてありつるが。今此のことはをよみてころなにはかくいらざる(急)いらざる(赦)が子のはこ(箱)なれや。あけてくやし(悔)きも

のかな。我國の事はうく(憂)つらくあたりし人のすへ(末)までもをろかならずをもうに。ことさら此人は形も常の人にはすぎてみへうちをもひたるけしき(氣色)もかたくな(頑固)にもなしと見しかども。さすが法華經のみぞ(御座)なればしらぬ人人あまたありしかば言もかけずありしに。經はて(果)させ給て皆人も立かへる此人も立かへりしが。使を入れて申せしは安房國のあまつ(天津)と申とこの者にて候が。をさなく(幼少)より御心ざしをもひまいらせて候上。母にて候人もをろか(疎略)ならず申なれ(馴)なれしき申事にて候へどもひろかに申べき事の候。とさざる(急)まひりて次第になれ(馴)まいらせてこり申入べきに候へども。ゆみや(弓箭)とる人にみやづかひ(近世)てひま候はぬ上。事さう(急)になり候ぬる上はをりれをかへりみ(願)ず申すことまごま(細々)とさて(聞)ぬしかば。なにどなく生國の人なる上りのあたり(邊)の事ははばかるべきにあらずとて。入たてまつりてこまごまとこしかた(通方)ゆくすへかたりて。のちには世間無常なりいつと申事をしらす。其上武士に身をまかせたる身なり。又ちか(近)く申かけられて候事のがれ(遁)がたし。さるにては後生ころをろろしく候へたすけさせ給へど。さこへしかば經文をひいて

申さかす。彼レのなげき申せしは父はさてをき候ぬ。やもめにて候はわレ母レをさしをきて前に立テ候はん事ころ不孝にをばへ候へ。もしやの事候ならば御弟子に申シつたへてたび候へとねんをろにあつらレ候へ候しが。ろのたびは事ゆへなく候へけれども後にむなしレ空クなる事のできたりて候けるにや。人間に生をうけたる人上下につけてうれへレ憂ヒなき人はなけれども。時にあたり人人にしたがひてなげきしなレ品クなり。譬へば病のならひは何の病も重くなりぬれば是にすぎたる病なしとをもうがごとし。主のわかレれをやレ親レのわかレれ夫妻のわかレれいづれかレなるべき。なれども生は又レ他レの主もありぬべし夫妻は又かはりレ我レぬれば心をやすレ休ムる事もありなレん。をやレこレ親子レのわかレれころ月日のへだつレ隔ルるまニにいまいまなげきふかりぬべくみへ候へ。をやレこのわかレれにもをやレはゆきて子はとレ留ルまるは同シ無常なれどもことばりにもや。をひレ老ルたるはわレ母レはとレまニりてわレきレ老ルき子のさレ前レにたつなレさけなき事なれば神も佛もうらめしや。いかなればをやレ子をかへさせ給テてさレきにはたてさせ給はず。ととめをかせ給テてなげかさせ給ラんと心うし。心なき畜生すら子のわかレれレしのびがたし。竹林精

舎ノ金鳥ハかひコ卵ノのためニ身をヤきル鹿野苑ノ鹿ハ胎内ノ子ヲをしミみて王ノ前にマいれり。いかにいワうや心あらん人ニをイてをやレされば王陵が母は子のためになつキ頭ノをくたレ碎キ。神堯皇帝ノ后ハ胎内ノ太子ノ御ために腹ヲやぶらせ給キ。此等ヲをもひつづけさせ給はんには。火にも入ル頭ヲもわりて我子ノ形ヲをみるべきならばをしからず。とこうればすらめとをもひやられてなみだレ涙ヲもととまらず。又御消息ニ云フ人をもころしたりし者なればいかやうなるところにか生シて候らんをばせをかほり候はんト云フ。夫ハ針ハ水にしずむ雨は空にととまらず。蟻ヲを殺スる者ハ地獄ニ入リ死ニにかばねレ屍ヲを切ルる者ハ惡道ニまぬかれず。何況キ人身をうけたる者ヲをころせる人をや。但シ大石モ海ニうかぶ船ノ力ヲなり大火もきゆる事水ノ用ニあらずや。小罪なれども懺悔セざれば惡道ニまぬかれず。大逆なれども懺悔すれば罪キへぬ。所謂粟ヲをつみレ摘ミたりし比丘は五百生が間牛トなるル爪ヲをつみし者ハ三惡道ニ墮リにキ。羅摩王ハ提提王ハ毗樓眞王ハ那臘沙王ハ迦帝王ハ毗舍佉王ハ月光王ハ光明王ハ日光王ハ愛王ハ持多人王ハ等ノ八萬餘人ノ諸王ハ皆父ヲを殺シて位ヲはツく。善知識はあはざれば罪キへずして阿鼻地獄ニ入リにキ。波羅奈城ニ惡人アリ其名ヲをば

阿逸多あいつたといふ母をおひおひ(愛)せしゆへに父を殺し妻とせり。父が師の阿羅漢ありて教訓せしかば阿らかむ(羅漢)を殺す。母又佗の夫あつちにとつ(嫁)ぎしかば又母をも殺つ。具つよに二逆罪をつくりしかば鄰里の人うとみ(疎)しかば一身たもちがたくして祇洹精舎ぎわんしやうしゃにゆいて出家をもとめしに。諸僧許ゆるざりしかば惡心強盛じやうじやうにして多の僧坊をやき(燒)ぬ。然ども釋尊に値あひ奉りて出家をゆるし給たまはる。北天竺に城あり細石となぐく彼城に王あり龍印といふ。父を殺してありしかども後に此をわたりて。彼國をすてて佛にまいりたりしかば佛懺悔を許ゆる給たまはる。阿闍世王はひととなり(成)三毒熾盛しじやうなり十惡ひまなし。其上父をころし母を害せんとし提婆達多を師として無量の佛弟子を殺ころぬ。惡逆のつむ(積)りに二月十五日佛の御入滅の日にあたりて。無間地獄の先相に七處に惡瘡出生して玉體しづか(安穩)ならず。大火の身をやくがごとく熱湯をくみかぐるがごとくなりしに。六大臣まいりて六師外道を召されて惡瘡を治すべざやう申まふ。今の日本國の人人の禪師 律師 念佛者 眞言師等を善知識とたのみて蒙古國を調伏し後生をたすからんとをもうがごとし。其上提婆達多は阿闍世王の本師也。外道の六萬藏佛法の八萬藏をう(諸)にして世間出世の

あきらかなる事日月と明鏡とに向むかがごとし。今の世の天台宗の碩學の顯密二道を胸にうかべ一切經をうらんせしがごとし。此等の人人諸大臣阿闍世王を教訓せしかば佛に歸依し奉た事なかりし程に。摩竭提まがたに天變度度かさなり地天しきりなる上大風大旱あばつ(魃)飢饉疫癘ひまなき上あ。佗國よりせめられてすでにかうとみねしに惡瘡すら身に出でししかば。國土一時にほろびぬとみねし程に。俄に佛前にまいり懺悔して罪さぬしなり。自こ是已下こ以こ三條内二十三之末文二百餘字一改置て而爲二此綱之結末一これらはさてをき候ぬ。人のをやは惡人なれども子 善人なればをやの罪ゆるす事あり。又子惡人なれども親 善人なれば子の罪ゆるさるる事あり。されば故彌四郎殿は設た惡人なりともうめ(生)る母釋迦佛の御寶前にして晝夜なげきとぶらはば争か彼人うかばざるべき。いかにいわうや彼人は法華經を信じたりしかばをや(親)をみらびく身とがなられて候らん。法華經を信する人はかまへてかまへて法華經のかたき(敵)をとりれさせ給へ。念佛者と持齋と眞言師と一切南無妙法蓮華經と申さざらん者をばいかに法華經をよむとも法華經のかたきとしらしめすべし。かたきをしらねばかたきにたばら(証)がされ候す。あはれ(天晴)あはれけさんに入りてくわしく申候はば

や。又これよりりれへわたり候三位房佐渡公等にたびごとくこのふみをよま
せてきたしめすべし。又この御文をば明慧房にあづけ(預)させ給ふべし。な
どなく我智慧はたらぬ者が或はをこつき或は此文をさいかく(才覚)として
しり候なり。或はよも此御房は弘法大師にはまさらじよも慈覺大師にはこへ
(超)じなんぢ人くらへ(寛)をし候ず。かく申人をものしらぬ者とをばすべ
し。

建治二年丙子三月 日

蓮花押

甲州南部波木井郷山中

光日房御書 遺三〇ノ八七 蓮花押 甲州南部波木井郷山中

高祖遺文録卷之二十一

◎妙密上人御消息 後七。考二四四

青鳧五貫文給候畢。夫五戒の始は不殺生戒六波羅蜜の始は檀波羅密也。十善
戒三百五十戒 十重禁戒等の一切の諸戒の始は皆不殺生戒也。上大聖より
下蚊虻に至るまで命を財とせざるはなし。これを奪へば又第一の重罪也。
如來世に出給ては生をあわれむを本とす。生をあわれむしは命を奪
はず施食を修するが第一の戒にて候也。人に食を施すに三の功德あり一には
命をつぎ二には色をまし三には力を授く。命をつぐは人中天上に生れては長
命ノ果報を得佛に成ては法身如來と顯れ其身虚空と等し。力を授くる故に人
中天上に生れては威徳の人と成て眷屬多し。佛に成ては報身如來と顯れて
蓮華の臺に居し八月十五夜の月晴天に出たるが如し。色をます故に人中天
上に生れては三十二相を具足して端正なる事華の如く。佛に成ては應身如來
と顯れて釋迦佛の如くなるべし。夫須彌山の始を尋れば一塵也大海の初
は一露也。一を重ぬれば二となり二を重ぬれば三乃至十百千萬億阿僧祇の母

は唯一なるべし。されば日本國には佛法の始りし事は天神七代地神五代の後。人王百代其初の王をば神武天皇と申す。神武より第三十代に當りて欽明天皇の御宇に百濟國より經並に教主釋尊の御影僧尼等を渡す。用明天皇の太子の上宮と申せし人佛法を讀み初め。法華經を漢土よりとりよせさせ給ひて疏を作りて弘めさせ給ひき。それより後人王三十七代孝徳天皇の御宇に觀勒僧正と申す人新羅國より三論宗 成實宗を渡す。同御代に道昭と申す僧漢土より法相宗 俱舍宗を渡す。同御代に審祥大徳 華嚴宗を渡す。第四十四代元正天皇の御宇に天竺の上人大日經を渡す。第四十五代聖武天皇の御宇に鑑真和尚と申せし人漢土より日本國に律宗を渡せし。次でに天台宗の玄義文句 圓頓止觀 淨名疏等を渡す。然れども眞言宗と法華宗との二宗をばいまだ弘給はず。人王第五十代桓武天皇の御代に最澄と申す小僧あり後には傳教大師と號す。此人入唐已前に眞言宗と天台宗の二宗の章疏を十五年が間但一人見置給ひき。後に延暦二十三年七月に漢土に渡りかへる年の六月に本朝に著せ給ひて。天台眞言の二宗を七大寺の碩學數十人に授けさせ給ひき。其後于今四百年也。摠じて日本國に佛法渡りて于今七百餘年也。或は彌陀の名號或は大日の名號

或は釋迦の名號等をば一切衆生に勧め給へる人人はればすれども。いまだ法華經の題目南無妙法蓮華經と唱へよと勸たる人なし。日本國に限らず月氏等にも佛滅後一千年の間。迦葉 阿難 馬鳴 龍樹 無著 天親等の大論師佛法を五天竺に弘通せしかども。漢土に佛法渡りて數百年の間摩騰迦 竺法蘭 羅什 三藏 南岳 天台 妙樂等或は疏を作り或は經を釋せしかども。いまだ法華經の題目をば彌陀の名號の如く勸められず。唯自身一人計唱へ或は經を講ずる時講師計唱る事あり。然るに八宗九宗等其義まちまちなれども。多分は彌陀の名號次には觀音の名號次には釋迦佛の名號次には大日 藥師等の名號をば。唱へ給へる高祖先徳等ははればすれども。何なる故有てか一代諸教の肝心法華經の題目をば唱へざりけん。其故を能尋習給ふべし。譬は大醫の一切の病の根源藥の淺深は辨へたれども。故なく大事の藥をつかふ事なく病に隨ふが如し。されば佛滅後正像二千年の間は煩惱の病輕かりければ。一代第一の良藥妙法蓮華經の五字をば勧めざりける歟。今末法に入りぬ毎人重病有り阿彌陀 大日 釋迦等の輕藥にては治し難し。又月はいみじけれども秋にあらざれば光を惜む花は目出けれども春にあらざればさかず。一切時に

よまる事なり。されば正像二千年の間は題目の流布の時に當らざる歟。又佛教を弘るは佛の御使也隨つて佛の弟子、譲りを得る事各別也。正法千年に出テし論師像法千年に出る人師等は。多くは小乗權大乘法華經の或は述門或は枝葉を譲られし人人也。いまだ本門の肝心たる題目を譲られし上行菩薩世に出現し給はず。此人末法に出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提、中國ごと人ごとに弘むべし。例せば當時日本國に彌陀の名號の流布しつるが如くなるべき歟。然るに日蓮は何の宗の元祖にもあらず又末葉にもあらず。持戒破戒にも關て無戒の僧有智無智にもはづれたる牛羊の如くなる者也。何にしてか申し初めけん。上行菩薩の出現して弘めさせ給ふべき妙法蓮華經の五字を先立てぬことの様は。心にもあらず南無妙法蓮華經と申し初て候し程に唱る也。所詮よき事にや候らん又惡事にや侍らん我もしらず人もわきまへがたき歟。但し法華經を開いて拜し奉るに。此經をば等覺の菩薩 文殊 彌勒 觀音 普賢までも輒く一句一偈をも持つ人なし。唯佛與佛と説き給へり。されば華嚴經は最初の頓說圓滿の經なれども法慧等の四菩薩に説せ給ふ。般若經は又華嚴經程こゝろなければども當分は最上の經がかし。然れども須菩提これ説く。但法

華嚴經計りて三身圓滿の釋迦の金口の妙説にては候なれ。されば普賢文殊なりども輒く一句一偈をも説給ふべからず。何に況や末代の凡夫我等衆生は一字一字なりども自身には持ちがたし。諸宗の元祖等法華經を讀み奉れば各各其弟子等は我師は法華經の心を得給へりと思へり。然れども詮を論すれば慈恩大師は深密經、唯識論を師として法華經をよみ。嘉祥大師は般若經、中論を師として法華經をよむ。柱順、法藏等は華嚴經、十住毘婆沙論を師として法華經をよみ。善無畏、金剛智、不空等は大日經を師として法華經をよむ。此等の人人は各法華經をよめりと思へども未だ一句一偈もよめる人にはあらず。詮を論すれば傳教大師ことばりて云、雖讀法華經、還死法華心云云。例せば外道は佛經をよめども外道と同じ蝙蝠が晝を夜と見るが如し。又赤き面の者は白き鏡も赤しと思ひ太刀に顔をうつせるもの圓かなる面をぼりながらしと思ふに似たり。今日蓮は然らず已今當の經文を深くまはり一經の肝心たる題目を我も唱へ人にも勸む。麻の中の蓬墨うてる木の自體は正直ならざれども自然に直くなるが如し。經のまゝに唱ればまがれる心なし。當に知佛の御心の我等が身に入、せ給はずは唱へがたき歟。又うれ他人の弘、させ給ふ佛

法は皆師より習ひ傳へ給へり。例せば鎌倉の御家人等の御知行所領の地頭
 或は一町二町なれども皆故大將家の御恩也。何況百町千町一國二國を知行
 する人人をや。賢人と申すはよき師より傳へたる人聖人と申すは師無して
 我と覺れる人也。佛滅後月氏漢土日本國に二人の聖人あり所謂天台傳教の
 二人也。此二人をば聖人も云べし又賢人も云べし。天台大師は南岳に
 傳へたり是は賢人也道場にして自解佛乘し給ぬ又聖人也。傳教大師は道邃行
 滿に止觀と圓頓の大戒を傳へたりこれは賢人也。入唐已前に日本國にして眞
 言止觀の二宗を師なくしてさとり極め。天台宗の智慧を以て六宗七宗に勝れ
 たりと心得給しは是聖人也。然者外典云ク生而知之者上也上者聖學
 而知之者次也次者賢人名也。内典云ク我行無師保保等云云。夫教主釋尊は娑婆世
 界第一の聖人也。天台傳教の二人は聖賢に通ずべし。馬鳴 龍樹 無著 天親等
 老子 孔子等は或は小乗或は權大乘或は外典の聖賢也。法華經の聖賢には非
 ず。今日蓮は聖にも賢にも非ず持戒にも無戒にも有智にも無智も當らず。然れ
 ども法華經の題目の流布すべき後五百歲二千二百二十餘年の時に生れて。近
 は日本國遠は月氏漢土の諸宗の人人唱へ始めざる先に。南無妙法蓮華經と

高聲によばはりて二十餘年をふる間。或は罵られ打たれ或は疵をかうはり或
 は流罪に二度死罪に一度定られぬ。其外の大難數をしらす。譬ば大湯に大豆
 を漬し小水に大魚の有が如し。經云ク而此經者如來現在猶多怨嫉況
 滅度後又云ク一切世間多怨難信。又云ク有諸無智人惡口罵詈或云
 加三刀杖瓦石或數數見擯出等云云。此等の經文は日蓮日本國に生せずん
 ば但佛の御言のみ有りて其義空しかるべし。譬ば花さき菓みならず雷なりて
 雨ふらざらんが如し。佛の金言空くして正直の御經に大妄語を雜へたるなる
 べし。此等を以て思ふに恐は天台傳教の聖人にも及ぶべし。又老子孔子をも
 下しぬべし。日本國の中に但一人南無妙法蓮華經と唱へたり。これは須彌山の
 始の一塵大海の始の一露也。二人三人十人百人一國二國六十六箇國已に島
 二にも及びぬらん。今は謗せし人人も唱へ給らん。又上一人より下萬民
 に至るまで法華經の神力品の如く。一同に南無妙法蓮華經と唱へ給ふ事もや
 あらんずらん。木はしづかならんと思へども風やます春を留んと思へども夏
 となる。日本國の人人は法華經は尊とけれども日蓮房が悪ければ南無妙法蓮
 華經とは唱へまじとことばり給ふとも。今一度も二度も大蒙古國より押寄て

壹岐對馬の様に男をば折チ死スし女をば押シ取リ。京鎌倉に打チ入リて國主並に大臣百官等を搦め取り牛馬の前まきにけたてつよく責ん時は。争か南無妙法蓮華經と唱へざるべき。法華經の第五卷をもて日蓮が面おもてを數箇度打チたりしは。日に當つて貴し貴し。但し法華經の行者を惡人に打セせじと佛前にして起請きじうをかきたりし梵王帝釋日月四天等いかに口惜くわしかるらん。現身にも天罰をあたらざる事は小事ならざれば。始中終をく括りて其身を亡すのみならず議せらるるか。あへて日蓮が失にあらず護法の法師等をたすけんが爲に彼等が大禍を自身に招きさせ給フ歎。此等を以て思ふに便宜びんぎごとの青鳧五連の御志は日本國に法華經の題目を弘めさせ給ふ人に當れり。國中の諸人一人二人乃至千萬億の人題目を唱るならば存外に功德身にあつまらせ給フべし。其功德は大海の露をあつめ須彌山の微塵をつむが如し。殊に十羅刹女は法華經の題目を守護せんと誓なせ給フ。此を推するに妙密上人並に女房をば。母の二子を思ふが如く聲牛の尾を愛するが如く晝夜にまほらせ給フらん。たのもしたのもし。事多しといへども委まく申スにいとまわらず。女房にも委まく申ス給へ。

此は詔みことへる言にはあらず。金こがねはやけば彌色いみまさり。劍つるぎはとげば彌利とくなる。法華經の功德はほむれば彌功德いみまさる。二十八品は正ただしき事はわすかなり讚る言こそ多く候へと思食すべし。

閏三月五日

日蓮花押

楯谷妙密上人女房御返事

○南條殿御返事 啓三四三六 鈔三三四七 語四四八 拾七三六 扶二三三六
かたびら(帷)一ツしを(鹽)いちだあぶら(油)五ろうう(升)給ト候畢しころもはかん(寒)をふせぎ又ねつ(熱)をふせぐ。み(身)をかくしみをかぎ(嚴)る。法華經の第七やくわらばん(藥王品)に云ク、如裸者得衣等云云。心ははだかなるものころもをわたるがごとし。もん(文)の心こころうれしき事をとかれて候りふほうさう付法藏(付法藏)の人ひとのなかに商那和衆(商那和衆)と申ス人あり衣きぬをきてむまれさせ給フ。これは先生(せんじやう)に佛法にころも(衣)をくやうせし人なり。されば法華經云ク、柔和忍辱衣等云云。石いしな(嶮)山には石なしみのふ(身延)のたけ(嶽)にはしを(鹽)なし。石いしな(米)ころもにはたま(玉)よりもいじすぐれたり。しをななきところにはしをこめ(米)にも

すぐれて候。國王のたから(寶)は左右の大臣なり左右の大臣をば鹽梅あんばいと申る。みる(味噌)しをなければ(世)わたりがたし左右の臣なれば國をさます。あぶら(油)と申は涅槃經に云、風のなかにあぶらなしあぶらのなかにかせなし風をぢ(治)する第一のくすなり。かたがたのものをくり給て候御心ざしのあらわれて候事申ばかりなし。せんするところはこなんであら(故南條殿)の法華經の御しんよう(信用)のふかかりし事のあらわれて候か。王の心ざしをば臣のべをや(親)の心ざしをば子の申のふるとはこれなり。あわれこ(故)どの(殿)のうれしとをばすらん。つくし(筑紫)にを(は)し(大橋)太郎と申しける大名ありけり。大將どのの御かんき(勘氣)をかほりてかまくら(鎌倉)ゆい(由比)のはまつちのろう(主牢)にこめられて。十二年めし(四)は(耻)しめられしとき。つくし(筑紫)をうらいでしに(せ)ん(御前)にむかひて申せしは。ゆみや(弓筋)とるみ(身)となりて。きみの御かんきをかほらんことはなげきならず。又とせんにをさなく(幼稚)よりなれ(馴)しかば。いまはなれん事いうばかりなし。これはさてをさぬ。なんし(男子)にてもによし(女子)にても一人なき事なげきなり。ただしくわいにん(懷妊)のよしかたらせ給。をなご(女子)にて

やあらんすらんをのこご(男子)にてや候はんすらん。ゆくへをみざらん事うちをし。又かれが人となりてち(父)といふものもなからんなげき。いかがせんとをもへとも力及ばずとていでにき。かくて月ひ(日)すぐればことゆへなく生うまれにき。をのこご(男子)にてありけり。七歳ななつのとしやまでら(山寺)にのぼせてありければ。ともだち(友達)なりけるちごども(見共)をやなしとわらひ(笑)けり。いへ(家)にかへりては(母)にち(父)をたづねけり。は(の)ふるかたなくしてなく(遊)より外ほかのことなし。此ちご申天なくしては雨ふらず地なくしてはくさ(草)をいす。たとい母ありともち(なく)ばひと(人)となるべからず。いかに父のありとをばかく(隠)し給ふとせめしかば。母せめられて云(わ)ちご(和見)をさな(幼稚)ければ申ぬなりありやう(有様)はかうなり。此のちごなく申やうさてち(の)かたみはなきかと申せしかば。これありとてを(は)し(大橋)のせんぞ(先祖)の日記ならびにはら(腹)の内なる子にゆづれる自筆の状なり。いよいよをやこひしくてなくより外の事なし。さていかがせんといわしかば。これより郎従らうじゆうあまたとも(伴)せしかども御かんき(勘氣)をかほりければみなちりうせ(散失)ぬ。うののちはいき(生)てや又しに(死)てやをとづ(音信)

ある人なしとかたりければ。ふしころびなきていらむ(諫)るをももちるがりけり。はいわくをのれ(已)をよまてら(山寺)にのぼする事はをやのけうやうのためなり。佛に花をもまいらせよ經をも一巻よみて孝養とすべしと申せしかば。いろぎ寺にのぼりていらへかへる心なし。晝夜に法華經をよみしかば。よみわたりけるのみならず(諸)にをばへてありけり。さて十二のとし(年)出家をせずしてかみ(髪)をつゝみ。とかくしてつくし(筑紫)をにげいでてかま(鎌倉)と申すところへたづねいりぬ。八幡の御前(みまへ)にまいりてふしをかみ(伏拜)申けるは。八幡大菩薩は日本第十六の王。本地(ほんぢ)は靈山淨土。法華經をどかせ給し教主釋尊なり。衆生の救がい(願)をみ(滿)て給うがために神とあらわれさせ給ふ。今わがねがいみてさせ給ふ。をやは生(い)で候かしにて候かと申す。いぬ(戌)の時より法華經をはじめてとら(寅)の時までによみければ。なにとなくをさなきこへ(聲)はうでん(寶殿)にひびきわたりこゝるす(獲)かりければ。まゐりてありける人人もかへる事をわすれにき。皆人いち(市)のやうにあつまてみければ。をさなき人にて法師とをばは(女)にてもなかりけり。ね(も)もきやう(京)にゐるの(二世)御さんけい(參詣)ありけり。人め(目)をしの

ばせ給てまいり給たりければ。御經のたうとき事つねにすぐれたりければはつるまで御聽聞ありけり。さてかへらせ給てればしけるがあまりなごりをしさに。人をつけてをきて大將殿へかへる事ありと申させ給ければ。めし(召)て持佛堂にして御經よませまいらせ給ければ。さて次日又御聽聞ありければ西のみかど(御門)人さわざけり。いかなる事かとききしかば今日はめしうと(囚人)のくびき(ら)るるとのしりけり。あわれわがをやはいまままで有(べ)しとはをもねをも。とすが人のくび(頸)をさらると申せば。我身のなげさ(と)をもひてなみだ(涙)ぐみたりけり。大將殿あやしととらんとてゆい(由比)はいかなるものかありのまゝに申せとありしかば。上(かみ)くだん(件)の事(二)に申けり。をさふらひ(御侍)にありける大名小名みす(翠簾)の内みなるで(袖)をしほ(綾)りけり。大將殿かぢわら(槐原)をめしてをばせありけるは。太はし太郎というめしうとまいらせよとありしかば。只今くびき(ら)んとてゆい(由比)のはまへつかわし候ぬ。いまはきりてや候らんと申せしかば。このちと御まへ(前)なりければもふしころびなきけり。を(せ)御(あり)けるはかぢわら(槐原)われとはしりていまだ切すば(具)してまいれとありしかば。いろぎらるる

ゆいのはまへはせゆく。いまだいたらぬによば(呼)わりければ。すでに頸切(くびきり)とて刀(た)をぬきたりけるときなりけり。さてかぢわらをへはし(大橋)の太郎をなわ(繩)つけながら(具)してまいりて。をへには(大庭)にひきすへたりければ。大將殿このちごにとらせよとありしかば。ちごはしりをり(下)てなわ(繩)をときけり。大はしの太郎はわが子ともしらさういかなる事ゆへにたすかるともしらざりけり。さて大將殿又めしてこのちごにやうやうの御ふせ(布施)たび(給)て。をへはしの太郎をたぶ(給)のみならず。御本領をも安堵(あんぶ)ありけり。大將殿をほせありけるは法華經の御事は昔よりさる御事とはききつたへなれども。丸(ま)は身にあたりて二(に)のゆへあり。一には故親父(こしんふ)の御くび(頸)を大上(だいじやう)入道(に)切てあさましともいうばかりなかりしに。いかなる神佛にか申すべきとをもいしに走湯山(すいとう)の妙法尼より法華經をよみつたへ千部と申せし時。たかを(高雄)のもんがく(文覺)房をやのくびをもち來てみせたりし上。かたきを打つのみならず。日本國の武士の大將(給)てあり。これひとへに法華經の御利生なり。二(に)にはこのちごがをやをたすけぬる事不思議なり。大橋の太郎というやつは頼朝(よりの)さくわい(奇産)なりとをもう。たとい勅宣(ちよくせん)なりともかへ(返)し申てくび

をきりてん。あまりのにくさ(憎)にころ十二年まで。土のろう(牢)には入てありつるにかゝる不思議あり。されば法華經申事はありがたき事なり。頼朝は武士の大將にて多(た)のつみ(罪)をつもりてあれども。法華經を信(ま)いらせて候へばさりとどころをもへとなみだ(涙)ぐみ給(け)り。今の御心ざしみ候へば故(こ)なんでう(南條)のはただ子(こ)なればいとをしとわをばしめしけるらめども。かく法華經をもて我がけうやうをすべしとはよもをばしたらじ。たとひつみありていかなるところにをはすとも。このけうやうの心ざしをばねんまはうわう(閻魔法皇)ばんでん(梵天)たひしやく(帝釋)までもしろしめしぬらん。釋迦佛法華經もいかでかすてさせ給(べ)き。かのちごのち(ち)のなわ(繩)をときしとこの御心ざしかれにたがはず。これはなみだをもちてかきて候なり。又むくり(蒙古)のをこれをよしこれにはいまだうけ給(ら)ず。これを申せば日蓮房はむくり(蒙古)國のわたるといへばよろこぶと申(こ)れゆわれなき事なり。かゝる事あるべしと申せしかばあだがたき(仇敵)と人ごと(に)せめしが。經文かざりあれば來(き)なりいかにいともかなうまじき事なり。失(が)もなくして國をたすけんと申せし者を用(こ)うあらざらめ。又法華經の第五(ご)卷をもて日蓮がねも

て(面)をうちしなり。梵天帝釋是を御覽ありき鎌倉の八幡大菩薩も見させ給たまき。いかにも今は叶なまじき世にて候へばかゝる山中にも入いぬるなり。各各も不便びんとは思へども助けがたくやあらんずらん。よるひる(夜晝)法華經に申ま候なり。御信用の上うへにも力もせしませ給へ。あててこれよりの心ざしのゆわ(弱)きにはあらず。各各の御信心のあつくらすき(厚薄)にて候べし。たらし(大旨)は日本國のよき人人は一定いけどりに分なり候はんずらん。あらあさましやあさましや。恐恐謹言。

後三月二十四日

日蓮花押

南條殿御返事

明治三十六年一月十五日富士大石寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ全ク廿一丁ノ内第
二十丁ヲ失セリ又年代ハ后人最初ニ建治三年トアリ平賀本朝師本ニ同シ(稻田海素慶誌)

○四條金吾殿御返事

一切衆生南無妙法蓮華經と唱るより外の遊樂なきなり。經云、衆生所遊樂云云此文あり自受法樂じじゆほうらくにあらずや。衆生のうちに貴殿もれ給たまへべきや。所とは一閻浮提なり。日本國は閻浮提の内なり。遊樂とは我等が色心依正ともに念三千自受用身の佛にあらずや。法華經を持も奉たより外に遊樂はなし現世安穩後生善處とは是なり。ただ世間の留難りゅうなん來るともとりあへ給たまへからず。賢人聖人も此事はのがれず。ただ女房と酒うちのみて南無妙法蓮華經なむめつぽうげんとなへ給へ。苦をば苦とさとり樂をば樂とひらき苦樂ともに思おも合あて南無妙法蓮華經なむめつぽうげんとらちとなへる(唱居)させ給へ。これあり自受法樂にあらずや。いよいよ強盛の信力をいた致し給へ。恐恐謹言。

一建治三年丙子六月二十七日

日蓮花押

南條殿御返事

○辨殿御消息 微上二四 考三七

たきわら(瀧王)をばいゑふく(家尊)へきよし候けるとてまか(退)るべきよし申候へば。つかわし候。ゑもん(衛門)のたいう(大夫)どの(殿)のかへせに(改心)の事は大進の阿闍梨のふみに候らん。

一 十郎入道殿の御けさ(袈裟)悦(入)つて候よしかたらせ給へ。

一 さぶらう(三郎)ぎゑもん(左衛門)どのこのほど人をつかわして候しか。をほせ(仰)給(し)事あまりにかへすがへすをばつかなく候よし。わざ(態)と御わたりありてきこしめいてかきつかは(書遣)し候べし。又さゑもんどの(左衛門殿)はもかくと候へ。かわのへ(河邊)どの等の四人の事はるかにうけ給はり候はず。ねぼつかなし。かの邊(へん)になに事か候らん。一にかきつかはせ。度度この人人の事はこと一(大事)と天をせめ(責)まいらせ候なり。さだめて後(ご)生(せい)はさ(死)ぬ今生(いま)にしるし(驗)あるべく候と存(ぞん)すべきよし。したたかにかたらせ給へ。伊東(いとう)の八郎(はちろう)ぎゑもん(左衛門)今はしなの(信濃)のかみ(守)はげん(現)にしに(死)たりしを。いのり(祈)いけ(活)て念佛者等になるまじきよし明性房(めいせいぼう)にをりたりしが。かへりて念佛者真言師(ぜんごんし)になりて無間地獄(むかんじごく)に墮(おち)ぬ。のと(能登)房は

げんに身かたで候しが。世間のをうるしさと申しよく(慈)と申し。日蓮をすつるのみならずかたき(敵)となり候ぬ。せう(少輔)房もかくの如し。たのれのは随分の日蓮(にっぜん)がかたうと(方人)なり。しかるをなづき(頭腦)をくだき(碎)ていの(祈)るにいままでしるし(驗)のなきは。この中に心のひるがへる人の有(あ)とをほへ候ず。をもしあわぬ人をいのるは水の上(うへ)に火(ひ)をたき空(そら)にいる(あ)をづくるなり。此由(こゝろ)を四人(よに)にかたらせ給(たま)へし。むこり(蒙古)國(こく)の事のあう(合)をもつてねばしめせ。日蓮(にっぜん)が失(うしな)にはあらず。ちくご(筑後)房(ぼう)三位(み)うつ等をばいとま(賤)あちはい(う)き來(き)るべし(大事)の法門(ほふもん)申(ま)へしとかたらせ給(たま)へ。十住毘婆沙(じゅうじゅうひばさ)等の要文(ようぶん)大帖(たいてい)にて候と。真言(まごんごん)の表(うら)のせう(少)の裏(うら)に(佐渡)房(ぼう)のかきて候と。うら(裏)とせ(し)と(詮)と(かき)つけ(書付)て候もののかるきとりてたび候へ。紙(かみ)なくして一紙(ひと)に多く(おほく)要事(ようじ)を申(ま)す也。

明七月二十一日

日蓮花押

辨殿

○明治三十五年六月九日京都本能寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ大本十六丁(一四四)の九行(九)左(さ)か(わ)の(へ)「ヨリ」日蓮(にっぜん)が「マ」十一行(十一)字(じ)失(うしな)せり(稲田海素(いなたのうみす)慶(えい)記(き))

辨殿御消息 (遠二一ノ一七)

千四百四十三 (外五ノ二十)

○四條金吾釋迦佛供奉事

啓三二一〇六 鈔三二一〇六 語四三四 拾六三六 扶一一三三

御日記ノ中ニ釋迦佛の木像一體等云云。開眼ノ事普賢經ニ云、此大乘經典ハ諸佛ノ寶藏十方三世諸佛ノ眼目等云云。又云、此方等經ハ是諸佛ノ眼諸佛因テ是得レ具ニ五眼云云。此經の中に得具五眼者一、肉眼ニ天眼ニ慧眼ニ法眼ニ佛眼也。此五眼をば法華經を持つ者は自然に相具し候。譬へば王位につく人は自然に國のしたがるがごとし。大海の主となる者の自然に魚を得るに似たり。華嚴阿含方等般若大日經等には五眼の名はありといへども其義なし。今の法華經には名もあり義も備て候設ひ名はなければども必其義あり。三身ノ事。普賢經ニ云、佛三種ノ身ハ從三方等一、生ニ是、大法印ハ印ニ涅槃海ヲ如シ海中能ク生ニ三種ノ佛、清淨ノ身一、此三種ノ身ハ人天ノ福田應供ノ中、最云云。三身者一、法身如來ニ、報身如來ニ、應身如來ニ。此三身如來をば一切の諸佛必あひぐ(相具)す。譬へば月の體は法身月の光は報身月の影は應身にたとう。一の月に三のことわりあり一佛に三身の徳まします。この五眼三身の法門は法華經より外には全く候はず。故に天台大師云、佛於三世ニ等有ニ三身一於諸教、中ニ祕之、不傳云云。此釋の中に於諸教中とかかれて候は華嚴方等般若のみならず法華經より外の一切經なり。祕之不傳とかかれて候は法華經の壽量品より外の一切經には教主釋尊祕て説給はずとなり。されば畫像木像の佛の開眼供奉は法華經天台宗にかざるべし。其上一念三千の法門と申は三種の世間よりをこれり。三種の世間と申は一には衆生世間二には五陰世間三には國土世間なり。前の二は且く置之、第三の國土世間と申は草木世間なり。草木世間と申は五色の(繪)のぐ(具)は草木なり畫像これより起る。木と申は木像是より出來ず。此畫木に魂魄と申、神を入るる事は法華經の力なり。天台大師のさとり也。此法門は衆生にて申せば即身成佛といはれ畫木にて申せば草木成佛と申なり。止觀ノ明靜なる前代いまださかすとかかれて候と無情佛性感耳驚心等どのべられて候は是也。此法門は前代になさ上。後代にも又あるべからず。設ひ出來せば此法門を偷盜せるなるべし。然に天台以後二百餘年の後善無畏金剛智不空等 大日經に眞言宗と申す宗をかまへて。佛說の大日經等にはなかりしを法華經天台の釋を盜入て眞言宗の肝心とし。しかも事を天竺によせて漢土日本の末學を誑惑せしかば。皆人此事を知らず一同に信伏して今に五百餘年なり。然問眞言宗已前の木畫の像は靈驗殊勝なり。眞言已後の寺塔は利

生うすし。事多き故に委く不注。此佛こり生身の佛にてねはしまし候へ。優填大王の木像と影顯王の木像と一分もたがうべからず。梵帝日月四天等必定して影の身に隨うが如く貴邊をばまはらせ給うべし。是。御日記云、毎年四月八日より七月十五日まで九旬が間大日天子に仕させ給ふ事。大日天子と申は宮殿七寶なり其大は八百十六里五十一由旬也。其中に大日天子居し給ふ。勝無勝と申して一人の后あり左右には七曜九曜つらなり。前には摩利支天女まします。七寶の車を八匹の駿馬にかけて四天下を一日一夜にめぐり四州の衆生の眼目と成り給う。他の佛菩薩天子等は利生のいみじくまします事耳にこれをさくとも愚眼に未見。是は疑うべきにあらず眼前の利生なり。教主釋尊にまします争か如し是、あらたなる事候べき。一乗の妙經の力にあらずんば争か眼前の奇異をば可現。不思議に思ひ候。争か此天の御恩をば報すべきともどめ候に。佛法以前の人人も心ある人は皆或は禮拜をまいらせ或は供養を申皆しるしあり。又逆をなす人は皆ばつ(罰)あり。今内典を以てかんがへて候に金光明經云、日天子及以月天子聞是經故精氣充實等云云。最勝王經云、由此經王力流暉達四天下等云云。當に知日月

天の四天下をめぐり給は佛法の方なり。彼金光明經最勝王經は法華經の方便なり。勝劣を論すれば乳と醍醐と金と寶珠との如し。劣なる經を食しましにして尙四天下をめぐり給う。何況法華經の醍醐の甘味を嘗させ給はんをや。故に法華經の序品には普香天子とつらなりまします。法師品には阿耨多羅三藐三菩提と記せられさせ給う火持如來是也。其上慈父よりあひつた(傳)はりて二代我身となりてとしひさし。争かすてさせたまひ候べき。其上日蓮又此天を恃たてまつり日本國にたてあひて數年なり。既に日蓮かちぬべき心地す利生のあらたなる事外にもとむべきにあらず。是より外に御日記たうとさ申す計なければも紙上に難盡。なによりも日蓮が心にたつとき事候。父母御孝養の事度度の御文に候上に。今日の御文なんだ(涙)更にとどまらず。我が父母地獄にやをはすらんとなげかせ給う事のあわれさよ。佛の弟子の御中に目躰尊者と申けるは父をばさつせん(吉占)師子と申母をば青提女と申けるが。餓鬼道にをちさせ給けるを凡夫にてをはしける時は。しらせ給ざりければなげきもなかりける程に。佛の御弟子とならせ給て後阿羅漢となりて天眼をもて御らんありければ餓鬼道にねはしけり。是を御らんありて飲食を

まいらせしかばほのほ炎となりていよいよ苦をましませまいらせ給たましかば。いり
ぎはしりかへり佛に此由を申させ給たましたまかたまし。爾時の御心をれもひやらせ給
へ。今貴邊は凡夫なり肉眼なれば御らんなければも。もしもあらばとなげ
かせ給たまこは孝養の一分なり。梵天帝釋日月四天も定めておはれとをばさん
か。華嚴經云たま不たま知たま恩たま者たま多たま遭たま横死たま等云云。觀佛相海經云たま是阿鼻
因等云云。今既に孝養の志あつし定めて天も納受あらん歟是。御消息の中に
申たまおはさせ給たま事。くはしく事の心を案ずるにあらるべからぬ事なり。日蓮を
ば日本國の人あだむ是はひとへにさがみどの(相摸殿)のあだませ給たまにて候。ゆ
へなき御政りごとなれどもいまだ此事にあはざりし時よりかゝる事あるべし
と知たましかば。今更いかなる事ありと一人をあだむ心あるべからずとをもひ
候へば。此心のいのり(祈)となりて候やらんことばくのなん(難)のがれて
候。いまは事なきやうになりて候。日蓮がさ(佐渡)の國にてもかつねし(餓
死)なす又これまで山中にして法華經をよみまいらせ候は。たれかたすけん
ひとへにどの(殿)の御たすけなり。又殿の御たすけはなにゆへうとたづぬれ
ば入道殿の御故たまかたまし。あらわ(願)にはしるしめさぬとも定めて御いのりとも

なるらん。かうあるならばかへりて又どのの御いのりとなるべし。父母の孝
養も又彼人の御恩たまかたまし。かゝる人の御内みうちを如何なる事有ればとてすてさせ
給たまべきや。かれより度度すてられんずらんはいかがすべき。又いかなる命
になる事なりともすてまいらせ給たまべからず。上にひきぬる經文きんぶん不知恩の者
は横死有ありと見ぬ孝養の者は又横死不可有あり。鵜うと申ま鳥の食するくわが鐵てつはど
くれども腹の中の子はとけず。石いしを食する魚あり又腹の中の子はしなす。梅
檀ぼんの木は火に焼や淨居じやうこの火は水に消へす。佛の御身をば三十二人の力士火を
つけしかどもやけず。佛の御身よりいでし火は三界の龍神雨をふらして消け
かどもきわす。殿どのは日蓮が功徳をたすけたる人なり悪入にやぶらるる事かた
し。もしやの事あらば先生せんしやうに法華經の行者をあだみたりけるが今生にむく
ふなるべし。此事は如何なる山やま中海ちゆうかい上うへにてもものがれがたし。不輕菩薩の杖木
の責も目躰尊者の竹杖に殺れしも是也。なにしにか歎かせ給たまべき。但し横
難なんをば忍しのにはしかじと見へて候。此文御覽ありて後はけつして百日が間を
ばろげならでば。どうれい(同例)並に他人と我宅ならで夜中の御さかもり(酒
宴)あるべからず。主の召まん時は晝ならばいりぎ参らせ給たまべし。夜ならば

三度までは頓病とんびょうの由を申させ給て。三度にすぎば下人又他人をかたらひてつじを見せなんとして御出仕あるべし。かうつゝし(無)ませ給はんほどに。む(蒙古)の人もよせなんとして候はば人の心又さきにひきかへ候べし。かたきをうつ心とどまるべしと申させ給事。御あやまちありとも左右なく御内を出させ給へからず。ましてなからんにはなにも人申せくるしかるべからず。をもひのまゝに入道にもなりてはさばくるしからず。又身にも心にもあはぬ事あまた出来せばなかなか悪縁度度來べし。このころは女は尼になりて人をはかり男は入道になりて大悪をつくるなり。ゆめゆめあるべからぬ事なり。身に病なくともやいと(災)を一二箇所やいて病の由あるべし。さ(應)く事ありともしばらく人をもつて見せをほせさせ給へ。事事くはしくはかきつゝしがたし。此故に法門もかき候はず。御經の事はすずし(涼)くなり候てかい(い)てまいらせ候はん。恐恐謹言。

建治二年丙子七月十五日

日 蓮花押

四條金吾殿御返事

○報恩抄

日 蓮 撰之

夫、老狐は塚をあとにせず白龜は毛實が恩をほう(報)す。畜生すらかくのごとしいわうや人倫をや。されば古への賢者豫讓(豫)といひし者は劍をのみて智伯が恩にあてこう(弘)演と申せし臣下は腹をさひ(割)て衛の懿公が肝(肝)を入たり。いかにいわうや佛教をならはん者父母 師匠 國恩をわするべしや。此の大恩をほうせんには必ず佛法をならひきはめ智者とならで叶なべさか。譬へば衆旨をみちびかんには生盲(生盲)の身にては橋河をわたしがたし。方風を辨わざらん大舟は諸商を導まて寶山にいたるべしや。佛法を習ま極めんとをもはばいとまわらすは叶なべからず。いとまわらんとをもはば父母 師匠 國主等に隨まては叶なべからず。是非につけて出離しゅりの道をわきまへざらんほどは父母師匠等の心に隨まべからず。この義は諸人をもはく顯けんにもはづれ真まことにも叶なまじとをもう。しかれども外典(外典)孝經にも父母主君に隨まして忠臣孝人なるやうもみわたたり。内典(内典)佛經(佛經)云い葉は恩を入る無為眞實報恩者等云云。此干(干)が王を隨まして賢人のな(名)をとり。悉達太子の淨飯大王に背をして三界第一の孝と

なりしこれなり。かくのごとく存て父母師匠等に随はずして佛法をうかがひし程に。一代聖教をさとるべき明鏡十あり。所謂る俱舍 成實 律宗 法相 三論 眞言 華嚴 淨土 禪宗 天台法華宗なり。此の十宗を明師として一切經の心をしるべし。世間の學者等れもわり此の十の鏡はみな正直に佛道の道を照せりと。小乗の三宗はしばらくこれををく民の消息の是非につけて他國へわたるに用なきがごとし。大乘の七鏡ころ生死の大海をわたりにて淨土の岸につく大船なれば。此を習はばとひて我がみ(身)も助け人をもみちびかんとれもひて習ひみるはとに。大乘の七宗いづれもいづれも自讚あり我が宗ころ一代の心は(得)たれられたれ等云云。所謂華嚴宗の杜順 智儼 法藏 澄觀等。法相宗の玄奘 慈恩 智周 智昭等。三論宗の興皇 嘉祥等。眞言宗の善無畏 金剛智 不空 弘法 慈覺 智證等。禪宗の達磨 慧可 慧能等。淨土宗の道綽 善導 懷感 源空等。此等の宗宗みな本經本論によりて我も我も一切經をさとれり佛意をさ(め)たりと云云。彼の人人云、一切經の中には華嚴經第一なり法華經大日經等は臣下のごとし。眞言宗云、一切經の中には大日經第一なり餘經は衆星のごとし。禪宗が云、一切經の中には楞伽經第一なり乃至餘宗かくのごと

し。而も上に擧る諸師は世間の人人各各れもなり。諸天の帝釋をうやまひ衆星の日月に随がごとし。我等凡夫はいづれの師師なりとも信するならば不足あるべからず。仰てこそ信すべけれども日蓮が愚案はれ(晴)がたし。世間をみるに各各我も我もといへども國主は但一人なり二人となれば國土ただやかならず。家に二の主あれば其家必やぶる。一切經も又かくのごとくや有らる。何の經にてもをばせ一經ころ一切經の大王にてはをばすらめ。而もに十宗七宗まで各各諍論して随はず。國に七人十人の大王ありて萬民をたやかならじ。いかながせん疑とところに。一の願を立我れ八宗十宗に随はじ。天台大師の専ら經文を師として一代の勝劣をかんがへしがごとく。一切經を開きみるに涅槃經と申す經に云、依法不依人等云云。依法と申すは一切經不依人と申すは佛を除き奉りて外の普賢菩薩文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸人師なり。此經に又云、依了義經不依不了義經等云云。此經に指どころ了義經と申すは法華經 不了義經と申すは華嚴經 大日經 涅槃經等の已今當の一切經なり。されば佛の遺言を信するならば専ら法華經を明鏡として一切經の心をばしるべきか。隨て法華經の文を開き奉れば此法華經於

諸經中、最在其上、等云云。此の經文のごとくば須彌山の頂に帝釋の居がごとく。輪王の頂に如意寶珠のあるがごとく。衆木の頂に月のやどるがごとく。諸佛の頂上に肉髻の住せるがごとく。此の法華經は華嚴經、大日經、涅槃經等の一切經の頂上の如意寶珠なり。されば専ら論師人師をすてて經文に依るならば。大日經華嚴經等に法華經の勝れ給へることば日輪の青天に出現せる時。眼あきらかなる者の天地を見るがごとく高下宛然なり。又大日經華嚴經等の一切經をみるに。此經文に相似の經文一字一點もなし。或は小乘經に對して勝劣をとかれ。或は俗諦に對して眞諦をとさ。或は諸空假に對して中道をほめたり。譬へば小國之王が我國の臣下に對して大王といふがごとし。法華經は諸王に對して大王等と云云。但涅槃經計こり法華經に相似の經文は候へ。されば天台已前の南北の諸師は迷惑して法華經は涅槃經に劣と云云。されども専ら經文を開き見るには無量義經のごとく華嚴阿含方等般若等の四才餘年の經經をあけて。涅槃經に對して我が身勝ととひて。文法華經に對する時は是、經ノ出世、乃至如下法華ノ中八千ノ聲聞、得授記、箭成、大菓實、如秋收冬藏、更無所作、等と云云。我々と涅槃經は法華經には劣ととける經

文なり。かう經文は分明なれども南北の大智の諸人の迷つて有し經文なれば。末代の學者能眼をととむべし。此の經文は但法華經涅槃經の勝劣のみならず。十方世界の一切經の勝劣をもしりぬべし。而を經文にこり迷つとも天台妙樂傳教大師の御れうけん(料簡)の後は眼あらん人人はしりぬべき事ぶかし。然ども天台宗の人たる慈覺智證すら猶此の經文にくらしいわうや餘宗の人人をや。或人疑云漢土日本にわたりたる經經にこり法華經に勝たる經はをほせずとも。月氏 龍宮 四王 日月 切利天 都率天などには恆河沙の經經ましますなれば。其中に法華經に勝させ給御經やましますらん。答云、一をもつて萬を察せよ庭戸を出ですてて天下をしるとはこれなり。癡人が疑云、我等は南天を見て東西北の三空を見ず。彼の三方の空に此日輪より別の日やましますらん。山を隔て煙の立つを見て火を見ざれば煙は一定なれども火にてやなかるらん。かくのごとくいはん者は一闍提の人としるべし。生盲にことならず。法華經の法師品に釋迦如來金口の誠言をもて五十餘年の一切經の勝劣を定て云。我所說、經典、無量千萬億已、說今說、當說、而於其中、此法華經、最爲難信難解等云云。此經文は但釋迦如來一佛の説なり

ども等覺已下は仰て信すべき上。多寶佛東方より來て眞實なりと證明し。十方の諸佛集りて釋迦佛と同廣長舌を梵天に付給て後各各國國へ還らせ給ぬ。今已當の三字は五十年並十方三世の諸佛の御經。一字一點ものことさす引載て法華經に對して説せ給て候を。十方の諸佛此座にして御判形を加へせ給て。各各又自國に還らせ給て我弟子等に向せ給て法華經に勝れたる御經ありと説せ給はば其所化の弟子等信用すべしや。又我は見ざれば月氏龍宮四天日月等の宮殿の中に法華經に勝させ給たる經やればしますらんと思はすは。されば梵釋日月四天龍王は法華經の御座にはなかりけるか。若日月等の諸天法華經に勝たる御經まします汝はしらすと仰あるならは大誑惑の日月なるべし。日蓮せめて云日月は虚空に住し給へども。我等が大地に處するがごとくして墮落し給はざる事は上品の不妄語戒の方か。法華經に勝たる御經ありと仰ある大妄語あるならば恐はいまだ壞劫にいたらざるに大地の上にとうとれち候はんか。無間大城の最下の堅鐵にあらずばとどまりがたからんか。大妄語の人は須臾も空に處して四天下を廻り給へばとらすとせめたてまつるべし。而を華嚴宗の澄觀等眞言宗の善無畏金剛智

不空弘法慈覺智證等の大智の三藏大師等の。華嚴經大日經等は法華經に勝たりと立給はば我等が分齊には及ばぬ事なれども。大道理のをすところは豈諸佛の大怨敵にあらずや。提婆與伽梨ものならず大天大慢外にもとむべからず。かの人人を信する輩はをろしをろし。問云華嚴の澄觀三論の嘉祥法相の慈恩眞言の善無畏乃至弘法慈覺智證等を佛の敵との(眞)給が。答云此大なる難也佛法に入りて第一の大事也。愚眼をもて經文を見るには法華經に勝たる經ありといはん人は。設いかなる人なりとも謗法は免れじと見わて候。而を經文のごとく申ならばいかでか此諸人佛敵たらざるべき。若又恐をなして指申さずは一切經の勝劣むなしかるべし。又此人人を恐て末の人人を佛敵といはんと思はば。彼宗宗の末の人人の云法華經に大日經をまさりたりと申は我私の計にはあらず祖師の御義也。戒行の持破智慧の勝劣身の上下はありとも。所學の法門はたがふ事なしと申せば彼人人にどがなし。又日蓮此を知ながら人人を恐て申さずは寧喪身命不匿教者の佛陀の諫曉を用ぬ者となりぬ。いかにせんいは(言)んとすれば世間をろし止とすれば佛の諫曉のがれ(脱)がたし。進退此に谷り。むべなるか

なや法華經の文ニ云ク而此經ハ者如來ノ現在^{ニスラ}猶多シ怨嫉ニ況滅度ノ後^{ヲヤ}又云ク一切世間多シ怨難^シ信^シ等云云。釋迦佛^ヲ摩耶夫人^ハはらま^シ孕^シ給^ヒたりければ第六天の魔王摩耶夫人の御腹をどをし見て。我等が大怨敵法華經と申ス利劍をばらみたり事の成せぬ先にいかにしてか失^フべき。第六天の魔王大醫と變じて淨飯王宮に入り。御産安穩の良藥を持候大醫ありとのしりて毒を后^ニまいらせつ。初生^シの時は石をふらし乳に毒をまじへ城を出^テさせ給^ヒしには黒毒蛇と變じて道にふさがり。乃至提婆瞿伽梨波瑠璃王阿闍世王等の惡人の身に入りて。或は大石をなげて佛の御身より血をいだし或は釋子をころし或は御弟子等を殺す。此等の大難は皆遠^クは法華經を佛世尊に說せまいらせどとたばかり^{巧謀}し如來現在猶多怨嫉の大難^ナかし。此等は遠^キ難なり近^キ難には舍利弗目連諸大菩薩等も四十餘年が間は法華經の大怨敵の内^ナかし。況滅度後と申して未來の世には又此の大難よりもすぐれてをうろしき大難あるべしとどかれて候。佛だにも忍びがたかりける大難をば凡夫はいかでか忍^フべき。いわうや在世より大なる大難にてあるべかんなり。いかなる大難か提婆が長^{タケ}三丈廣^{ヒロサ}一丈六尺の大石阿闍世王の醉象^{サウジヤウ}にはすぐべきとはれもへど

も。彼にもすぐべく候なれば。小失なくとも大難に度度^{カウロク}值^ル人をこり滅後の法華經の行者とはしり候はめ。付法藏の人人は四依の菩薩佛の御使なり。提婆菩薩は外道に殺^{サレ}れ師子尊者は檀彌羅王に頭を刎られ。佛陀密多龍樹菩薩等は赤幡^{アカハタ}を七年十二年さしとをす。馬鳴菩薩は金錢三億がかわりとなり如意論師はれもひじに^{思死}に死す。此等は正法一千年の内なり。像法に入^{ッテ}五百年佛滅後一千五百年と申せし時。漢土に一人の智人あり始^メは智顛^{チテン}後には智者大師とがうす。法華經の實義をありのまゝに弘通せんと思^ヒ給^ヒしに。天台已前の百千萬の智者しなじなに一代を判せしかども詮^{ゼン}して十流となりぬ。所謂南三北七なり。十流ありしかども一流をもて最とせり。所謂南三の中の第一の光宅寺の法雲法師これなり。此人は一代の佛教を五^ニにわか^ツ。其の五の中に三經をぬらびいだ^{撰出}す所謂華嚴經涅槃經法華經なり。一切經の中には華嚴經第一大王のごとし涅槃經第二攝政關白のごとし第三法華經公卿等のごとし。此より已下は萬民のごとし。此人は本より智慧か^しこ^き土慧觀慧嚴僧柔慧次なんぞ申せし大智者より習^ヒ傳^ヘ給^ルのみならず。南北の諸師の義をせめやぶり山林にまじわ^交りて法華經涅槃經華嚴經の功を

つも(禮)りし上。梁の武帝召し出して内裏の内に寺を立テ光宅寺となづけて此法師をあげめ給フ。法華經をかう(講)せしかば天より花ふること在世のごとし。天監五年に大旱魃ありしかば。此の法雲法師を請奉りて法華經を講せさせまいらせしに。藥草喻品の其雨普等四方俱下と申二句を講せさせ給し時天より甘雨下たりしかば。天子御感のあまりに現に僧正になしまいらせて。諸天の帝釋につかぬ萬民の國王ををうるがごとく我とつかへ給し上。或人夢く此人は過去、燈明佛の時より法華經をかうせる人なり。法華經の疏四卷あり此疏に云、此經未三頃然亦云、異ノ方便等云云。正く法華經はいまた佛理をきわめざる經と書れて候。此人の御義佛意に相ひ叶ひ給ければこそ天より花も下り雨もふり候けらめ。かゝるいみじき事にて候しかば。漢土の人人さては法華經は華嚴經涅槃經には劣にてころあるなれと思し上。新羅百濟高麗日本まで此疏ひろまりて大體一同の義にて候しに。法雲法師御死去ありていくばくならざるに。梁の末陳の始に智顛法師と申す小僧出來せり。南岳大師と申せし人の御弟子なりしかども師の義も不審にありけるかのゆへに。一切經藏に入つて度度御らんありしに華嚴經涅槃經法華經の三經に詮じいだし。此の三經の中に殊に華嚴經を講じ給ひき。別して禮文を造りて日に功をなし給ししかば。世間の人れもはく此人も華嚴經を第一とをばすかと見しはごに。法雲法師が一切經の中に華嚴第一涅槃第二法華第三と立てたるが。あまりに不審なりける故にことに華嚴經を御らんありけるなり。かくて一切經の中に法華第一涅槃第二華嚴第三と見定させ給てなげき給。そらは。如來の聖教は漢土にわたれども人を利益することなし。かへりて一切衆生を惡道に導びくこと人師の悞によれり。例せば國の長とある人東を西といふ天を地といふいだしぬれば萬民はかくのごとくに心うべし。後にいやしき者出來して汝等が西は東汝等が天は地なりといはばもちうるることなき上。我が長の心に叶がために今の人をのりうち(罵打)なんぞすべし。いかんがせんとはればせしかどもさてもだす(黙止)べきにあらねば。光宅寺の法雲法師は謗法によて地獄に墮ぬとのしらせ給。其時南北の諸師はち(蜂)のごとく蜂起しからず(鳥)のごとく鳥合せり。智顛法師をば頭をわる(破)べきか國ををう(逐)べきかなんぞ申せし程に。陳主此をきこしめして南北の數人に召合せて我と列座してきかせ給ひき。法雲法師が弟子等、慧榮 法嚴 慧曠 慧愷なんぞ申せし僧正僧都已

上の人人百餘人なり。各各悪口を先とし眉をあげ眼をいからかし手をあげ柏子をたたく。而れども智顛法師は末座に坐して色を變せず言を悞らず。威儀しづかにして諸僧の言を一一に牒をとり言ごとにせめかへ(責返)す。をしかへ(押返)して難じて云、抑も法雲法師の御義に第一華嚴第二涅槃第三法華と立させ給ける證文は何の經乎。慥かに明なる證文を出させ給へとせめしかば。各各頭をうつふせ色を失て一言の返事なし。重てせめて云、無量義經に正しく次説方等十二部經摩訶般若華嚴海空等云云。佛我と華嚴經の名をよびあけて無量義經に對して未顯眞實と打テ消し給う。法華經に劣りて候無量義經に華嚴經はせめられて候ぬ。いかに心なさせ給て華嚴經をば一代第一とは候ける乎。各各御師の御かたうと(方人)せんとをばさば。此の經文をやふりて此に勝る經文ヲ取り出テ御師の御義を助給へとせめたり。又涅槃經を法華經に勝と候けるはいかなる經文乎。涅槃經の第十四には華嚴阿含方等般若をあげて涅槃經に對して勝劣は説れて候へども。またく法華經と涅槃經との勝劣はみへず。次上の第九の卷に法華經と涅槃經との勝劣分明なり。所謂經文ニ云、是ノ經、出世ハ乃至如法華ノ中ノ八千ノ聲聞得テ受ニ記筋ヲ成中ノ大菓實ヲ如秋收冬藏

更ニ無ニ所作一等云云。經文明に諸經をば春夏と説せ給て涅槃經と法華經とをば菓實の位とは説れて候へども。法華經をば秋收冬藏ノ大菓實の位 涅槃經をば秋の末冬の始、摺拾の位と定給ぬ。此經文正しく法華經には我身劣と承伏し給ぬ。法華經の文には已説今説當説と申して此の法華經は前と並との經經に勝たるのみならず。後に説かん經經にも勝るべしと佛定給。すでに教主釋尊かく定給ぬれば疑へきにあらぬども我が滅後はいかんと疑ればして。東方寶淨世界の多寶佛を證人に立給しかば。多寶佛大地よりをどり出でて妙法華經皆是眞實と證し。十方分身の諸佛重てあつませ給。廣長舌を大梵天に付け又教主釋尊も付給。然後多寶佛は寶淨世界にかへり十方の諸佛各各本土にかへらせ給て後。多寶分身の佛もればせざらんに教主釋尊涅槃經をといて法華經に勝と仰あらば。御弟子等は信せさせ給べしやとせめしかば。日月の大光明の脩羅の眼を照がごとく漢王の劔の諸侯の頸にかかりしがごとく。兩眼をどご一頭を低たり。天台大師の御氣色は師子王の狐兔の前に吼たるがごとし鷹鷲の鳩雉をせめたるにいたり。かくのごとくありしかばさては法華經は華嚴經涅槃經にもすぐれてありけりと。震旦一國

に流布するのみならずかへりて五天竺までも聞へ。月氏大小の諸論も智者大師の御義には勝れず。教主釋尊兩度出現しますか佛教二度あらはれぬとはめられ給ひしなり。其後天台大師も御入滅なり。陳隋の世も代て唐の世となりぬ。章安大師も御入滅なりぬ。天台の佛法やうやく習ひ失し程に。唐の太宗の御宇に玄奘三藏といひし人貞觀三年に始めて月氏に入りて同十九年にかへりしが。月氏の佛法尋き盡して法相宗と申す宗をわたす。此宗は天台宗と水火なり。而天台の御覽なかりし深密經 瑜伽論 唯識論等をわたして。法華經は一切經には勝たれども深密には劣りという。而を天台は御覽なかりしかば天台の末學等は智慧の薄きかのゆへにさもやとれもう。又太宗、賢王なり玄奘の御歸依あさからず。いうべき事ありしかどもいつもの事なれば時の威をねりて申す人なし。法華經を打かへして三乘眞實一乘方便五性各別と申せし事は心うかりし事なり。天竺よりはわたれども月氏の外道が漢土にわたれるか。法華經は方便 深密經は眞實といひしかば。釋迦多寶十方の諸佛の誠言もかへりて虚くなり。玄奘慈恩ころ時の生身の佛にてはありしが。其後則天皇后の御宇に前に天台大師にせめられし華嚴經に又重て新譯の華嚴經わ

たりしかば。さきのいきどをりをはたさんがために。新譯の華嚴をもつて天台にせめられし舊譯の華嚴經を扶て華嚴宗と申す宗を法藏法師と申す人立てぬ。此宗は華嚴經をば根本法輪 法華經をば枝末法輪と申すなり。南北は一華嚴 一涅槃 三法華 天台大師は一法華 二涅槃 三華嚴。今の華嚴宗は一華嚴 二法華 三涅槃等云云。其後玄宗皇帝の御宇に天竺より善無畏三藏、大日經蘇悉地經をわたす金剛智三藏、金剛頂經をわたす。又金剛智三藏、弟子あり不空三藏なり。此三人は月氏の人種姓も高貴なる上人がらも漢土の僧にせず。法門もなにとはしらす後漢より今にいたるまでなかりし。印と眞言という事をあひうい(相副)てゆゆしかりしかば。天子かうへ(頭)をかたふけ萬民掌をわす。此人人の義いやく華嚴 深密 般若 涅槃 法華經等の勝劣は顯教の内釋迦如來の説の分也。今の大日經等は日法王の勅言なり。彼の經經は民の萬言 此經は天子の一言なり。華嚴經涅槃經等は日法王の勅言に梯を立ても及はず。但法華經計りころ大日經には相似の經なれ。されども彼の經は釋迦如來の説民の正言此經は天子の正言なり。言は似ども人がら雲泥なり。譬へば濁水の月と清水の月のごとし。月の影は同しけれども水に清濁ありなると申しければ

此の由尋^{よし}顯す人もなし。諸宗皆落ち伏して眞言宗にかたぶきぬ。善無畏 金剛智 死去の後不空三藏又月氏にかへりて菩提心論と申^ま論をわたし。いよいよ眞言宗盛りなりけり。但し妙樂大師といふ人あり天台大師よりは二百餘年の後なれども智慧かしくき人にて。天台の所釋を見^み明^{あきらめ}てありしかば。天台の釋の心は後にわたれる深密經法相宗。又始て漢土に立^たたる華嚴宗。大日經眞言宗にも法華經は勝^{まさ}させ給^{たま}たりけるを。或は智のをよばざるか或は人に畏るるか或は時の王威をねづるかの故にいはずりけるか。かくてあるならば天台の正義すでに失^うなん。又陳隋巴前の南北が邪義にも勝^{まさ}たりとたばして三十卷の末文を造^{つく}り給^{たま}。所謂弘決^{くわつ} 釋籤 疏記これなり。此三十卷の文は本書の重^{おも}なるをけづりよわき^弱をたすくるのみならず。天台大師の御時なかりしかば御責にものがれてあるやうなる。法相宗と華嚴宗と眞言宗とを一時にとりひしがれたる書なり。又日本國には人王第三十代欽明天皇、御宇十三年壬申十月十三日に百濟國より一切經釋迦佛の像をわたす。又用明天皇の御宇、聖德太子佛法をよみはじめ和氣^{わげ}の妹子^{いもこ}と申^ま臣下を漢土につかはして先^ま生所持^{しやうしやう}の一卷の法華經をとりよせ給^{たま}て持經と定め。其後人王第三十七代に

孝德天王、御宇に三論宗 華嚴宗 法相宗 俱舍宗 成實宗わたる。人王第四十五代に聖武天王の御宇に律宗わたる已上六宗なり。孝德より人王第五十代の桓武天王にいたるまでは十四代一百二十餘年が間は天台眞言の二宗なし。桓武の御宇に最澄と申す小僧あり山階寺の行表僧正の御弟子なり。法相宗を始^はとして六宗を習^{まな}びさわめぬ。而^しども佛法いまだ極^たたりともをばはざりしに。華嚴宗の法藏法師が造^{つく}りたる起信論の疏を見給^{たま}うに天台大師の釋を引^ひきたり。此疏こり子細ありげなれ。此國に渡^{わた}りたるか又いまだわたらざるかと不審ありしほどに。有人^{あるひと}にとひしかば其人の云^い、大唐の揚州龍興寺の僧鑒眞和尚、天台の末學道暹律師の弟子、天寶の末に日本國にわたり給^{たま}て小乗の戒を弘通させ給^{たま}しかども天台の御釋持^ぢ來^らながらひろめ給^{たま}はず。人王第四十五代聖武天王の御宇なりとかたる。其書を見^みと申^まされしかば取^とり出^だして見せまいらせしかば。一返御らんありて生死の醉をさました。此の書をもつて六宗の心を探ねあきらめしかば一一に邪見なる事あらはれぬ。忽に願^{ねが}を發^はて云^い、日本國の人皆謗法の者の檀越^{だんごつ}たるが天下一定亂^{いちぢやうみだれ}なんすとたばして六宗を難せられしかば。七大寺六宗の碩學蜂起して京中烏合し天下みなさわぐ。七大

寺六宗の諸人等悪心強盛なり。而んを去延曆二十一年正月十九日に天王高
 雄寺に行幸七寺の碩徳十四人善議勝猷奉基寵忍賢玉安福勤操脩圓慈
 誥玄耀歳光道證光證觀敏等十有餘人を召合す。華嚴三論法相等の人
 人各各我宗の元祖が義にたがはず。最澄上人は六宗の人人の所立一一に牒を
 取りて本經本論並に諸經諸論に指合せてせめしかば。一言も答はず口をし
 て鼻のごとくになりぬ。天皇をどろき給て委細に御たづねありて重て勅
 宣下て十四人をせめ給ししかば承伏の謝表を奉りたり。其書云、七箇大寺
 六宗ノ學匠乃至初悟ニ至極一等云云。又云、自聖德弘化以降于今二百餘年之
 間所講經論其數多矣。彼此爭理其疑未解而此最妙、圓宗猶未闡揚等云
 云。又云、三論法相久年之諍渙焉氷解、照然既明猶披雲霧而見中三光矣
 云云。最澄和尚十四人が義を判云、各講一軸一振法鼓於深壑、賓主徘徊
 三乘之路、飛義旗於高峰。長幼摧破三有之結、猶未改歷劫之轍、混黑白
 牛於門外。豈善昇初發之位、悟阿茶於宅内等云云。弘世眞綱二人、臣下
 云、靈山之妙法、聞於南岳、總持妙悟、關於天台、慨一乘之權滯、悲三諦之
 未顯等云云。又十四人云、善議等牽逢休運、乃闕奇詞、自非深期、何

託聖世哉等云云。此十四卷は華嚴宗の法藏審祥三論宗の嘉祥觀勤法相
 宗の慈恩道昭律宗の道宣鑒眞等の。漢土日本元祖等の法門瓶はかはれども
 水は一也。而に十四人彼邪義をすてて傳教、法華經に歸伏しぬる上は。誰の
 末代の人か華嚴般若深密經等は法華經に超過せりと申すべきや。小乗の三
 宗は又彼の人人の所學なり大乘の三宗破ぬる上は沙汰のかぎりにあらず。
 而を今に子細を知らざる者六宗はいまだ破られずとをもへり。譬へば盲目が
 天の日月を見ず聾人が雷の音をさかざるゆへに。天には日月なし空に聲なし
 とをもうがごとし。眞言宗と申すは日本人王第四十四代と申せし元正天皇の
 御宇に善無畏三藏大日經をわたくして弘通せずして漢土へかへる。又玄昉等大
 日經の義釋十四卷をわたくす又東大寺の得清大徳わたくす。此等を傳教大師御ら
 んありてありしかども大日經法華經の勝劣いかんがとねばしけるはどに。か
 たがた不審ありし故去延曆二十三年七月御入唐。西明寺の道邃和尚佛瀧
 寺の行滿等に値奉止觀圓頓の大戒を傳受し。靈感寺の順曉和尚に値奉眞言
 を相傳し。同延曆二十四年六月に歸朝して桓武天王に御對面。宣言を下て六宗
 の學匠に止觀眞言を習はしめ同七大寺にをかれぬ。眞言止觀の二宗の勝劣は

漢土に多ク子細あれども。又大日經の義釋には理同事勝とかきたれども。傳教大師は善無畏三藏のあやまりなり。大日經は法華經には劣たりと知しめして八宗とはせさせ給はず。眞言宗の名をけづりて法華宗の内に入レ七宗となし。大日經をば法華天台宗の傍依經となして華嚴 大品 般若 涅槃等の例とせり。而ども大事の圓頓の大乗別受戒の大戒壇を我が國に立ラ立シの諍論がわづらはしきに依りてや。眞言天台二宗の勝劣は弟子にも分明にをし給ひざりけるか。但依憑集と申ヌ文に正く眞言宗は法華天台宗の正義を偷、とりて大日經に入リて理同とせり。されば彼の宗は天台宗に落テたる宗なり。いわうや不空三藏は善無畏金剛智入滅の後月氏に入リてありしに。龍智菩薩に値ヒ奉リし時月氏には佛意をあきらめたる論釋なし。漢土に天台という人の釋ころ邪正をわらび偏圓をあきらめたる文にては候なれ。あなかしこあなかしこ。月氏へ渡し給へとねんごろにあつら(詭)へし事を。不空の弟子含光といひし者が妙樂大師にかたれるを。記の十の末に引キ載られて候をこの依憑集に取り載て候。法華經に大日經は劣としろしめす事傳教大師の御心顯然也。されば釋迦如來 天台大師 妙樂大師 傳教大師の御心は一同に大日經等の一切經の中

には法華經はすぐれたりといふ事は分明なり。又眞言宗の元祖といふ龍樹菩薩の御心もかくのごとし。大智度論を能能尋るならば此事分明なるべきを。不空があやまれる菩提心論に皆人はかされて此事に迷惑せるか。又石淵の勤操僧正の御弟子に空海と云フ人あり後には弘法大師とがうす。去延曆二十三年五月十二日に御入唐。漢土にわたりては金剛智 善無畏の兩三藏の第三の御弟子慧果和尚といひし人に兩界を傳受。大同二年十月二十二日に御歸朝平城天王の御宇なり。桓武天王は御ほうぎよ(崩御)平城天王に見參し御用ありて御歸依他にことなりしかども。平城はともなく嵯峨に世をとられさせ給ひしかば。弘法ひき入してありし程に。傳教大師は嵯峨の天王弘仁十三年六月四日御入滅。同弘仁十四年より弘法大師王の御師となり眞言宗を立てて東寺を給眞言和尚とがうし此より八宗始る。一代の勝劣を判云、第一眞言大日經第二華嚴第三は法華涅槃等云云。法華經は阿合方等般若等に對すれば眞實の經なれども華嚴經大日經に望れば戲論の法なり。教主釋尊は佛なれども大日如來に向れば無明ノ邊域と申して皇帝と俘囚のごとし。天台大師は盜人なり眞言の醍醐を盜して法華經を醍醐といふなんぞかかれしかば。法華經はいみじと

をもへども弘法大師にあひぬれば物のかすにもあらず。天竺の外道はさて置ぬ。漢土の南北が法華經は涅槃經に對すれば邪見の經といひしにもすぐれ。華嚴宗が法華經は華嚴經に對すれば枝末教と申せしにもこへたり。例は彼の月氏の大慢婆羅門が自在天 那羅延天 婆釁天 教主釋尊の四人を高座の足につくりて。其の上へのぼつて邪法を弘がごとし。傳教大師御存生ならば一言は出されべかりける事なり。又義真 圓澄 慈覺 智證等もいかに御不審はなかりけるやらん天下第一の凶なり。慈覺大師は去承和五年に御入唐漢土にして十年が間天台眞言の二宗をならう。法華大日經の勝劣を習しに法全 元政等の八人の眞言師には法華經と大日經は理同事勝等云云。天台宗の志遠 廣脩 維綱等に習しには大日經は方等部の攝等云云。同承和十三年九月十日に御歸朝嘉祥元年六月十四日 宣旨下。法華大日經等の勝劣は漢土にしてしりがたかりけるかのゆへに。金剛頂經の疏七卷蘇悉地經の疏七卷已上十四卷。此疏の心は大日經金剛頂經蘇悉地經の義と法華經の義は。其所詮の理は一同なれども事相の印と眞言とは眞言の三部經すぐれたり云云。此は偏に善無畏金剛智不空の造りたる大日經の疏の心のごとし。然ども我が心に猶不審やの

こりけん。又心にはとけ(解)てんけれども人の不審をはらさんとやればしけん。此十四卷の疏を御本尊の御前にさしをきて御祈請ありき。かくは造りて候へども佛意計がたし。大日の三部やすぐれたる法華經の三部やまされると御祈念有しかば五日と申、五更に忽に夢想あり。青天に大日輪かゝり給へり矢をもてこれを射ければ矢飛で天にのぼり日輪の中に立チぬ。日輪動轉してすでに地に落とすとをもひてうちさめ(打覺)ぬ。悦云、我吉夢あり法華經に眞言勝たりと造りつるふみ(文)は佛意に叶けりと悦ませ給て。宣旨を申下して日本國に弘通あり。而も宣旨の心云、遂知天台、止觀、與眞言、法義、理冥、符等云云。祈請のごときんば大日經に法華經は劣なるやうなり。宣旨を申下すには法華經と大日經とは同等云云。智證大師は本朝にしては義真和尚 圓澄大師 別當 慈覺等の弟子なり。顯密の二道は大體此國にして學し給けり。天台眞言の二宗の勝劣の御不審に漢土へは渡り給けるか。去 仁壽二年に御入唐漢土にしては眞言宗は法全 元政等にならばせ給と。大體大日經と法華經とは理同事勝 慈覺の義のごとし。天台宗は良諍和尚にならひ給と。眞言天台の勝劣大日經は華嚴法華等には及はず等云云。七年が間漢土に經て去 貞觀元年五

月十七日に御歸朝。大日經の旨歸ニ云、法華尙不及、況自餘、教乎等云云。此釋は法華經は大日經には劣ル等云云。又授決集ニ云、眞言禪門乃至若望華嚴法華涅槃等、經ニ是攝引門等云云。普賢經の記論の記ニ云、同等云云。貞觀八年丙戌四月廿九日壬申勅宣申下ニ云、如聞眞言止觀兩教之宗同、號醍醐俱稱深祕等云云。又六月三日ノ勅宣ニ云、先師既開兩業、以爲我道、代代座主相承、莫不兼傳、在後之輩、豈乖舊迹。如聞山上ノ僧等、專違先師之義、成偏執之心、殆似不顧、扇揚餘風、與隆舊業。凡厥師資之道、闕一不可傳弘之勤、寧不兼備。自今以後、宜以下通達兩教之人、爲延曆寺ノ座主、立爲恆例云云。されば慈覺智證ノ二人は傳教義眞の御弟子。漢土にわたりては又天台眞言の明師ニ値て有しかども。二宗の勝劣は思定ざりけるか。或は眞言すぐれ或は法華すぐれ或は理同事勝等云云。宣旨を申下には二宗の勝劣を論せん人は違勅の者といましめられたり。此等は皆自語相違といふべし。他宗の人はよも用ととみわて候。但二宗齊等とは先師傳教大師の御義と宣旨に引載られたり。抑傳教大師いづれの書にかかれて候や此事よくよく尋べし。慈覺智證と日蓮とが傳教大師の御事を不審申は。親に値

ての年あらうひ日天に値奉りての目くらへては候へども。慈覺智證の御かたふとをせさせ給はん人人は分明なる證文をかまへさせ給へし。詮するところは信をとらんがためなり。玄奘三藏は月氏の婆沙論を見たりし人ぞかし。天竺にわたらざりし實法師にせめられにき。法護三藏は印度の法華經をば見られども。囑累の先後をば漢土の人みねども。悞といひしるか。設慈覺傳教大師に値奉りて習傳たりとも智證義眞和尚に口決せりといふとも。傳教義眞の正文に相違せばあに不審を加へざらん。傳教大師の依憑集と申文は大師第一の祕書なり。彼書ノ序ニ云、新來眞言家、則浪筆授之相承、舊到華嚴家、則隱影響之軌範。沈空三論宗、者忘彈訶之屈恥、覆稱心之醉。著有法相、非撲揚之歸依、撥青龍之判經等。乃至謹著依憑集一卷、贈同我後哲。某時興日本第五十二葉弘仁之七丙申之歲也云云。次下ノ正宗ニ云、天竺名僧聞大唐天台ノ教迹最堪簡邪正、渴仰訪問云云。次下ニ云、豈非中國失法、求中之四維、而此方少識者、如魯人耳等云云。此書は法相三論華嚴眞言の四宗をせめて候文也。天台眞言の二宗同一味ならばいかでかせめ候へ。而も不空三藏等をば管人のごとしなんどかかれて候。善無畏金剛智

不空の眞言宗いみじくばいかでが魯人と悪口あるべき。又天竺の眞言、天台宗に同も又勝たるならば。天竺ノ名僧いかでか不空にあつらへ中國に正法なしとはいうべき。うれはいかにもまのれ慈覺智證の二人は。言は傳教大師の御弟子とはなのらせ給へとも心は御弟子にあらず。其故は此書云、謹著依憑集一卷ヲ贈ニ同我ノ後哲ニ等云云。同我の二字は眞言宗は天台宗に劣とならひてこそ同我にてはあるべけれ。我と申下さるる宣旨云、專達先師之義ニ成ニ偏執之心ニ等云云。又云、凡厥師資之道闕一テ不可等云云。此宣旨のごとくならば慈覺智證こそ專先師にむく人にては候へ。かうせめ候もをうれにては候へとも。此をせめずば大日經法華經の勝劣やふれなんと存じていのち(命)をまど(的)にかけてせめ候なり。此二人の人人の弘法大師の邪義をせめ候はざりけるは最も道理にて候けるなり。されば糧米をつくし人をわづらはかして漢土へわたらせ給はんよりは。本師傳教大師の御義をよくよくつくさせ給へかりけるにや。されば叡山の佛法は但傳教大師 義真和尚 圓澄大師ノ三代計にてやありけん。天台ノ座主すでに眞言ノ座主にうつりぬ。名と所領とは天台山 其主は眞言師なり。されば慈覺大師智證大師は已今當の經文をやぶらせ給へ人なり。已今當の經文をやぶらせ給へはに釋迦多寶十方の諸佛の怨敵にあらずや。弘法大師こそ第一の謗法の人とれもうに。これはうれにはにるべくもなき僻事なり。其故は水火天地なる事は僻事なれども人用ふる事なければ其僻事成する事なし。弘法大師の御義はあまり僻事なれば弟子等も用ふる事なし。事相計は其門家なれども其教相の法門は弘法の義いるにききゆへに。善無畏 金剛智 不空 慈覺 智證の義にてあるなり。慈覺智證の義こそ眞言と天台とは理同なりなんと申せば皆人さもやとをもう。かうをもうゆへに事勝の印と眞言とにつひて。天台宗の人人畫像木像の開扉の佛事をねらはんがため。日本一同に眞言宗にちて天台宗は一人もなきなり。例せば法師と尼と黒と青とはまがひぬべければ眼くらき人はあやまつがかし。僧と男と白と赤とは目くらき人も迷はずいわうや眼あきらかなる者をや。慈覺智證の義は法師と尼と黒と青とがごとくなるゆへに。智人も迷と愚人もあやまら候て。此四百餘年が間は叡山 園城 東寺 奈良 五畿 七道 日本一州皆謗法の者となりぬ。抑法華經の第五に文殊師利此法華經諸佛如來ノ祕密之藏於諸經中ニ最在ニ其上ニ云云。此の經文のごとくならば法華經は大日經等の衆經の頂上に住

給へ人なり。已今當の經文をやぶらせ給へはに釋迦多寶十方の諸佛の怨敵にあらずや。弘法大師こそ第一の謗法の人とれもうに。これはうれにはにるべくもなき僻事なり。其故は水火天地なる事は僻事なれども人用ふる事なければ其僻事成する事なし。弘法大師の御義はあまり僻事なれば弟子等も用ふる事なし。事相計は其門家なれども其教相の法門は弘法の義いるにききゆへに。善無畏 金剛智 不空 慈覺 智證の義にてあるなり。慈覺智證の義こそ眞言と天台とは理同なりなんと申せば皆人さもやとをもう。かうをもうゆへに事勝の印と眞言とにつひて。天台宗の人人畫像木像の開扉の佛事をねらはんがため。日本一同に眞言宗にちて天台宗は一人もなきなり。例せば法師と尼と黒と青とはまがひぬべければ眼くらき人はあやまつがかし。僧と男と白と赤とは目くらき人も迷はずいわうや眼あきらかなる者をや。慈覺智證の義は法師と尼と黒と青とがごとくなるゆへに。智人も迷と愚人もあやまら候て。此四百餘年が間は叡山 園城 東寺 奈良 五畿 七道 日本一州皆謗法の者となりぬ。抑法華經の第五に文殊師利此法華經諸佛如來ノ祕密之藏於諸經中ニ最在ニ其上ニ云云。此の經文のごとくならば法華經は大日經等の衆經の頂上に住

し給う正法なり。さるにては善無畏金剛智不空弘法慈覺智證等は此經文をば
 いかんが會通せさせ給ふべき。法華經の第七ニ云有能受持是經典者亦
 復如是於一切衆生中亦爲第一等云云。此經文のごとくならば法華經の
 行者は川流江河の中の大海衆山の中の須彌山。衆星の中の月天衆明の中の
 大日天轉輪王帝釋諸王の中の大梵王なり。傳教大師の秀句と申す書ニ云此
 經亦復如是乃至諸經法中最爲第一有能受持是經典者亦復如是
 是於一切衆生中亦爲第一。已上經文なりと引キ入らせ給て次下ニ云天
 台法華立ニ云等云云。已上立文とかかせ給て上の心を釋ニ云當知他宗所
 依ノ經ハ未ク最爲第一其能持レ經者モ亦未ク第一。天台法華宗所持ノ法華經ハ
 最爲第一故能持レ法華者モ亦衆生中第一已ニ據ル佛說ニ豈ニ自歎哉等云云。
 次下に讓る釋ニ云委曲之依憑具有別卷也等云云。依憑集ニ云今吾天台大
 師說ニ法華經ヲ釋ニ法華經ヲ特ニ秀於群ニ獨ニ歩於唐ニ明ニ知如來ノ使也讚者ノ積ニ
 福於安明ニ謗者ノ開ニ罪於無間ニ等云云。法華經天台妙樂傳教の經釋の心
 のごとくならば。今日本國には法華經の行者は一人もなきがかし。月氏には
 教主釋尊寶塔品にして一切の佛をあつめさせ給て大地の上に居せしめ。大日

如來計り寶塔の中の南の下座にす(居)へ奉りて教主釋尊は北の上座につかせ
 給。此の大日如來は大日經胎藏界の大日金剛頂經金剛界の大日の主君な
 り。兩部の大日如來を即從等定たる多寶佛の上座に教主釋尊居せさせ給る
 此即法華經の行者なり天竺かくのごとし。漢土には陳帝の時天台大師南北
 にせめかちて現身に大師となる特ニ秀於群ニ獨ニ歩於唐ニ明ニ知如來ノ使也
 本國には傳教大師六宗にせめかちて日本の始第一の根本大師となり給。月
 氏漢土日本に但三人計り於一切衆生中亦爲第一にては候へ。されば秀句ニ
 云淺ハ易ク深ハ難ク釋迦ノ所判去レ淺就レ深丈夫之心也。天台大師ハ信順釋迦ニ助
 法華宗ヲ敷ニ揚震旦ニ叡山ノ一家ハ相ニ承天台ニ助ニ法華宗ヲ弘ニ通日本ニ等云云。佛
 滅後一千八百餘年が間に法華經の行者漢土に一人日本に一人已上二人。釋
 尊を加へ奉已上三人なり。外典ニ云聖人は一千年に一出一賢人は五百年に一
 出。黄河は涇渭ながれをわけて五百年には半河すみ千年は共に清と申
 は一定にて候けり。然に日本國は叡山計りに傳教大師の御時法華經の行者
 ましましけり。義真圓澄は第一第二の座主なり。第一の義真計り傳教大師に
 たり第二の圓澄は半は傳教の御弟子半は弘法の弟子なり。第三の慈覺大師

は始は傳教大師の御弟子ににたり。御年四十にて漢土にわたりてより。名は傳教の御弟子其跡をばつがせ給へども法門は全御弟子にはあらず。而ども圓頓の戒計は又御弟子ににたり。蝙蝠鳥のごとし鳥にもあらずねすみにもあらず梟鳥禽破鏡獸のごとし。法華經の父を食持者の母をかめるなり。日をい(射)るとゆめ(夢)にみしこれなり。されば死去の後は墓なくてやみぬ。智證の門家園城寺と慈覺の門家叡山と脩羅と惡龍と合戦ひまなし。園城寺をやさ叡山をやく。智證大師の本尊の慈氏菩薩もやけぬ慈覺大師の本尊大講堂もやけぬ現身に無間地獄をか(感)せり。但中堂計のこれり。弘法大師も又跡なし。弘法大師云、東大寺の受戒せざらん者をば東寺の長者とすべからず等御いましめの状あり。しかれども寛平法王、仁和寺を建立して東寺の法師をうつして。我寺には叡山の圓頓戒持ざらん者をば住せしむべからずと宣旨分明なり。されば今の東寺、法師は慶眞が弟子にもあらず弘法の弟子にもあらず。戒は傳教の御弟子なり。又傳教の御弟子にもあらず傳教、法華經を破失す。去承和二年三月二十一日に死去ありしかば公家より遺體をば後(葬)らせ給。其後誑惑の弟子等集りて御入定と云云。或はかみ(髮)をうりてまいら

するがといひる或は三針をかんと(漢土)よりなげたりといひる。或は日輪夜中に出たりといひる。或は現身に大日如來となりたりといひ。或は傳教大師に十八道ををしへまいらせ給、といひて。師の徳をあげて智慧にかへ我師の邪義を扶けて王臣を誑惑するなり。又高野山に本寺傳法院といひし二の寺あり。本寺は弘法のたてたる大塔大日如來なり。傳法院と申は正覺房、立金剛界の大日なり。此本末の二寺晝夜合戦あり例は叡山園城のごとし。誑惑のつもとて日本に二の禍の出現せるか。糞を集めて梅檀となせども焼く時は但糞の香なり。大妄語集めて佛とがらすとも但無間大城なり。尼毘が塔は數年が間利法廣大なりしかども馬鳴菩薩の禮をうけて忽にくづれぬ。鬼辨婆羅門がとばり(雌)は多年人をたばらかせしかども阿淨縛實沙菩薩にせめられてやぶれぬ。拘留外道は石となつて八百年陳那菩薩にせめられて水となりぬ。道士は漢土をたばらかすこと數百年摩騰竺蘭にせめられて仙經もやけぬ。趙高が國をとりし王莽が位をうばいしがごとく法華經の位をと(奪)て大日經の所領とせり。法王すでに國に失ぬ人王あに安穩ならんや。日本國は慈覺智證弘法の流なり一人として謗法ならざる人はなし。

但事の心を案ずるに大莊嚴佛の末一切明王佛の末法のごとし。威音王佛の末法には改悔ありしすら猶千劫阿鼻地獄に墮つ。いかにいわずや日本國の眞言師禪宗念佛者等は一分の廻心なし如是展轉至無數劫疑なきものか。かゝる謗法の國なれば天もすてぬ。天すつればふる(舊)き守護の善神もほこら(禿)愈をやひ(燒)て寂光の都へかへり給ぬ。但日蓮計留居て告示せば國主これをあだみ。數百人の民に或は罵詈或は惡口或は杖木或は刀劍或は宅宅ごにせき或は家家ごにをら。うれにかなはねば我と手をくだして二度まで流罪あり。去文永八年九月の十二日に頸を切とす。最勝王經云、由下愛敬惡人治罰善人上故他方怨賊來國人遭喪亂等云云。大集經云、若復有諸刹利國王作諸非法惱亂世尊聲聞弟子者。若以毀罵刀杖打斫及奪衣鉢種種資具若他給施作留難者。我等令彼自然卒起他方怨敵及自國土亦令兵起病疫飢饉非時風雨鬪諍言訟又令其王不復當亡失己國等云云。此等の文のごときは日蓮この國になくば佛は大妄語の人阿鼻地獄はいかで脱給べき。去文永八年九月十二日平左衛門並數百人に向云。日蓮は日本國のはしら(柱)なり日蓮失はばならは日本國のはしちを

たをす(鋼)になりぬ等云云。此經文に智人を國主等若は惡僧等がざんげんにより若は諸人の惡口によて失にあつるならは。にはかにいくさ(軍)をこり又大風ふかせ他國よりせむべし等云云。去文永九年二月のとし(同土)いくさ。同十一年の四月の大風。同十月に大蒙古の來しは偏に日蓮がゆへにあらすや。いわずや前よりこれをかながへたり誰の人か疑べき。弘法慈覺智證の悞並に禪宗と念佛宗とのわざわい(禍)あいをこりて。逆風に大波をこり大地震のかさなれるがごとし。さればやふやく國をとろろ。太政入道が國をれ(支)へ承久に王位つきはて(盡果)て世東にうつりしかども。但國中のみだれにて他國のせめはなかりき。彼は謗法の者は國に充滿せりといへどもさ(支)へ顯す智人なしかるがゆへになのめ(平)なりき。譬へば師子のね(眼)れるは手をつけざればほへず。迅流は櫓をさへざれば波たかからず。盜人はどめざればいからず。火は薪を加ざればさかんならず。謗法はあれどもあらわす人なければ國もをだやかなるにいたり。例せば日本國に佛法わたりはじめて候しに。始はなに事もなかりしかども守屋佛をやき僧をいましめ堂塔をやきしかば。天より火の雨ふり國にはうさ(寇)をこり兵亂つづきしがご

とし。此はうれにはにるべくもなし。謗法の人人も國に充滿せり日蓮が大義も強くせめかかる。脩羅と帝釋と佛と魔王との合戦にもをとるべからず。金光明經云、時ニ鄰國ノ怨敵興ニ如キ是ノ念ヲ當ニ具シ四兵ヲ壞ル彼國土ヲ等云云。又云、時ニ王見已即嚴四兵ヲ發ニ向シ彼國ニ欲レ爲ニ討罰ヲ我等爾ノ時ニ當ニ與ニ眷屬無量無邊ノ藥又諸神ニ各隱シ形ヲ爲ニ作シ護助ヲ令中彼怨敵自然ニ降伏上等云云。最勝王經の文又かくのごとし大集經云云仁王經云云。此等の經文のごときんば正法を行するものを國主あだみ。邪法を行する者のかたうとせば。大梵天王帝釋日月四天等鄰國の賢王の身に入りかわりて其國をせむべしとみゆ。例せば訖利多王を雪山下王のせめ大族王を幻日王の失がごとし。訖利多王と大族王とは月氏の佛法を失し王がかし。漢土にも佛法をほろぼしし王みな賢王にせめられぬ。これは彼にはにるべくもなし。佛法のかたうとなるやうにて佛法を失法師のかたうとをするゆへに。愚者はすべてしらす。智者なんども常の智人はしりがたし。天も下劣の天人は知らずもやあるらん。されば漢土月氏のいしへ(古)のみだれよりも大なるべし。法滅盡經云、吾般泥洹後五逆濁世ニ魔道興盛魔作沙門壞亂吾道。乃至惡人轉多如海中沙善者甚少若

一若ニ云云。涅槃經ニ云、信ニ如キ是ノ等ノ涅槃經典ニ如ク爪上土乃至不信ニ是ノ經ヲ如シ十方界ノ所有ノ地上ノ等云云。此經文は予が肝に染みぬ。當世日本國には我も法華經を信したり信したり。諸人の語のごときんば一人も謗法の者なし。此經文には末法に謗法の者十方の地土正法の者爪上土等云云。經文と世間とは水火なり。世間の人云、日本國には日蓮一人計謗法の者等云云。又經文には天地せり。法滅盡經には善者一二人涅槃經には信者爪上土等云云。經文のごときんば日本國は但日蓮一人ころ爪上土一二人にては候へ。經文をか用へべき世間をか用へべき。問テ云、涅槃經の文には涅槃經の行者は爪上土等云云汝が義には法華經等云云如何。答テ云、涅槃經ニ云、如シ法華ノ中等云云妙樂大師云、大經自指シ法華ヲ爲極ト等云云。大經と申は涅槃經也。涅槃經には法華經を極と指て候なり。而を涅槃宗の人の涅槃經を法華經に勝と申せしは。主を所從といひ下郎を上郎といひし人なり。涅槃經をよむと申は法華經をよむを申なり。譬へば賢人は國主を重んずる者をば我をさぐれども悦なり。涅槃經は法華經を下て我をほむる人をばあながちに敵とにくませ給る。此例をもつて知るべし華嚴經觀經大日經等をよむ人も法華經を劣とよ

むは彼彼の經經の心にはうむくべし。此をもつて知べし法華經をよむ人の此經をば信するやうなれども。諸經にても得道なる(成)とれもうは此經をよまぬ人なり。例せば嘉祥大師は法華立と申、文十卷造りて法華經をほめしかども。妙樂かれをせめて云、毀在_レ其中_一何_レ成_レ弘讚_一等云云法華經をやぶる人なり。されば嘉祥は落_テて天台につかひ(在)て法華經をよます。我れ經をよむならば惡道まぬかれがたしとて七年まで身を橋とし給_ヒき。慈恩大師は立贊と申_テて法華經をほむる文十卷あり。傳教大師せめて云、雖_レ讚_ニ法華經_一還_テ死_ス法華_ノ心_ヲ等云云。此等をもつてれもうに法華經をよみ讚歎する人人の中に無間地獄は多く有_ルなり。嘉祥慈恩すでに一乘誹謗の人_ヲか_シ弘法慈覺智證_ニわに法華經_一蔑如_ノの人_ニあ_ラずや。嘉祥大師のごとく講_テ廢_レ衆_ヲ散_ジて身を橋となせしも猶や已前の法華經誹謗の罪やさへざるらん。不輕輕毀の者は不輕菩薩に信伏隨從せしかども重罪いまだのこりて千劫阿鼻に墮_レぬ。されば弘法慈覺智證等は設_ヒるがへす心ありとも尚法華經をよむならば重罪さへがたし。いわうやひるがへる心なし又法華經を失_ハ眞言教を晝夜_ニ行_ヒ朝暮_ニ傳法せしをや。世親菩薩馬鳴菩薩は小をもて大を破せる罪をば舌を切らんとこり

せしか。世親菩薩は佛説なれども阿含經をばたわふれにも舌の上_ニをかじとちかひ。馬鳴菩薩は懺悔のために起信論をつくりて小乘をやぶり給_ヒき。嘉祥大師は天台大師を請_テ奉_リて百餘人の智者の前にして。五體を地になげ徧身にあせ(汗)をながし紅_クのなんだをながして。今よりは弟子を見_レ法華經をか(講)せじ。弟子の面をまほり法華經をよみたてまつれば我力の此經を知_ルに(似)たりとて。天台よりも高僧老僧にてねはせしが。わざと人のみるときをひ(負)まいらせて河をこへ。かうぞ(高座)にちかづきてせなか(背)にのせまいらせて高座にのぼせてまつり。結句御臨終の後には隋の皇帝にまい(参)らせて小兒が母にをくれ(後)たるがごとくに足をすりてなき給_ヒしなり。嘉祥大師の法華立を見るにいたう法華經_ヲ謗_ルたる疏_ニはあ_ラず。但法華經と諸大乘經とは門は淺深あれども心は一_トか_キてころ候へ。此が謗法の根本にて候か。華嚴の澄觀も眞言の善無畏も大日經と法華經とは理は一_トか_キてころかかれて候へ。嘉祥どが(科)あらば善無畏三藏も脱_ガたし。されば善無畏三藏は中天の國主なり位をすてて他國にいたり殊勝招提の二人にあひて。法華經をうけ百千の石の塔_ヲ立_テしかば法華經の行者とこりみへしか。しかれども大日經を習_ヒよ

りこのかた法華經を大目經に劣るとやれもひけん。始はいたう其義もなかりけるが漢土にわたりにて玄宗皇帝の師となりぬ。天台宗をうねみ思ふ心つき給けるかのゆへに。忽に頓死して二人の獄卒に鐵の繩七つけられて閻魔王宮にいたりぬ。命いまだつきすといてかへされしに、法華經謗法とやれもひけん眞言の觀念印眞言等をばなげすて。法華經の今此三界の文を唱へて繩も切かへされ給ぬ。又雨のいのりをれほせつけられたりしに。忽に雨は下たりしかども大風吹きて國をやぶる。結句死し給てありしには。弟子等集りて臨終いみじきやうをほめしかども無間大城に墮にき。問云何にをもつてかこれをしる。答云彼傳を見るに云今觀畏之遺形漸加縮小黒皮隱骨其露焉等云云。彼の弟子等は死後に地獄の相の顯たるをしらずして徳をあぐなををもへども。かきあらはせる筆は畏が失をかけり。死してありければ身やふやくつづま(縮)りちひさ(小)く皮はくろ(黒)し骨あらは(露)なり等云云。人死して後色の黒きは地獄の業と定事は佛陀の金言をかし。善無畏三藏の地獄の業はなに事か。幼少にして位をすてぬ第一の道心なり月氏五十餘箇國を修行せり慈悲の餘に漢土にわたれり。天竺震旦日本一閻浮提の内に眞言を傳

へ鈴をふる此人の徳にあらずや。いかにして地獄に墮けると後生をれもはん人人は御尋あるべし。又金剛智三藏は南天竺の大王の太子也。金剛頂經を漢土にわたす其徳善無畏のごとし。又互に師となれり。而に金剛智三藏勅宣によて雨の祈りありしかば七日が中に雨下る。天子大に悦ばせ給はば。忽に大風吹來。王臣等けうさめ(興覺)給て使をつけて追はせ給はば。かどもとかうのべて留し也。結句は姫宮の御死去ありしに。いのり(祈)をなすべしとて。身の代に殿上の二の女子七歳になりしを薪につみこめて焼殺せし事ころ無慚にはねばゆれ。而ども姫宮もいきかへり給はず。不空三藏は金剛智と月支より御ともせり。此等の事を不審とやをもひけん畏と智と入滅の後月氏に還りて龍智に値奉り。眞言を習なを(直)し天台宗に歸伏してありしが。心計は歸ども身はかへる事なし。雨の御いのりうけ給たりしが三日と申すに雨下る天子悦ばせ給て我と御布施ひかせ給。須臾ありしかば大風落下内裏をも吹やぶり。雲閣月卿の宿所一所もあるべしともみへざりしかば。天子大に驚きて宣言なりて風をとどめよ。且くありては又吹又吹せしほどに數日が間やむことなし。結句は使をつけて追つてこる風もやみてありしが。此三人

の悪風は漢土日本の一切の眞言師の大風なり。さにてあるやらん去文永十一年四月十二日の大風は。阿彌陀堂加賀法印東寺第一の智者の雨のいのりに吹きたりし逆風なり。善無畏金剛智不空の悪法をすこしもたがへず傳たりけるか。心にくし心にくし。弘法大師は去天長元年の二月大旱魃のありしに。先には守敏祈雨して七日が内に雨を下す但京中にふりて田舎にろくがず。次に弘法承取て一七日に雨氣なし二七日に雲なし。三七日と申せしに天子より和氣の眞綱を使者として御幣を神泉苑にまいらせたりしかば雨下事三日。此をば弘法大師並に弟子等此の雨をうばひとり。我カ雨として今に四百餘年弘法の雨という。慈覺大師の夢に日輪をい(射)しと。弘法大師の大妄語云、弘仁九年、春大疫をいのりしかば夜中に大日輪出現せりと云云。成劫より已來住劫の第九ノ滅已上二十九劫が間に日輪夜中に出という事なし。慈覺大師は夢に日輪をいるという。内典五千七千外典三千餘卷に日輪をいるとゆめにみるは吉夢という事有りやいなや。脩羅は帝釋をあたみて日天をいたてまつる其矢かへりて我が眼にたつ。殷の紂王は日天を的にいて身を亡。日本の神武天皇の御時度美長と五瀬命と合戦ありしに命の手に矢たつ。命云、我はこれ日天の子孫なり日に向奉りて弓をひくゆへに日天のせめをかをほれりと云云。阿闍世王は佛に歸しまいらせて内裏に返りてぎよしん(御寢)なりしが。をどろいて諸臣に向テ云、日輪天より地に落とゆめにみる。諸臣云、佛の御入滅か云云。須跋陀羅がゆめ又かくのごとし。我國は殊にいむ(忌)べきゆめなり。神をば天照という國をば日本という。又教主釋尊をば日種と申、摩耶夫人日をはらむとゆめにみてまうけ給へる太子なり。慈覺大師は大日如來を叡山に立釋迦佛をすて眞言の三部經をあがめて。法華經の二部の敵となりしゆへに此夢出現せり。例せば漢土の善導が始は密州の明勝といひし者に値つて法華經をよみたりしが。後には道綽に値つて法華經をすて觀經に依りて疏をつくり。法華經をば千中無一念佛をば十即十生百即百生と定めて。此義を成がために阿彌陀佛の御前にして祈誓をなす。佛意に叶やいなや毎夜夢中常有二僧而來指授すと云云。乃至一如二經法乃至觀念法門經等云云。法華經には若有二聞法者無一不成佛善導は千中無一等云云。法華經と善導とは水火也。善導は觀經をば十即十生百即百生無量義經云、觀經は未顯眞實等云云。無量義經と楊柳房とは天地也。此を阿彌陀佛の僧と成りて來つて眞なり

と證せばあに眞事ならんや。抑阿彌陀は法華經の座に來りて舌をば出さし給はざりけるか。觀音勢至は法華經の座にはなかりけるか。此をもてをもへ慈覺大師の御夢はわざわひなり。問テ云ク弘法大師ノ心經ノ秘鍵ニ云ク于レ時弘仁九年、春天下大疫。爰ニ皇帝自染ニ黄金ヲ於筆端ニ握ニ紺紙ヲ於爪掌ニ奉レ書ニ寫シ般若心經一卷ヲ。予範テ講讀之撰ニ綴ニ經旨之宗ヲ未レ吐ニ結願之詞ヲ蘇生之族ニ途ニ。夜變而日光赫赫是非愚身ノ戒德ニ金輪御信力ノ所爲也。但詣ニ神舍ニ輩ニ奉レ誦シ此秘鍵ヲ。昔予陪ニ鷲峰說法之筵ニ親リ聞ニ其深文ヲ豈不レ達ニ其義ニ而已等云云。又孔雀經ノ音義ニ云ク弘法大師歸朝之後欲レ立ニ眞言宗ヲ諸宗ヲ群ニ集ニ朝廷ニ矣。疑ニ即身成佛ノ義ヲ。大師結テ智拳ノ印ヲ向ニ南方ニ面門俄ニ開テ成ニ金色ノ毘盧遮那ト即便還ニ歸ニ本體ニ。入我我人之事即身頓證之疑ヒ此日釋然。然眞言瑜伽ノ宗秘密曼荼羅ノ道從ニ彼時ニ而建立矣。又云ク此時ニ諸宗ノ學徒歸ニ大師ニ始テ得テ眞言ヲ請益シ習學ス。二論ノ道昌 法相ノ源仁 華嚴ノ道雄 天台ノ圓澄等皆其類也。弘法大師ノ傳ニ云ク歸朝泛舟之日發願云ク我所學ノ教法若有ニ感應之地ニ者此ニ站可到ニ其處ニ仍テ向テ日本ノ方ニ抛ケ上ク三站ヲ遙ニ飛テ入ル雲ニ十月ニ歸朝ス云云。又云ク高野山下ニ占ニ入定ノ所ヲ乃至彼海上之三站今新在此ニ等云云。此大師の徳無量なり其

兩三を示す。かくのごとくの大徳ありいかんが此人を信せずしてかへりて阿鼻地獄に墮といはんや。答テ云ク予も仰ニて信じ奉ル事かくのごとし。但古の人人も不可思議の徳ありしかども佛法の邪正は其にはよらず。外道が或は恆河を耳に十二年留或ハ大海をすひ(吸)はし或は日月を手ににぎり或は釋子を牛羊となしなんぞせしかども。いよいよ大慢ををこして生死の業どころなりしか。此をば天台云ク邀ニ名利ニ増ニ見愛トどころ釋ニられて候へ。光宅が忽に雨を下シ須臾に花を感せしをも妙樂は感應若レ此猶不レ稱理ニどころかかかれて候へ。されば天台大師の法華經をよみて須臾に甘雨を下セ。傳教大師の三日が内に甘露の雨をふらしてればせしも其をもつて佛意に叶フとはをほせられず。弘法大師いかなる徳ましますとも法華經を戲論の法と定釋迦佛を無明邊域とかがせ給へる御ふで(筆)は。智慧かしてからん人は用ユベからず。いかにいわうや上にあげられて候徳どもは不審ある事なり。弘仁九年の春天下大疫等云云春は九十日何ノ月何ノ日乎是一。又弘仁九年には大疫ありけるか是ニ。又夜變而日光赫赫たりと云云此事第一の大事なり。弘仁九年ハ嵯峨天皇ノ御宇なり左史右史の記に載セたりや是ニ。設載セたりとも信ガたき事なり。成劫ニ

十劫住劫九劫已上二十九劫が間にいまだ無き天變也。夜中に日輪の出現せる事如何又如來一代の聖教にもみへず。未來に夜中に日輪出ッベしとは三皇五帝ノ三墳五典にも載せず。佛經のごときんば滅劫にころ二、日三ノ日乃至七、日は出ッベしとは見へたれども。かれは晝のごとくかしの夜日出現せば東西北の三方は如何。設内外の典に記せずとも現に弘仁九年の春何月何日何夜の何時に日出といふ。公家諸家叡山等の日記あるならばすこし信するへんもや。次キ下に昔予陪三鷲峰說法之筵ニ親リ聞ク其深文ヲ等云云。此筆を人に信せさせしめんがためにかまへ出ッす大妄語か。されば靈山にして法華は戲論 大日經は眞實と佛の説キ給けるを。阿難文殊が悞りて妙法華經をば眞實とかけるかいかん。いふにかいななき姪女破戒の法師等が歌をよみて雨す雨を。三七日まで下ッざりし人はかゝる徳あるべしや是四。孔雀經ノ音義ニ云ク大師結テ智拳ノ印ヲ向ニ南方ニ面門俄鬪テ成ニ金色ノ毘盧遮那ト等云云。此又何王何年時ぞ。漢土には建元を初トし日本には大寶を初トして緇素の日記大事には必年號のあるが。これほどの大事にいかでか王も臣も年號も日時もなきや。又次云。三論ノ道昌 法相ノ源仁 華嚴ノ道雄 天台ノ圓澄等云云。抑圓澄は寂光大師天台第二の座主なり其時何ぞ第一の座主義眞根本の傳教大師をば召ッざりけるや。圓澄は天台第二の座主 傳教大師の御弟子なれども又弘法大師の弟子なり。弟子を召さんよりは三論法相華嚴よりは天台の傳教義眞の二人を召ッべかりけるか。而も此日記ニ云ク眞言瑜伽ノ宗祕密曼荼羅從ニ彼時ニ而建立ス矣等云云。此筆は傳教義眞の御存生かどみゆ。弘法は平城天皇大同二年より弘仁十三年までは盛に眞言をひろめし人なり。其時は此二人現にねはします。又義眞は天長十年までにはせしかば其時まで弘法の眞言はひろまらざりけるかかたがた不審あり。孔雀經の疏は弘法の弟子眞濟が自記なり信ッがたし。又邪見者が公家諸家圓澄の記をひかるべきかの。又道昌 源仁 道雄の記を尋ッべし。面門俄開テ成ニ金色ノ毘盧遮那ト等云云。面門者口なり。口の開ケたりけるか。眉間開トとかかんとしけるが悞りて面門とかけるか。ぼら(謀)書をつくるゆへにかゝるあやまりあるか。大師結テ智拳ノ印ヲ向ニ南方ニ面門俄開テ成ニ金色ノ毘盧遮那ト等云云。涅槃經ノ五ニ云ク迦葉白ン佛ニ言ク世尊我今不依ニ是ノ四種ノ人ニ何ヲ以テ故ニ。如キ瞿師羅經ノ中ノ佛爲ニ瞿師羅ニ說ク天魔梵爲ニ欲ニ破壞ニ變ニ爲ニ佛ノ像ト具ニ足ニ莊ニ嚴ニ三十二相八十種好ト。圓光一尋面部圓滿 猶ク月ノ盛明一眉間ノ毫相白踰ニ珂雪ニ乃至左ノ脇出レ水ヲ

報恩抄 (遺二一ノ七〇)

右ノ脇出^{ユリ}火^テ等云云。又六ノ卷ニ云ク佛告^ハ迦葉^ニ我般涅槃^ニ乃至後是^ノ魔波旬漸^ク當^ニ沮^ニ壞^ス我之正法^ヲ。乃至化作^リ阿羅漢^ノ身及佛^ノ色身^ト魔王^以此有漏之形^ヲ作^リ無漏^ノ身^ト壞^ス我正法^ヲ等云云。弘法大師は法華經を華嚴經大日經に對して戲論等云云。而佛身^{カモ}を現^スず。此涅槃經には魔有漏之形^{カタチ}をもつて佛となつて我正法をやぶらんと記^シ給^フ。涅槃經の正法は法華經なり故^ニ經^ノ次^キ下^ノ文^ニ云^ク久^ク已^ニ成佛^ス又云^ク如^シ法華^ノ中^ノ等^云云。釋迦多寶十方の諸佛は一切經に對して法華經は眞實 大日經等の一切經は不眞實等云云。弘法大師は佛身を現じて華嚴經大日經に對して法華經は戲論等云云。佛説まことならば弘法は天魔にあらざるや。又三鉢の事殊に不審なり漢土の人の日本に來^リてほり^テ撰^ヒいだすとも信じがたし。已前に人をやつかわしてうづみ^テ埋^メけん。い^ハわ^ラや弘法は日本^ノ人かゝる誑亂其數多し。此等をもつて佛意に叶^フ人の證據とはしりがたし。されば此眞言禪宗念佛等やうやくかうなり來^ル程に。人王八十二代尊成^{タカナリ}隱岐の法王 權^ノ太夫殿を失^フと年ころはげませ給^ヒけるゆへに。國主なればなにとなくとも師子王の兔を伏^{スル}がごとく鷹の雉^ヲ取^ルやうにころあるべかりし上^ニ叡山東寺 園城 奈良 七大寺 天照太神 正八幡 山王 加茂 春日等に。數年が間或は

調伏或は神に申^サせ給^ヒしに。二日三日だにもさへかねて佐渡國阿波國隱岐國等にながし失^フて終^ニにかくれさせ給^ヒぬ。調伏の上首御室^ニは但東寺をかへらるのみならず。眼のごとくあひ^テ愛^セさせ給^ヒし第一の天童 勢多伽^カが頸切^ケられたりしかば。調伏のしるし還著^ス於本人のゆへとこり見^テ候^ヘ。これはわづかの事なり。此後定日本^ノ國臣萬民一人もなく乾草を積^ミて火を放^ツがごとく大山のくづれて谷をうむるがごとく。我國 他國にせめらるる事出來すべし。此事日本國の中に但日蓮一人計^リしれり。い^ハい^ハだ^スならば般の紂王の比干が胸をさきしがごとく夏の桀王の龍蓬^ヲが頸を切^リがごとく。檀彌羅王の師子尊者が頸を刎^ツがごとく竺道生が流^レがごとく。法道三藏のかなやき^テ火^ト印^ヲをやかれ^テ燒^シがごとく。ならんずらんとはかねて知^リしかども。法華經には我^レ不^レ愛^ニ身命^ヲ但惜^ニ無上道^ヲととかれ涅槃經には靈喪^ニ身命^ヲ不^レ匿^ク教^ヲ者といさめ給^ワり。今度命^ヲをれしむならばいつの世にか佛になるべき。又何^カなる世にか父母師匠をもすくひ奉^ルべきとひとへにをもひ切^リて申^シ始めしかば。案^ニにたがはず或は所をれひ或はのり或はうたれ或は疵^{キズ}をかふるほどに。去^ル弘長元年^{カノトヨリ}辛酉五月十二日に御勘氣をかうふりて伊豆^ノ國伊東にながされぬ。又同弘長

三年癸亥二月二十二日にゆりぬ。其後彌菩提心強盛にして申せばいよいよ大難かさなる事大風に大波の起るがごとし。昔の不輕菩薩の杖木のせめも我身につみしられたり。覺徳比丘が歡喜佛の末の大難も此には及ばじとをばゆ。日本六十六箇國嶋二の中に一日片時も何の所にすむべきやうもなし。古は二百五十戒を持て忍辱なる事羅云のごとくなる持戒の聖人も。富樓那のごとくなる智者も。日蓮に値ぬれば悪口をはく。正直にして魏徴忠仁公のごとくなる賢者等も。日蓮を見ては理をまげて非とをこなう。いわうや世間の常の人人は犬のさる(猿)をみたるがごとく獵師が鹿をこめたるにたり。日本國の中に一人として故こらあるらめという人なし。道理なり。人ごとに念佛を申る。人に向ふごとに念佛は無間に墮というゆへに。人ごとに眞言を尊む。眞言は國をほろぼす悪法という。國主は禪宗を尊む。日蓮は天魔の所爲といふゆへに。我と招けるわざわひなれば人ののるをもとがめず。とがむとても一人ならず。打ッをもいたまず本より存せしがゆへに。かういよいよ身もをしますせめしかば。禪僧數百人念佛者數千人眞言師百千人。或は奉行につき或はきり人(權家)につき。或はきり女房(權圍)につき或は後家尼御前等につい

て無盡のざんげん(讒言)をなせし程に。最後には天下第一の大事日本國を失と咒(呪)する法師なり。故最明寺殿極樂寺殿を無間地獄に墮と申法師なり。御尋あるまでもなし但須臾に頸ヲめせ。弟子等をば又或は頸を切り或は遠國につかはし或は籠に入よと。尼ごせんたちいからせ給しかばるのまゝ行けり。去文永八年辛未九月十二日の夜は相摸國たつの口にて切れるべかりしが。いかにしてやありけん其夜はのびて依智といふところへつきぬ。又十三日の夜はゆり(許)たりととめき(多口)しか。又いかにやありけんさ(佐渡)の國までゆく。今日切あす切といひしほどに四箇年というに。結句は去文永十一年太歳甲戌二月の十四日にゆりて同三月二十六日に鎌倉へ入。同四月の八日平ノ左衛門ノ尉に見參してやうやうの事申したりし中に。今年は蒙古は一定よすべしと申ぬ。同五月の十二日にかまくら(鎌倉)をいでて此山に入り。これはひとへに父母の恩 師匠の恩 三寶の恩 國恩をほう(報)せんがためをいさむるに用はずば山林にまじわれといふことは定るれい(例)なり。此功德は定て上三寶下梵天帝釋日月までもしろしめしぬらん。父母も故道善房の

聖靈も扶かり給つらん。但疑念^{カヒ}ことあり目連尊者は扶^{カシ}とれもいしかども母の青提女は餓鬼道に墮^ツぬ。大覺世尊の御子なれども善星比丘は阿鼻地獄へ墮^ツぬ。これは力のまやすく(救)はんとをばせども自業自得果のへん(邊)はすくひがたし。故道善房はいたう弟子なれば日蓮をばにくしとはをばせ(覺)ざりけるらめども。さわめて臆病なりし上清澄^{キヨスミ}をはなれじと執^シせし人なり。地頭景信^{カハノヨ}がをうるしといひ提婆瞿伽利^{クギヤリ}にことならぬ圓智實城^{エンチ}が上^{ウヘ}と下^{シタ}とに居てをせしを。あながち(強)にをうれていとをしとをもうとし(年)ころの弟子等をだにも。すてられし人なれば後生はいかながと疑う。但^{ウツク}一の冥加には景信と圓智實城とがさきにゆきしころ一のたすかりとはをもへども。彼等は法華經の十羅刹のせめをかほりてはやく失ぬ。後にすこし信せられてありしはいさかひの後のちぎりきなり。ひるのともしび(燈)なにかせん。其止いかなる事あれども子弟^{コトシ}なんといふ者は不便^{ふびん}なる者^{もの}がかし。力なき人にもあらざりしがさど(佐渡)の國までゆきしに。一度もとぶら(助)はれざりし事は信じたるにはあらぬがかし。うれにつけてもあさましければ彼人の御死去ときくには。火にも入り水にも沈みはしり(走)たちてもゆひて。御はか(墓)をもたへい

て經をも一卷讀誦せんところれもへども。賢人のならひ心には遁世とはれもはねども人は遁世とてころれもうらん。ゆへもなくはしり出^デるならば末へもとをらずと人れもうべし。さればいかにれもうともまいるべきにあらす。但各各二人は日蓮が幼少の師匠にてはします。勤操僧正行表僧正の傳教大師の御師たりしがかへりて御弟子とならせ給^タしがごとし。日蓮が景信^{カハノヨ}にだまれて清澄山を出^デしにをひ(進)てしのび出^デられたりしは。天下第一の法華經の奉公なり後生は疑^ウたばすべからず。問^テ云^フ法華經一部八卷二十八品の中に何物か肝心^{カニ}。答^テ云^フ華嚴經の肝心は大方廣佛華嚴經阿含經の肝心は佛說中阿含經大集經の肝心は大方等大集經般若經の肝心は摩訶般若波羅蜜經雙觀經の肝心は佛說無量壽經觀經の肝心は佛說觀無量壽經阿彌陀經の肝心は佛說阿彌陀經。涅槃經の肝心は大般涅槃經。かくのごとく一切經は皆如是我聞の上^{カミ}の題目其經の肝心なり。大は大につけ小は小につけて題目をもて肝心とす。大日經金剛頂經蘇悉地經等亦復かくのごとし。佛^モ又かくのごとし大日如來日月燈明佛燃燈佛大通佛雲雷音王佛是等も又名の内^{ウチ}に其佛の種種の徳をうなへたり。今の法華經も亦もつてかくのごとし。如是我聞の上^{カミ}の

妙法蓮華經の五字、即一部八卷の肝心。亦復一切經の肝心一切、諸佛菩薩二乘天人脩羅龍神等の頂上の正法なり。問テ云ク南無妙法蓮華經と心もしらぬ者の唱ト。南無大方廣佛華嚴經と心もしらぬ者の唱ト。齊等なりや。淺深の功德差別せりや。答テ云ク淺深等あり。疑テ云ク其心如何。答テ云ク小河は露と涓と井と渠と江とをば收れども大河ををさめず。大河は露乃至小河を攝れども大海ををさめず。阿含經は井江等露涓ををさめたる小河のごとし。方等經阿彌陀經大日經華嚴經等は小河ををさむる大河なり。法華經は露涓井江小河大河天雨等の一切の水を一滂ももらさぬ大海なり。譬へば身の熱者の大寒水の邊にいぬつればすすしく小水の邊に臥ぬれば苦がごとし。五逆謗法の大一闡提人。阿含華嚴觀經大日經等の小水の邊にては大罪の大熱さん(散)じがたし。法華經の大雪山の上に臥ぬれば五逆誹謗一闡提等の大熱忽に散すべし。されば愚者は必法華經を信すべし。各各經經の題目は易き事同じといへども愚者と智者との唱。功德は天地雲泥なり。譬へば大綱は大力も切りがたし小力なれども小刀をもてたやすくこれをきる。譬へば堅石をば鈍刀をもてば大力も破がたし利劍をもてば小力も破ぬべし。譬へば藥はしらぬども

服すれば病やみ(止)ぬ食は服ども病やまず。譬へば仙藥は命をのべ凡藥は病をいや(癒)せども命をのべず。疑テ云ク二十八品の中に何か肝心。答テ云ク或ハ云ク品品皆事に隨て肝心なり。或ハ云ク方便品壽量品肝心なり。或ハ云ク方便品肝心なり。或ハ云ク壽量品肝心なり。或ハ云ク開示悟入肝心なり。或ハ云ク實相肝心なり。問テ云ク汝が心如何答テ南無妙法蓮華經肝心なり。其證如何。阿難文殊等如是我聞等云云。問テ曰ク心如何。答テ云ク阿難と文殊とは八年が間此法華經の無量の義を一句一偈一字も残さず聽聞してありしが。佛の滅後に結集の時九百九十九人の阿羅漢が筆を染てありしに。妙法蓮華經とかかせて如是我聞と唱へさせ給はしは。妙法蓮華經の五字は一部八卷二十八品の肝心にあらずや。されば過去の燈明佛の時より法華經を講せし光宅寺の法雲法師は如是者將レ傳レ所聞テ前題ニ舉テ一部也等云云。靈山にまのあたりきこしめしてありし天台大師は如是者所聞テ法體也等云云。章安大師云ク記者釋曰ク蓋シ序王者叙シ經ノ大意ヲ述ニ於文心ニ等云云。此釋に文心者題目は法華經の心也妙樂大師云ク收ニ一代ノ教法ヲ出ニ法華ノ文心ニ等云云。天竺は七十箇國なり摠名は月氏國。日本は六十箇國摠名は日本國。月氏の名の内に七十箇國乃至人畜珍寶

みなあり。日本と申す名の内に六十六箇國あり。出羽の羽も奥州の金も乃至國の珍寶人畜乃至寺塔も神社もみな日本と申す二字の名の内に攝れり。天眼をもつては日本と申す二字を見て六十六國乃至人畜等をみるべし。法眼をもつては人畜等の死此生彼をもみるべし。譬へば人の聲をきいて體をしり跡をみて大小をしる蓮をみて池の大小を計り雨をみて龍の分齊をかんがう。これはみな一切の有ることわりなり。阿含經の題目には大旨一切はあやうなれども但小釋迦一佛ありて他佛なし。華嚴經觀經大日經等には又一切有やうなれども一乘を佛になすやうと久遠實成の釋迦佛なし。例せば華さいて菓ならず雷なつて雨ふらず鼓あて音なし。眼あて物みず女人あて子をうます人あて命なし又神なし。大日の眞言 藥師眞言 阿彌陀の眞言 觀音の眞言等又かくのごとし。彼の經經にしては大王須彌山日月良藥如意珠利劍等のやうなれども。法華經の題目に對すれば雲泥、勝劣なるのみならず皆各各當體の自用を失ふ。例せば衆星の光の一日輪にうばはれ諸の鐵の一の磁石に値つて利精のつ(盡)き大劍の小火に値て用を失。牛乳鹽乳等の師子王の乳に値つて水となり。衆狐が術一犬に値つて失狗犬が小虎に値つて色を變ずる

がごとし。南無妙法蓮華經と申せば。南無阿彌陀佛の用も南無大日眞言の用も觀世音菩薩の用も一切の諸佛諸經諸菩薩の用。皆悉妙法蓮華經の用は失はる。彼經經は妙法蓮華經の用を借すは皆いたづらのもの(徒物)なるべし。當時眼前のごとはりなり。日蓮が南無妙法蓮華經と弘れば南無阿彌陀佛の用は月のかくるがごとく鹽のひる(干)がごとく。秋冬の草のかるるがごとく。氷の日天にとくるがごとくなりゆくをみよ。問云此法實にいみじくばなぞ迦葉阿難馬鳴龍樹無著天親南岳天台妙樂傳教等は。善導が南無阿彌陀佛とすゝめて漢土に弘通せしがごとく。慧心永觀法然が日本國を皆阿彌陀佛になしたるがごとくすゝめ給はざりけるやらん。答云此難は古の難なり今はじめたるにはあらず。馬鳴龍樹菩薩等は佛滅後六百年七百年等の大論師なり。此人人世にいでて大乘經を弘通せしかば。諸諸の小乗の者疑云迦葉阿難等は佛の滅後二十年四十年住壽し給て。正法をひるめ給しは如來一代の肝心をこる弘通し給しか。而に此人人は但苦空無常無我の法門をこり詮とし給しに。今馬鳴龍樹等がしこしといふとも迦葉阿難等にはすくべからず是。迦葉は佛にあひ(値)まいらせて解をねたる人なり。此人人は佛にお

ひたてまつらず是二。外道は常樂我淨と立しを。佛世に出させ給て苦空無常無我と説せ給。此ものどもは常樂我淨といへり。されば佛も御入滅なり。又迦葉等もかくれさせ給ぬれば。第六天の魔王が此ものどもが身に入りかはりて佛法をやぶり外道の法をなさんとするなり。されば佛法のあだをば頭をわれ頸をきれ命をた(断)て食を止めよ國を追へと。諸の小乗の人人申せしかども。馬鳴龍樹等は但一二人なり晝夜に悪口の聲をきき朝暮に杖木をかうふ(被)りしなり。而ども此二人は佛の御使ふかし。正く摩耶經には六百年に馬鳴出て七百年に龍樹出んと説かれて候。其上楞伽經等にも記せられたり又付法藏經には申にをよばず。されども諸の小乗のものどもは用はず但理不盡にせめしなり。如來現在猶多怨嫉況滅度後の經文は此時にあたりて少しつみしられけり。提婆菩薩の外道にころされ師子尊者の頸をきられし。此事をもつてれもひやらせ給へ。又佛滅後一千五百餘年にあたりて月氏よりは東に漢土といふ國あり陳隋の代に天台大師出世す。此人の云、如來の聖教に大あり小あり顯あり密あり權あり實あり。迦葉阿難等は一向に小を弘馬鳴龍樹無著天親等は權大乘を弘て。實大乘の法華經をば或は但指をさして義をかく

し或は經の面をのべて始中終をのべず。或は迹門をのべて本門をあらはさず。或は本迹あつて觀心なしといひしかば。南三北七の十流が末數千萬人時をつくりどつ(動)とわらふ。世の末になるまゝに不思議の法師も出現せり。時にあたりて我等を偏執する者はありとも。後漢の永平十年丁卯の歲より今陳隋にいたるまでの三藏人師二百六十餘人をものもしらとすと申上。謗法の者なり惡道に墮といふ者出來せり。あまりのものくるはしさに法華經を持て來り給へる羅什三藏をもものしらぬ者と申也。漢土はさてもをけ月氏の大論師龍樹天親等の數百人の四依の菩薩もいまだ實義をのべ給はずといふなり。此をころしたらん人は鷹をころしたるものなり。鬼をころすにもすぐべしとのしりき。又妙樂大師の時月氏より法相眞言わたり。漢土に華嚴宗の始たりしをどかく(兎角)せめしかばこれも又さはぎしなり。日本國には傳教大師が佛滅後一千八百年にあたりていでさせ給。天台の御釋を見て欽明より已來二百六十餘年が間の六宗をせめ給しかば。在世の外道漢土の道士日本に出現せりと謗せし上。佛滅後一千八百年が間月氏漢土日本になかりし圓頓の大戒を立といふのみならず。西國の觀音寺の戒壇東國下野小野寺の戒壇中國大

和ノ國東大寺の戒壇は。同々小乘臭糞の戒なり瓦石のごとし。其を持つ法師等は野干猿猴等のごとしとありしかば。あらず不思議や法師ににたる大蝗蟲國に出現せり佛教の苗一時にうせなん。殷の紂夏の桀法師となりて日本に生たり。後周の宇文唐の武宗二たび世に出現せり。佛法も但今失へし國もほるびなんと。大乘小乗の二類の法師出現せば脩羅と帝釋と項羽と高祖と一國に並べらるるべし。諸人手をたき舌をふるふ。在世には佛と提婆が二の戒壇ありて。うごばくの人人死にき。されば他宗にはるむくべし。我師天台大師の立て給はざる圓頓の戒壇を立べしといふ不思議さよ。あらねるしれるしとのし(罵)りあわりき。されども經文分明にありしかば叡山の大乗戒壇すでに立させ給ぬ。されば内證は同けれども法の流布は迦葉阿難よりも馬鳴龍樹等はすぐれの馬鳴等よりも天台はすぐれた天台よりも傳教は超させ給たり。世末になれば人の智はあざく佛教はふかくなる事なり。例せば輕病は凡藥重病には仙藥弱人には強きかたうど(方人)有って扶けるこれなり。問云、天台傳教の弘通し給はざる正法ありや。答云、有求云、何物乎。答云、三あり末法のために佛留(留)給、迦葉阿難等馬鳴龍樹等天台傳教等の弘通せさせ給はざる

る正法なり。求云、其形貌如何。答云、一は日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし。所謂寶塔の内の釋迦多寶外の諸佛並に上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごに有智無智をさらはず。一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱へし。此事いまだひろまらず一閻浮提の内に佛滅後二千二百二十五年が閻一人も唱へず。日蓮一人南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經等と聲もをしまず唱ふるなり。例せば風に隨つて波の大小あり薪によて火の高下あり池に隨つて蓮の大小あり雨の大小は龍による。根ふかければ枝しげし源遠ければ流ながしといふこれなり。周の代、七百年、文王の禮孝による秦、世はともなし始皇の左道なり。日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華經は萬年の外未來までもながる(流布)べし。日本國の一切衆生の盲目をひらける功德あり。無間地獄の道をふさぎぬ。此功德は傳教天台にも超へ龍樹迦葉にもすぐれたり。極樂百年の修行は穢土の一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は末法、一時に劣るか。是はひとへに日蓮が智のかしこきにはあらず時のしからしむる耳。春は花さき秋は菓なる夏はあたゝかに冬はつめたし。時のしからしむるに有

すや。我滅度ノ後後ノ五百歳ノ中ニ廣宣流布於ニ閻浮提ニ無令斷絶惡魔魔民諸、
 天龍夜叉鳩槃荼等得中其便也等云云。此經文若むなしくなるならば。舍利弗
 は華光如來とならじ迦葉尊者は光明如來とならじ目犍は多摩羅跋梅檀香佛と
 ならじ阿難は山海慧自在通王佛とならじ。摩訶波闍波提比丘尼は一切衆生喜
 見佛とならじ耶輸陀羅は具足千萬光相佛とならじ。三千塵點も戲論 五百塵點
 も妄語となりて。恐は教主釋尊は無間地獄に墮ち多寶佛は阿鼻の炎にむせび
 十方の諸佛は八大地獄を栖とし。一切の菩薩は一百二十六の苦をうくべ
 し。いかでかろの義あるべき。其義なくば日本國は一同の南無妙法蓮華經な
 り。されば花は根にかへり眞味は土にとどまる。此功德は故道善房の聖靈の
 御身にあつまるべし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

建治二年 太歲 丙子 七月二十一日

記之

自甲州波木井ノ郷蓑歩ノ嶽ニ奉送ス安房ノ國

東條ノ郡清澄山淨顯房義城房ノ本

啓一三四五 見聞一二 註八 鈔八 語二 拾二八 扶五

明治三十五年六月及翌年十二月三日京都本滿寺ニ於テ乾尊ノ御校本ニ依テ校正ス 但シ其奥云在ニ
 久遠寺 妙法華院一以ニ御正本一校レ之文字ノ破失數紙失墜ノ處有レ之ト其脱落ノ箇處ハ 大本二十九
 丁(一四五五の一〇行)左「輪」ヨリ三十三右三行ノ「かし」迄失セリ又四十左四行(一四六六の三行)
 「但妙」ヨリ次丁右二行「給」マテ失セリ又四十九(一四七四の一三行)左初行「み」ヨリ次丁右二行
 「傳教」マテ失セリ又六十四(一四八八の一五行)右初行「傳」ヨリ左二行「はす」マテ失セリ又七十二
 (一四九七の一三行)左九行「案」ヨリ次丁右八行「はく」迄失セリ又七十九(一五〇四の三行)右五行
 「法」ヨリ八十二左六行ノ「時」マテ失セリ其中八十一(一五〇五の一〇行)左五行「馬」ヨリ九行ノ「心
 を」迄ハ京都本禪寺ニアリ自餘ハ別記ニ在リ(稻田海素度記)

○報恩鈔送文 考二二三

御狀給候畢。無親疎ノ法門と申は心に入れぬ人にはいはぬ事にて候。御心
 得候へ。御本尊圖して進候。此法華經は佛の在世よりも佛の滅後。正法より
 も像法 像法よりも末法の初には次第に怨敵強なるべき由をだにも御心へ
 あるならば。日本國に是より外に法華經の行者なし。これを皆人存候ぬべし。
 道善御房の御死去之由去月粗承候。自身早々と參上し此御房をもやがての
 かはすべきにて候しが。自身は内心は存せずといへども人目には遁世のやう

に見て候へばなにとなく此山を出ず候。此御房は又内内人の申候しは宗論やあらんすらんと申せしゆへに。十方にわか(分)て經論等を尋しゆへに國ノ寺寺へ人をあまたつかはして候に。此御房はするが(駿河)の國へつかはして當時ころ來て候へ。又此文は随分大事の大事をもをかきて候。詮なからん人人にさかせなばわしかりぬべく候。又設(ト)さなくともあまたになり候はばはかさま(外様)にもきこは候なば。御ため又このため安穩ならず候はんか。御まへ(前)と義城房と二人此御房をよみてとして。嵩かもり(森)の頂にて二三遍又故道善御房の御はか(墓)にて一遍よませさせ給ては。此御房にあづかせ給てつねに御聽聞候へ。たびたびになり候ならば心づかせ給事候なむ。恐恐謹言。

七月二十六日

日蓮花押

清澄御房

高祖遺文録卷之二十一

○西山殿御返事

青鳧五貫文給候畢。夫雪至て白ければるむる(染)にうめられず漆至てくろ(黒)ければしる(白)くなる事なし。此よりうつりやすきは人の心也善惡にうめられ候。眞言禪念佛宗等の邪惡の者にうめられぬれば必地獄にをる。法華經にうめられ奉れば必ず佛になる。經云、諸法實相云云又云、若人不信乃至入阿鼻獄云云。いかにも御信心をば雪漆のまじりに御もち有べく候。恐恐。

建治二年丙子

日蓮花押

西山殿御返事

○曾谷殿御返事

微下二五 考八四一

夫法華經第一方便品云、諸佛ノ智慧、甚深無量云云。釋云、境淵無邊故云、甚深、智水難測、故云、無量。抑、此經釋の心は佛になる道は豈、境智の二法にあらざる。されば境と云、は萬法の體を云、智と云、は自體顯照の姿と云、也。

西山殿御返事 (遺二ノ二)

千五百十三

(外二ノ十四)

而るに境の淵ふちほとりなくふかき時は智慧の水ながるる事つゝがなし。此境智合しぬれば即身成佛する也。法華以前の經は境智各別にして而も權教方便なるが故に成佛せず。今法華經にして境智一如なる間開示悟入の四佛知見をさとりて成佛する也。此内證に聲聞辟支佛更に及ばざるところを次下つぎに一切聲聞辟支佛所不能知と説かるる也。此境智の二法は何物な但南無妙法蓮華經の五字也。此五字を地涌の大士を召よ出して結要けつご付屬ふくせしめ給たまはる是を本化付屬の法門とは云いふ也。然るに上行菩薩等末法の始の五百年に出生して。此境智の二法たる五字を弘ひろめさせ給たまはるべしと見みえたり。經文赫赫たり明明たり誰か是を論せん。日蓮は其人にも非ず又御使にもあらざれども先序分まきにあらあら弘ひろ候也。既に上行菩薩釋迦如來より妙法の智水を受うけて。末代惡世の枯槁ここうの衆生に流れかよはし給たまはる是智慧の義也。釋尊より上行菩薩へ讓ゆるり與へ給たまはる然るに日蓮又日本國にして此法門を弘ひろむ。又是には摠別しゆつべつの二義あり摠別しゆつべつの二義少すくも相あらむむけば成佛思もよらず。輪廻生死のもといたらん。例せば大通佛の第十六の釋迦如來に下種げしゆせし今日の聲聞は全ぜん彌陀藥師に遇あつて成佛せず。譬ば大海の水を家内へくみくみ來きらんには家内の者皆縁をふるべき也。然ども汲くみ來きるとこ

ろの大海の一滴を閣おて又他方の大海の水を求もとむ事は大僻案也大愚癡也。法華經の大海の智慧の水を受たる根源の師を忘れて餘あまへ心をうつさは必輪廻生死のわざはいなるべし。但た師なりとも誤ある者をは捨すつべし。又捨すつざる義も有あるべし。世間佛法の道理によるべき也。末世の僧等は佛法の道理をばしらすして我慢に著して師をいやしみ檀那をへつらふなり。但正直にして少欲知足たらん僧そうころ眞實しんじつの僧なるべけれ。文句一ニ云いふ既未けいみ發はつ眞しん慙ぜん第一義天だいいぎてん愧くわい諸しよ聖人せいじん即是有羞しゆう僧觀慧若そうくわんえいじやく發はつ即眞實しんじつ僧そう云いふ。涅槃經ねはんぎやうニ云いふ若善比丘見み壞くわい法ぽう者しや置お不お呵責あせ駈遣きせん舉處きよところ當あた知し是こゝ人ひと佛法ぶつぽう中ちゆう怨うら若じやく能よ駈遣きせん呵責あせ舉處きよところ是我弟わがあに子眞まこと聲聞也云云。此文の中に見壞法者の見けんと置不呵責おしんの置おとを能よ能よ心腑しんぷに可よ染せん也。法華經ほふけきやうの敵を見ながら置おてせめずんば師檀しだんともに無間地獄むかんじやくは疑うたがひなかるべし。南岳大師なんがくだうし云いふ與よ諸しよ惡人あくじん俱く墮だ地獄じやく云云。謗法ぼうぽうを責せずして成佛を願ねがはば火の中に水を求め水の中に火を尋たづねるが如ごとくなるべし。はかなしはかなし。何いかに法華經ほふけきやうを信じ給たまはるとも謗法ぼうぽうあらば必地獄じやくにをつべし。うるし漆千せんばいに蟹かにの足あし一つ入いたらんが如し。毒氣どくき深入しんじゆ失本心しつほんしん故ゆゑは是也。經きやうニ云いふ在在ざいざい諸しよ佛土ぶつど常じやう與よ師し俱く生せい。又云いふ若親じやくしん近きん法師ぽうし速すみ得とく菩薩ぼさつ道だう隨ずい順じゆん是こゝ師し學がく得とく

見^{上ル}恆沙ノ佛^ヲ釋^ニ云^ク本從^テ此佛^ニ初發^シ道心^ヲ亦從^テ此佛^ニ任^ス不退地^ニ又云^ク初從^テ此佛^ニ菩薩^ニ結緣^シ還^リ於^テ此佛^ニ菩薩^ニ成就^ス云云。返^ス返^スも本從^テたがへずして成佛^セしめ給^フべし。釋尊は一切衆生の本從^ノ師^ニて而も主親の徳を備へ給^フ。此法門を日蓮申^ス故に忠言耳に逆^カ道理なるが故に流罪せられ命^ノにも及^シしなり。然どもいまだこりず候。法華經は種^ノの如^ク佛はうへての如^ク衆生は田^ノの如^クなり。若此等の義をたがへさせ給はば。日蓮も後生は助申^スまじく候。恐恐謹言。

建治二年丙子八月三日

會谷殿

日蓮花押

○道妙禪門御書

考四四九

御親父祈禱之事承候問佛前にて祈念申^スべく候。於^テ祈禱^ニ者雖^レ有^リ顯祈顯應顯祈冥應冥祈冥應冥祈顯應^ノ祈禱^一。只肝要者此經ノ信心を致し給^フ候はば現當^ノ所願可^ク有^ル滿足^一候。法華第二^ニ云^ク雖^レ有^リ魔及魔民^一皆護^ル佛法^ヲ。第七^ニ云^ク病即消滅^一不老不死^一。金言不可疑^フ之。妙一尼御前當山參詣難^ク有^ル候。卷物一卷進^レ之^ヲ候披見有^ルべく候。南無妙法蓮華經。

建治二年丙子八月十日

道妙禪門

日蓮花押

○四條金吾殿御返事

啓二七〇

鈔一七三六

註一八六

語三〇

拾四一六

扶一〇二

正法をひろむる事は必智人によるべし。故に釋尊は一切經をとかせ給^フて小乘經をば阿難大乘經をば文殊師利。法華經の肝要をば一切の聲聞文殊等^ノ一切の菩薩をさらひて上行菩薩をゆめて授^ケさせ給^フ。設^レ正法を持てる智者ありとも檀那なくんば争か弘^ムるべき。然ば釋迦佛の檀那は梵天帝釋の三人なり。これ二人ながら天の檀那なり。佛は六道の中には人天人天の中には人に出^テさせ給^フ。人には三千世界の中央五天竺五天竺の中には摩竭提國に出^テさせ給^フ候しに。彼國の王を檀那とさだむべき處に彼國の阿闍世王は惡人也。聖人は惡王に生れあふ事第一の怨にて候しがかし。阿闍世王は賢王なりし。父をころす。又うちちるふ(添)わざはひ(災)と提婆達多を師とせり。達多は三逆罪をつくる上佛の御身より血を出^シたりし者がかし。不孝の惡王と謗法の師とよりあひて候しかば人間に二のわざはひにて候しなり。一年二年ならず數十

年が間佛にあだをなしまいらせ佛の御弟子を殺せし事敷をしらす。かゝりしかば天いかりをなして天變しきりなり。地神いかりをなして地天申すに及ばず。月月に悪風年年に飢饉疫癘來りて萬民ほとんどのつきなんとせし上。四方の國より阿闍世王を責む。既に危く成つて候し程に阿闍世王或は夢のつげにより或は耆婆がすゝめにより。或は心にあやしむ事ありて提婆達多をばうち捨て佛の御前にまゐりてやうやう(様々)にたいはう(急報)申せしかば身の病忽にいづ。他方のいくさも留り國土安穩になるのみならず。三月の七日に御崩御なるべかりしが命をのべて四十年也。千人の阿羅漢をあつめて一切經ことには法華經をかきかせ給ふ。今我等がたのむところの法華經は阿闍世王のあたへさせ給ふ御恩也。是はさてをさぬ。佛の阿闍世王にかたらせ給ふし事を日蓮申すならば。日本國の人は今つゞ(作)れる事どもと申さんずらんれども。我が弟子檀那なればかたり(語)たてまつる。佛のたまは言く我滅後末法に入つて又調達がやうなるたうとく五法を行ずる者國土に充滿して惡王をかたらひて。但一人あらん智者を或はのり或はうち或は流罪或は死に及ばさん時。昔にもすぐれてあらん天變地天大風飢饉疫癘年年にありて他國より責せべしと説れて候。守護經と申す

經の第十の卷の心也。當時の世にすこしもたがはず。然に日蓮は此一分にあたり日蓮をたすけん志す人人少少ありといへども或は心ざしうすし。或は心ざしはあつけれども身がうご(合期)せずやうやう(様々)にをはするに。御邊は其一分なり心ざし人にすぐれてをはする上。わづかの身命をさう(支)るも又御故ゆゑなり。天もさだめてしろしめし地もしらせ給ふぬらん。殿いかなる事にもあはせ給ふならばひとへに日蓮がいのちを天のたた(斷)せ給ふなるべし。人の命は山海空市しまぬかれがたき事と定て候へども。又定業亦能轉の經文もあり又天台の御釋にも定業をのぶる釋もあり。前に申せしやうに蒙古國のよするまでつゝしませ給ふなるべし。主の御返事をば申させ給ふべし。身に病ありては叶とがたき上世間すでにかうと見ぬ候。うれがしが身は時によりて憶病はいかんが候はんずらん。只今の心はいかなる事も出來候はば入道殿の御前にして命をすてんと存候。若やの事候ならば越後よりはせ上のほらんははるか(遙)なる上不定なるべし。たとひ所領をめさるなりとも今年はきみをはな(離)れまいらせ候べからず。是より外はいかに仰せ蒙るともをうれまいらせ候べからず。是よりも大事なる事は日蓮の御房の御事と。過去に候父母の事なりとの、

しらせ給へ。すてられまいらせ候ども命はまいらせ候べし。後世は日蓮の御房にまかせまいらせ候と。高聲にうちなのり居させ給へ。

建治二年丙子九月六日

日蓮 花押

四條 金吾殿

○九郎太郎殿御返事

微上三五 考四八

いゑの芋一駄送り給候。こんろん(崑崙)山と申山には玉のみ有つて石なし。石どもし(乏)ければ玉をもて石をかう。はうれいひん(彭蠡)と申浦には本草なしいを(魚)もつて薪をかう。鼻に病ある者はせんたん(梅檀)香用にあらず眼なき者は明なる鏡なにかせん。此身延の澤と申す處は甲斐、國波木井の郷の内の深山也。西には七面のかれと申すたけ(嶽)あり東は天子のたけ南は鷹取のたけ北は身延のたけ。四山の中に深き谷ありはこのふこのことし。峯にははかう(巴峽)の猿の音かまびすし。谷にはたいかい(磔魂)の石多し。然どもするが(駿河)のいも(芋)のやうに候石は(いも)も候はず。いものめづらしき事くらき夜のもも(燈)にもすぎかは(湯)ける時の水にもすぎ候ひき。いかにめづらしからず

とはあるばされて候が。されば其には多候歟あらこひ(戀)しあらこひし。法華經釋迦佛にゆづりまいらせ候ぬ。定て佛は御志をねさめ給うれば御悦候らん。靈山淨土へまひらせ給うたらん時御尋あるべし。恐恐謹言。

建治二年丙子九月十五日

日蓮 花押

九郎太郎殿御返事

○富木殿御返事

鷲目一結莊(ひこひ)嚴シ天台大師ノ御寶前ニ候了。經ニ云ク法華最第一。又云ク有シ能受ニ持是ノ經典ニ者モ亦復如シ是ノ於テ一切衆生ノ中ニ亦爲第一又云ク其福復過シ彼。妙樂云、若惱亂者ハ頭破レ七分ニ有ニ供養ニ者ハ福過シ十號ニ。傳教大師モ讚者ハ積ニ福ヲ於安明ニ謗者ハ開ニ罪ヲ於無間ニ等云云。記ノ十ニ云ク居ル方便ノ極位ニ菩薩猶尙不レ及ニ第五十人ニ等云云。華嚴經ノ法慧 功德林 大日經ノ金剛薩埵等尙不レ及ニ法華經ノ博地ニ何況ニ其宗ノ元祖等於ニ法藏 善無畏等ニ。是且ク置ク之ヲ。尼ぞせん御所勞ノ御事我身一身の上(う)どもひ候へば晝夜に天に申候也。此尼ぞせんは法華經ノ行著をやしなう事燈に油をうへ木の根に土をかさぬ(培)るがごとし。願クは日月天其

命にかわり給へと申候也。又をもいわする事もやといよ(伊豫)房に申つけ候。たのもしとをばしめせ。恐恐。

十一月二十九日

日蓮花押

富木殿御返事

明治三十五年三月三十日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ五丁四十一行ナリ(稻田海素度記)

○松野殿御返事

微上三三 考三四九

鷺目一結白米一駄白小袖一送り給畢。抑此山と申は南は野山漫漫として百餘里に及び。北は身延山高く峙て白根が嶽につづき西には七面と申山峨峨として白雪絶えず。人の住家一宇もなし適問くる物とは梢を傳ふ猿猴なれば少も留る事なく還る急ぐ恨みなる哉。東は富士河漲りて流沙の浪に異ならず。かゝる所なれば訪人も希なるに加様に度度音信せさせ給ふ事不思議の中の不思議也。實相寺の學徒日源は日蓮に歸伏して所領を捨て。弟子檀那に放され御座て我身だにも置處なき由承り候に。日蓮を訪衆僧を哀みさせ給事誠の道心也。聖人也。已に彼人は無雙の學生がかし。然るに名聞名

利を捨てて某が弟子と成りて我身には我不愛身命の修行を致し。佛の御恩を報せんと面面までも教化申し此の如く供養等まで捧げしめ給事不思議也。末世には狗犬の僧尼は恆沙の如しと佛は説せ給て候也。文の意は末世の僧比丘尼は名聞名利に著し上には袈裟衣を著たれば。形は僧比丘尼に似たれども。内心には邪見の劍を提て我出入する檀那の所へ餘の僧尼をよせと無量の讒言を致し。餘の僧尼を寄せずして檀那を惜まん事。譬は犬が前に人の家に至て物を得て食ふが。後に犬の來ルを見ていがみほへ食合が如くなるべしと云心也。是の如きの僧尼は皆皆惡道に墮すべき也。此學徒日源は學生なれば此文をや見させ給けん。殊の外に僧衆を訪ひ顧み給事誠に有難く覺候。御文に云、此經を持チ申て後退轉なく十如是自我偈を讀奉り題目を唱へ申候也。但し聖人の唱へさせ給題目の功德と我等が唱へ申題目の功德と何程の多少候べきやと云云。更に勝劣あるべからず候。其故は愚者の持たる金も智者の持たる金も愚者の然せる火も智者の然せる火も其差別なき也。但し此經の心に背て唱へば其差別有べき也。此經の修行に重重のしなあり。其大概を申せば記ノ五ニ云、明惡ノ數者今文云、說不說耳。有人分テ此云、先列惡因次列惡

果^フ。惡ノ因^ニ十四^一。憍慢^ニ。懈怠^ニ。計我^四。淺識^五。著欲^六。不解^七。不信^八。鬻
盛^九。疑惑^十。誹謗^{十一}。輕善^{十二}。憎善^{十三}。嫉善^{十四}。恨善也。此十四誹謗は
在家出家に互^ニるべし。可^レ恐^ル。可^レ恐^ル。過去の不輕菩薩は一切衆生に佛性あり法
華經を持^テば必成佛すべし。彼を輕^カんじては佛を輕^カんずるになるべし。とて禮拜
の行をば立^テさせ給^ヒし也。法華經を持^テざる者をと^クへ若持^テやせんすらん佛性
ありとてかくの如^ク禮拜し給^フ。何^ニ況や持てる在家出家の者をや。此經の四^ノ卷
には若は在家にてもあれ出家にてもあれ。法華經を持^テ説^ク者を一言にても毀
る事あらば其罪多き事。釋迦佛を一劫の間直^ニに毀り奉る罪には勝^レたりと見
へたり。或は若實若不實とも説れたり。以^テ之^ノ思^ハ之^ノ忘^レても法華經を持^テつ者を
は互に毀るべからざる歟。其故は法華經を持^テつ者は必皆佛也佛を毀^リては罪を
得^ル也。加様に心得て唱る題目の功德は釋尊の御功德と等^シしかるべし。釋^ニ云^ク
阿鼻^ノ依正^ノ全^ク處^ニ極聖^ノ。自身^ニ毘盧^ノ。身土^ノ不^レ逾^ニ。凡^ノ下^ノ一念^ニ云^ク云^ク。十四誹謗の
心は文に任^テて推量あるべし。加様に法門を御尋^キ候事誠に後世を願^ハせ給^フ人
歟。能聽^ク是^ノ法^ヲ者^ハ斯^ノ人亦復難^トとて。此經は正^ニ佛の御使^メ世に出^テすんば佛の
御本意の如^ク説^ク事難^クと上。此經のいはれを問^ヒ尋^テ不審を明^ラめ能信する者難

かるべしと見^テ候。何に賤^キ者なりとも少し我より勝れて智慧ある人には此
經のいはれを問^ヒ尋^テ給^フべし。然るに惡世の衆生は我慢偏執名聞名利に著して。
彼が弟子と成^ルべき歟彼に物を習^ハば人にや賤^ク思はれんすらんと。不斷惡念
に住して惡道に墮^スべしと見^テ候。法師品には人有^リて八十億劫の間無量の
寶を盡して佛を供養し奉らん功德よりも。法華經を説^ン僧を供養して後に須
臾の間も此經の法門を聽聞する事あらば。我^レ大なる利益功德を得^ルべしと悦^ブ
べしと見^テ候。無智の者は此經を説^ク者に使^カれて功德をう^ケべし。何なる鬼畜
なりとも法華經の一偈一句をも説^ン者をば。當^ニ起^テ遠^ク迎^テ當^ニ如^ク敬^レ佛の道理
なれば佛の如^ク互に敬^フべし。例^ニは寶塔品の時の釋迦多寶の如くなるべし。此
三位房は下劣の者なれども少分も法華經の法門を申^ス者なれば佛の如^ク敬^ヒて
法門を御尋^キあるべし。依法不依人此^レを思^フべし。されば昔獨^リの人有^リて雪山
と申^ス山に住^ミ給^キ其名を雪山童子と云^フ。蕨^ヲをわ^ケり菓^ヲを拾^ヒて命をつぎ鹿の皮
を著^キ物とこしらへ肌をかくし閑^ニに道を行^キ給^ヒ。此雪山童子れもはれける
は。情世間を觀^ルするに生死無常の理^ナれば生ずる者は必ず死す。されば憂世の
中のあだはかなき事譬^ハ電光の如^ク朝露の日に向^テて消^スるに似たり。風の前の

燈ともしびの消へやすく芭蕉の葉の破やぶやすきに異ならず。人皆此無常を遁れず終に一度は黄泉よみの旅に趣くべし。然れば冥途の旅を思ふに闇闇としてくらければ日月星宿の光もなく。せめて燈燭ともしびとてともす火だにもなし。かゝる闇くらき道に又ともなふ人もなし。娑婆にある時は親類兄弟妻子眷屬集りて父は慈あはれみの志高く母は悲かなしみの情深く。夫妻は海老同穴の契りとして大海にあるゆびは同おな畜生ながら夫妻ちぎり細かに。一生一處にともなひて離去る事なきが如し。鴛鴦うづまの衾もこの下に枕を並べて遊び戯る中なれども。彼冥途の旅には伴なふ事なし。冥冥として獨り行誰か來りて是非を訪はんや。或は老少不定の境なれば老たるは先立さきだち若きは留る是は順次の道理也。歎なげきの中にもせめて思おもひなぐさむ方も有ぬべし。老たるは留り若きは先立。されば恨の至りて恨めしきは幼こして親に先立さきだち子。歎なげきの至りて歎なげかしきは老て子を先立さきだちる親也。是の如く生死無常老少不定の境あだにはかなき世の中に。但晝夜に今生たけはの時をのみ思ひ朝夕に現世の業わざをのみなして。佛をも敬はず法をも信せず無行無智にして徒らに明し暮して。閻魔の廳庭に引ひ迎へられん時は何を以てか資糧しりやうとして三界の長途を行き。何を以て船筏として生死の曠海を渡りて實報寂光の佛土に至らん哉と

思ひ。迷へば夢覺ゆめざめれは寤うき。しかし夢の愛世を捨てて寤うきの覺さを求めんにはと思惟し。彼山に籠りて觀念の牀の上に妄想顛倒の塵を拂ひ偏に佛法を求め給たま所に。帝釋遙とくに天より見下給たまりて思食しじくさるる様は。魚の子は多けれども魚となるは少すくなく菴羅樹あんらじゆの花は多くさけども菓みになるは少なし。人も又此の如し菩提心を發たす人は多けれども退せずして實の道に入いる者は少し。都て凡夫の菩提心は多く惡縁にたばらかされ事にふれて移りやすき物也。鎧よろいを著つたる兵者つはものは多けれども戰いくさに恐おそれをなさざるは少なきが如し。此人の意こころを行ゆて試あまばやと思て帝釋鬼神の形を現じ童子の側に立た給たまる。其時佛世ほとけにましまさざれば雪山童子普ふく大乘經を求もとむるに聞きくことあたはず。時に諸行無常是生滅法と云いふ音ねはのかに聞きゆ。童子驚おどき四方を見給たまるに人もなし但鬼神おに近付ちかづて立たたり。其形けはしくをるろしくして頭のかみは炎の如く口の齒は劍の如く。目を瞋いららして雪山童子をまほり奉る。此を見るにも恐れず偏に佛法を聞き事ことを喜び怪しむ事なし。譬たとば母を離わかれたるこうしは母の音こゑを聞きつるが如し。此事誰か誦よするがういまだ殘のこりの語ことばあらんとて普ふく尋たずねるに更に人もなければ。若も此語は鬼神の說ことつる歎なげと疑へどもよもさあらしと思ひ。彼身は罪報の鬼神の形也

此偈は佛の説給へる語也。かゝる賤き鬼神の口より出づべからずとは思へども。亦殊に人もなければ若此語汝が説つるかど問へば。鬼神答云。我に物な云う食せずして日數を経ぬれば飢へ疲れて正念を覺ゆ。既にあだごと云つるならん。我うつけ(不實)る意にて云へば知事もあらじと答ふ。童子の云。我は此半偈を聞きつる事半なる月を見るが如く半なる玉を得るに似たり。髓に汝が語也願は殘る偈を説給へとのたまふ。鬼神の云。汝は本より悟あれば聞かずとも恨は有べからず。吾は今飢に責られたれば物を云ふべき力なし都て我に向て物な云と云。童子猶物を食ては説かんやと問。鬼神答て食ては説てんと云。童子悦してさて何物をか食とするかと問へば。鬼神の云。汝更に問へべからず此を聞きては必恐を成さん。亦汝が求むべき物にもあらずと云へば。童子猶責て問給はく其物をとだにも云はば心みにも求んどの給へば。鬼神の云。我は但人の和らかなる肉を食し人のあたかなる血を飲む。空を飛ぶ普く求めども人をば各守り給佛神ましますば心に任せて殺しがたし。佛神の捨給衆生を殺して食する也と云。其時雪山童子の思給はく我法の爲に身を捨て此偈を聞き畢らんと思て。汝が食物こゝに有り外に求むべきにあらず。我身いま

だ死せず其肉あたかなる我身いまだ寒す其血あたかならん。願は殘の偈を説給へ此身を汝に與へんと云。時に鬼神大に嗔て云。誰か汝が語を實とは憑むべき。聞て後には誰をか證人として糾さんと云。雪山童子の云。此身は終に死すべし徒に死せん命を法の爲に投げばきたなくけがらはしき身を捨てて後生は必覺りを開き佛となり清妙なる身を受べし。土器を捨てて寶器に替るが如くなるべし。梵天帝釋四大天王十方の諸佛菩薩を皆證人とせん我更に僞るべからずとの給へり。其時鬼神少し和で若汝が云。處實ならば偈を説んと云。其時雪山童子大に悦んで身に著たる鹿の皮を脱で法座に敷頭を地に付掌を合せ跪き。但願は我爲に殘の偈を説給へと云。至心に深く敬給ふ。さて法座に登り鬼神偈を説て云。生滅滅已寂滅爲樂。此時雪山童子是を聞き悦び貴み給。事限なく後世までも忘れじと度度誦して深く其心にりめ。悦敷處はこれ佛の説給へるにも異ならず。歎敷處は我一人のみ聞きて人の爲に傳へざらん事をと深く思て石の上壁の面路の邊の諸木ごとに此偈を書き付。願は後に來らん人必此文を見其義理をさとり實の道に入れと云。畢つて。即高き木に登りて鬼神の前に落給へり。いまだ地に至らざるに鬼神俄に帝釋の形と成りて雪山童

子の其身を受取て。平かなる所にすね奉りて恭敬禮拜して云々我暫く如來の聖教を惜みて試に菩薩ノ心を惱し奉る也。願は此罪を許して後世には必救ひ給へと云フ。一切の天人又來りて善哉善哉實に是菩薩也と讚給ふ。半偈の爲に身を投て十二劫生死の罪を滅し給へり。此事涅槃經に見たり。然れば雪山童子の古を思へば半偈の爲に猶命を捨給ふ。何に況や此經の一品一卷を聽聞せん恩徳をや何を以てか此を報せん。尤も後世を願はんには彼雪山童子の如くこりあらまほしくは候へ。誠に我身貧にして布施すべき寶なくば我身命を捨て。佛法を得べき便あらば身命を捨てて佛法を學すべし。とても此身は徒に山野の土と成べし惜みても何かせん惜むとも惜みどくべからず。人久しといねども百年には過す其間の事は但一睡の夢がかし。受がたき人身を得て適出家せる者も。佛法を學し謗法の者を責すして徒らに遊戯雜談のみして明し暮さん者は法師の皮を著たる畜生也。法師の名を借りて世を渡り身を養つといへども法師となる義は一もなし法師と云フ名字をぬすめる盗人也。恥つべし恐るべし。迹門には我不愛身命。但惜無上道。ととき本門には不三自惜身命。ととき涅槃經には身輕法重。死身弘法。と見たり。本迹兩門涅槃經共に身命を捨て法を弘むべしと見たり。此等の禁を背く重罪は目には見ぬざれども積りて地獄に墮る事。譬は寒熱の姿形もなく眼には見ぬざれども。冬は寒來りて草木人畜をせめ夏は熱來りて人畜を熱惱せしむるが如くなるべし。然るに在家の御身は但餘念なく南無妙法蓮華經と御唱へありて僧をも供養し給フが肝心にて候也。りれも經文の如くならば隨力演説も有べき歎。世の中ものう(愛)からん時も今生の苦さへかなしし。況や來世の苦をやと思食ても南無妙法蓮華經と唱へ。悦ばしからん時も今生の悦は夢の中の夢。靈山淨土の悦はこゝ實の悦はなれと思食合せて又南無妙法蓮華經と唱へ。退轉なく修行して最後臨終の時を待つて御覽せよ。妙覺の山に走り登りて四方をきつと見るならば。あら面白や法界寂光土にして瑠璃を以て地とし金の繩を以て八の道を界へり。天より四種の花ふり虚空に音樂聞わて。諸佛菩薩は常樂我淨の風にうよめき娛樂快樂し給フや。我等も其數に列りて遊戯し樂むべき事はや近づけり。信心弱くしてはかゝる目出たき所に行ッべからず行ッべからず。不審の事をば尙尙承はるべく候。穴賢穴賢。

命を捨て法を弘むべしと見たり。此等の禁を背く重罪は目には見ぬざれども積りて地獄に墮る事。譬は寒熱の姿形もなく眼には見ぬざれども。冬は寒來りて草木人畜をせめ夏は熱來りて人畜を熱惱せしむるが如くなるべし。然るに在家の御身は但餘念なく南無妙法蓮華經と御唱へありて僧をも供養し給フが肝心にて候也。りれも經文の如くならば隨力演説も有べき歎。世の中ものう(愛)からん時も今生の苦さへかなしし。況や來世の苦をやと思食ても南無妙法蓮華經と唱へ。悦ばしからん時も今生の悦は夢の中の夢。靈山淨土の悦はこゝ實の悦はなれと思食合せて又南無妙法蓮華經と唱へ。退轉なく修行して最後臨終の時を待つて御覽せよ。妙覺の山に走り登りて四方をきつと見るならば。あら面白や法界寂光土にして瑠璃を以て地とし金の繩を以て八の道を界へり。天より四種の花ふり虚空に音樂聞わて。諸佛菩薩は常樂我淨の風にうよめき娛樂快樂し給フや。我等も其數に列りて遊戯し樂むべき事はや近づけり。信心弱くしてはかゝる目出たき所に行ッべからず行ッべからず。不審の事をば尙尙承はるべく候。穴賢穴賢。

建治二年丙子十二月九日

日 蓮花押

松野殿御返事

○道場神守護事 啓三三七 鈔二〇四一 語四二六 拾六四五 扶一二三八
 稽目五貫文慥送^レ給^レ候畢^ス。且^ツ如^ク知食^ニ此所^ハ離^ニ里中^ニ深山也。衣食乏少之間
 讀經之聲難^ク續^キ談義^ノ勤^メ可^レ廢^ル。此託宣^ハ十羅刹^ノ御計^ニ令^レ致^シ檀那^ノ功^ヲ歟。止觀^ノ
 第八^ニ云^ク如^シ帝釋堂^ノ小鬼^敬避^ル道場^ノ神大無^シ妄^ニ侵^ス。又城^ノ主剛守^ル者^モ強^シ
 城^ノ主恒守^ル者^モ忙^ル心^ハ是身^ノ主同名^{同生}天是能守^ニ護^ス人^ノ心固^則強^シ身^ノ神尙^尙
 泥^{道場}神耶。弘決^ノ第八^ニ云^ク雖^ニ常^ニ護^ル人^ノ必假^ニ心^ノ固^ニ神^ノ守^リ則強^シ又云^ク身^ノ
 兩肩^ノ神尙^常護^ル人^ノ泥^{道場}神云云。人自^リ所生^ノ時^ニ二神守護^ス所謂^ニ同生天同
 名^天是云^ク俱生神^ニ華嚴經^ノ文也。文句^ノ四^ニ云^ク賊稱^ニ南無佛^ト尙得^ニ天頭^ヲ泥^{賢者}
 稱^十方^ノ尊神^不敢^テ當^ラ但精進^勿懈^怠等云云。釋^ノ意^ハ月氏崇^テ天^ヲ不^レ用^レ佛^ヲ
 國^而造^リ寺^ヲ主^ニ第六^天魔王^ヲ頭^ハ以^テ金^ヲ。大賊^年來盜^レ之^不得^有時^詣佛^前盜^レ
 物^ヲ聽^ク法^ヲ佛說^テ云^ク南無驚覺^之義也。盜人^聞レテ稱^ニ南無佛^ト得^ニ天頭^ヲ糾^ニ明^之
 處盜人^如上^申之^一國皆捨^テ天^ヲ歸^レ佛^ニ云云。以^レ彼^ヲ推^レ之^設有^ル科者^モ信^ニ三
 寶^ヲ脫^ニ大難^ヲ歟。而今^示給^レ託宣^之狀^ハ兼^テ知^ル之^案之^ヲ卻^レ難^ヲ福^ノ來^ル先兆^耳。妙

法蓮華經之妙ノ一字ハ龍樹菩薩ノ大論ニ釋^シ云^ク能變^レ毒^ヲ爲^レ藥^ト云云。天台大師ノ云^ク
 今經^ニ得^レ記^ヲ即是變^レ毒^ヲ爲^レ藥^ト云云。災來^變爲^レ幸^ト何^ニ況^ヤ十羅刹兼^レ之^歟。
 薪熾^ニ於火^ヲ風益^ニ求羅^ヲ是也。言^ハ紙上^ニ難^シ盡^シ以^レ心^ヲ量^レ之^ヲ恐恐謹言^ス。
 十二月十三日

御返事

日蓮花押

明治三十五年四月三日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ五丁四十八行ナ
 リ(稻田海素虔記)

○本尊供養御書 啓三〇六七 鈔一九五 語三五六 拾五五二 扶一一五
 法華經御本尊御供養の御僧膳料ノ米一駄^蹲鴨一駄^送給^レ候畢^ス。法華經の文字は
 六萬九千三百八十四字一一の文字は我等が目には黒き文字と見^レ候^ヘ也。佛^ノ
 佛の御眼には一一に皆御佛也。譬^ハ金粟王^ト申^セし國王は沙^を金^{とな}し釋摩
 男^ト申^セし人は石^を珠^と成^シ給^フ。玉泉^に入^リぬる木は瑠璃^と成^ル大海^に入^リ
 ぬる水は皆鹹^シ。須彌山^に近^{づく}鳥は金色^{となる}也。阿伽陀藥^は毒^を藥^{とな}す
 法華經の不思議^モ又如^シ是^ノ凡夫^を佛^に成^シ給^フ。燕^は鶉^{となり}山の芋^はうなぎ

(變)となる世間の不思議以テ如シ是ノ何況ヤ法華經の御力をや。犀の角を身に帶すれば大海に入るに水身を去る事五尺。梅檀と申香を身にぬれば大火に入るに焼る事無し。法華經を持テまいらせぬれば八寒地獄の水にもぬれず八熱地獄の大火にも焼けず。法華經第七云ク火モ不能燒水モ不能漂等云云。事多しと申せども年せま(迫)り御使急ぎ候へば筆を留候畢。

建治二年丙子十二月日

日 蓮花押

南條平七郎殿御返事

○大井莊司入道御書 微上六 考二〇

柿三本酢一桶くぐたち(菜)土筆給候畢。唐土に天台山と云山に龍門と申して百丈の瀧あり。此瀧の麓に春の初より登らんとして多ク魚集れり。千萬にも登ることを得れば龍となる。魚龍と成らんと願フこと民の昇殿を望むが如く貧なるもの財を求るが如し。佛に成ることも亦如此。彼瀧は百丈早事合張の天より箭を射徹すより早し。此瀧へ魚登らんとすれば人集りて羅網をかけ釣をたれ弓を以て射る左右の邊に間なし。空には鵬鷲鴟鳥夜は虎狼狐

狸何にとなく集りて食ひ噬む。佛になるをも是を以て知りぬべし。有情輪廻生死六道と申して我等が天竺に於て師子と生れ漢土日本に於て虎狼野干と生れ。天には鵬鷲地には鹿蛇と生れしこと數をしらず。或は鷹の前の雉猫の前の鼠と生れ。生ながら頭をつゝ(啄)しゝ(肉)をかまれ(咬)しこと數をしらず。一劫が間の身骨は須彌山よりも高く大地よりも厚かるべし。惜き身なれども云々に甲斐なく奪はれてころ候けれ。然ば今度爲ニ法華經ニ身を捨て命をも奪はれ奉れば。無量無數劫の間の思ひ出なるべしと思ひ切り給べし。穴賢穴賢又又可申。恐恐謹言。

建治二年丙子

日 蓮花押

大井莊司入道殿

○松野殿御消息 微上三三 考四一

昔乃往過去の古へ珊瑚提嵐國と申國あり彼國に大王あり無諍念王と申。彼王に千の王子あり又彼王の第一の大臣を寶海梵志と申。彼梵志に子あり法藏と申。彼無諍念王の千の太子は捨穢土取淨土給ふ。其故は此娑婆世界は

松野殿御消息 (遺二二ノ二三)

千五百三十五 (外九ノ五)

何なる所と申せば。十方の國土ニ殺シ父母ヲ誹シ謗シ正法ヲ殺シ聖人ヲ者自リ彼國國ニ此娑婆世界へ追ヒ入レられて候。例せば如此日本國ノ人有リ大科ニ者リ被ヒ入レ獄ニ不レ叶ハ我力ニ不レ哀愍セ捨テ給ふ。寶海梵志一人請テ取リて娑婆世界の人の師と成リ給ふ。寶海梵志ノ願ニ云ク我於テ未來世ノ穢惡土ノ中ニ當ニ得ニ作佛ニ即集テ十方淨土擯出衆生ヲ我當ニ度ス之ヲと誓ヒ給ヒき。無諍念王と申スは阿彌陀佛也。其千の太子は今の觀音勢至普賢文殊等也。其寶海梵志と申スは今の釋迦如來也。此娑婆世界は一切衆生は十方の諸佛に拔キ捨テられしを。釋迦一人計リして扶けさせ給フを唯我一人と申ス也。

松野殿

蓮花押

○兵衛志殿女房御書 微上ニ七 考四二四

先度佛器まいらせさせ給ヒ候しが。此度此尼御前大事の御馬にのせさせ給ヒて候由承候。法にすぎて候御志かな。これは殿はざる事にて女房のはからひか。昔儒童菩薩と申せし菩薩は五莖の蓮華を五百の金錢を以てかいとり定光菩薩

を七日七夜供養し給ヒき。女人あり瞿夷となづく二莖の蓮華を以て自ら供養して云く。凡夫にてあらん時は世生生夫婦とならん佛にならん時は同時に佛になるべし。此ちかひ(誓)くちすして九十一劫の間夫婦となる。結句儒童菩薩は今の釋迦佛 昔の瞿夷は今ノ耶輸多羅女。今法華經の勸持品にして具足千萬光相如來是也。悉達太子檀特山に入り給しには金泥駒 帝釋の化身。摩騰迦竺法蘭の經を漢土に渡せしには十羅刹化して白馬となり給ふ。此馬も法華經の道なれば百二十年御さかへの後靈山淨土へ乘リ給ヒき御馬なり。恐恐謹言。

建治三年丁丑三月二日

日 蓮花押

兵衛志殿女房

○六郎次郎殿御返事 考四二四

白米三斗油一箱給ヒ畢。いまにはじめぬ御心ぞし申つくしがたかく候。日蓮が悦候のみならず釋迦佛定めて御悦候らん。我則歡喜諸佛亦然は是也。明日三位房をつかはすべく候。その時委細可申候。恐恐。

建治三年丁丑三月十九日

日 蓮花押

六郎次郎殿
次郎兵衛殿

○四信五品鈔 啓二七一 鈔一六三七 註一七一 語三三三 拾四二二 扶一〇二

未代法華行者位並用心書也

此十二字者
常師自記之一

青鳧一結送^レ給^レ候畢。近來ノ學者一同、御存知ニ云ク、在世滅後雖^レ異修ニ行^{スル}法華ヲ
必具^ス三學ヲ缺^レ一ヲ不成^セ云云。予又年來存^{スル}此義ヲ處一代聖教ハ且置^ク之ヲ。入^テ法
華經ニ見聞^ス此義ヲ序正^シ二段ハ且置^ク之ヲ流通^ス一段末法ノ明鏡尤モ可^シ爲^ス依用^ト。而
於^テ流通^ニ有^リ二。一所謂迹門之中、法師等ノ五品。二所謂本門之中、自^リ分別功
德ノ半品ニ終^{マテ}于經ヲ十一品半。此十一品半、與^ニ五品ニ合^{セテ}十六品半。此中ニ入^テ末法ニ
修^ス行法華ヲ相貌分明也。是尙事不^レ行^カ引^キ來^リ普賢經涅槃經等ヲ糾^メ明^シ之ヲ無^キ其
隱^レ歟。其中、分別功德品、四信、與^ニ五品ニ修^ス行法華ヲ之大要在世滅後之龜鏡
也。荆谿ノ云ク、一念信解者、即是本門立行之初云云。其中、現在ノ四信之初、一念信
解、與^ニ滅後ノ五品、第一、初隨喜^ニ此二處、一同^ニ百界千如一念三千、寶篋^ノ十方三

世ノ諸佛ノ出門也。天台妙樂ノ二、聖賢定^ニ此二處ノ位ヲ有^ス三、釋^ノ所謂或ハ相似十信
鐵輪ノ位、或ハ觀行ノ五品、初品ノ位、未斷見思、或ハ名字即ノ位也。止觀ニ會^シ其不定ヲ
云ク、佛意難^シ知^リ赴^キ機ニ異說^ス借^テ此開解何^ノ勞苦^ニ諍^フ云云等。予カ意^ニ云ク、三釋之中
名字即^ハ者叶^フ經文ニ歟。滅後ノ五品ノ初、一品ヲ說^テ云ク、而^モ不^レ毀訾^ス起^ス隨喜^ノ心ヲ若
此文渡^ニ相似^シ、五品ニ而不毀訾^ノ言ハ不^レ便歟。就^中壽量品ノ失心不失心等、皆名
字即也。涅槃經ニ若信若不信乃至照連^ト勸^メ之ヲ。又一念信解ノ四字之中、信ノ一
字ハ四信ノ居^ニ初解ノ一字ハ被^レ覆^ハ後^ニ故也。若爾者無解有信ハ當^ル四信ノ初位ニ。
經ニ說^テ第二信ヲ云ク、略解言趣^ト云云。記ノ九ニ云ク、唯除^ク初信ヲ無^カ解故^ニ隨^テ次^キ下^ニ
至^テ隨喜品ニ上^リ、初隨喜ヲ重^テ分^シ明^シ之ヲ五十人は皆展轉劣也。至^テ第五十人有^リ二
釋^ニ一謂^ク第五十人ハ初隨喜ノ内也二謂^ク第五十人ハ初隨喜ノ外也。云^フ者名字即也。
教彌實位彌下云^フ釋^ハ此意也。自^リ四味三教ニ攝^シ機ヲ自^リ爾前ノ圓教ニ法華經ハ
攝^シ機ヲ自^リ迹門ニ本門ハ盡^ス機ヲ也。教彌實位彌下ノ六字ニ留^メ心ヲ可^シ案^ス。問^フ入^テ末
法ニ初心ノ行者必具^ス三圓^ヲ、三學ヲ不^ヤ。答^テ曰ク、此義爲^ニ大事^ノ故^ニ勘^ハ出^シ經文ヲ送^テ付^ス貴
邊^ニ。所謂五品之初、二三品佛正制^ニ止^シ戒定^ノ二法ヲ一向^ニ限^ル慧^ノ一分^ニ慧又^ハ不堪^ニ
以^テ信^ヲ代^テ慧^ニ信ノ一字ヲ爲^シ詮^ト。不信ハ一闡提謗法ノ因、信ハ慧ノ因、名字即ノ位也。天

台云若相似益隔生不忘名字觀行益隔生即忘。或有不忘忘者若
 值知識宿善還生若值惡友則失本心云云。恐中古天台宗慈覺智證兩
 大師違背天台傳教善知識心遷無畏不空等惡友。末代學者被誑惑
 心往生要集序失法華本心入彌陀權門退大取小者。以過去推之
 未來經無數劫處三惡道若值惡友即失本心是也。問曰其證如何。答
 曰止觀第六云前教所以高其位者方便之說。圓教位下真實之說。弘決
 云前教下正判權實教彌實位彌下。教彌權位彌高。故又記九云判位
 者顯觀境彌深實位彌下云云。他宗且置之。天台一門學者等何閣實
 位彌下釋慧心僧都用筆。畏智空與覺證一事追習之。大事也大事也
 一閣浮提第一大事也。有中心人聞後外我。問云末代初心行者制止何
 物乎。答曰制止檀戒等五度一向。命稱南無妙法蓮華經為一念信解初
 隨喜之氣分也。是則此經本意也。疑云此義未見聞驚心迷耳。明引證
 文請示之。答曰經云不須為我復起塔寺及作僧坊以四事
 供養衆僧。此經文明初心行者制止檀戒等五度一文也。疑云汝所引經
 文但制止寺塔與衆僧計未及諸戒等。歟。答曰舉初略後。問曰

何ヲ以チ知レ之ヲ。答曰次下第四品經文云况復有能持是經兼行
 布施持戒等云云。經文分明初三品人制止檀戒等五度。至于第四品
 始許之。以以後許知初制。問曰經文往相似將。又有疏釋。答曰汝
 所尋釋者月氏四依論歟。將又漢土日本入師書歟。捨本尋末離體求
 影忘源貴流閣。分明經文請尋論釋。相違本經有末釋。可捨本經
 付中末釋。歟。雖然隨好示之。文句九云初心畏緣所紛動妨修。正
 業上直專持此經。即上供養廢事存理。所益弘多。此釋云緣者五度也。初
 心者兼行五度。妨正業信也。譬如小船積財渡海。與財俱沒云云。
 直專持此經者非互一經。專持題目不雜餘文。尚不許一經讀誦。何
 況五度云廢事存理者捨戒等事。專持題目理云云。所益弘多者初心者
 諸行與題目並行。所益全失云云。文句云問若爾持經。即是第一義戒
 何故復言能持戒者。答此明初品不應以後作難等云云。當世
 學者不見此釋。以末代愚人同南岳天台二聖。誤中誤也。妙樂重明
 之云。問若爾者若不須事塔及色身骨亦應不須持事。戒乃至不須
 供養事。僧耶等云云。傳教大師云二百五十戒。忽捨。唯非限教大師

一人ニ鑒眞ノ弟子如寶道忠並七大寺等一同ニ捨テ畢。又教大師誠テ未來ヲ云ク末法、中ニ有ニ持戒ノ者一是レ怪異之如シ市ニ有レカ虎此レ誰カ可レ信ス云云。問フ汝何ソ不レ勸ニ進、一念三千ノ觀門ヲ唯令レ唱レ題目許。答テ曰ク日本ノ二字ニ攝ニ盡六十六國之人畜財、一不レ殘、月氏ノ兩字ニ豈無ニ七十箇國ノ妙樂ノ云ク略ソ舉ニ經題ヲ立ニ收ム一部ヲ。又云、略ソ舉ニ界如ヲ攝ニ三千ヲ。文殊師利菩薩阿難尊者三會八年之間、佛語舉レテ之ヲ題シ妙法蓮華經ト次キ下ニ領解云ク如是我聞ト云云。問フ不レ知シ其義ヲ人唯唱ヲ南無妙法蓮華經ト具ニ解義ノ功德ヲ不ヤ。答フ小兒含レ乳ヲ不レ知シ其味ヲ自然ニ益シ身ヲ者婆、妙藥誰カ辨レ服レ之ヲ。水無レ心消シ火ヲ火燒レ物ヲ豈ニ有レ覺龍樹天台皆此意也。重可レ示ス。問フ何故ノ題目ニ含ニ萬法ヲ。答フ章安ノ云ク蓋序王者敘ニ經ノ立意ヲ立意ハ述ニ於文心ニ文心ハ莫レ過ニ迹ト云ク妙樂ノ云ク出ニ法華ノ文心ヲ辨ニ諸教ノ所以ヲ云云。濁水無レ心得レ月自清草木得レ雨豈ニ有レ覺花。妙法蓮華經ノ五字ハ非ニ經文ニ非ニ其義ニ唯一部ノ意耳。初心ノ行者不レ知シ其心ヲ而レ行レ之ヲ自然ニ當レ意ニ也。問フ汝ノ弟子無ニ一分ノ解ニ但一口ニ稱ニ南無妙法蓮華經ト其位如何。答フ此人ハ但非レ超ニ過ニ四味三教ノ極位並爾前圓人ニ將タ又勝ニ出眞言等ノ諸宗ノ元祖畏嚴恩藏宣摩導等ニ百千萬億倍也。請フ國中ノ諸人勿レ輕ニ我末弟等ヲ。進テ尋ニ過去ヲ八十萬億劫供

養大菩薩也。豈ニ非ニ熙連一恆ノ者ニ。退テ論ニ未來ヲ超ニ過八十年ノ布施ニ可レ備フ五、十ノ功德ヲ。天子ノ纏ニ襦袢大龍ノ始テ生カカトシ勿レ蔑如。勿レ蔑如。妙樂ノ云ク若惱亂者、頭破ニ七分ニ有ニ供養ノ者ハ福過ニ十號ニ。優陀延王ハ蔑ニ如シ寶豆盧尊者ヲ七年之内ニ喪ニ失シ身ヲ。日州ハ流ニ罪日蓮ニ百日ノ内ニ遇ニ兵亂ニ。經ニ云ク若復見テ受ニ持是ノ經典ヲ者上出ニ其過惡ヲ若ハ實者ハ不實。此人現世ニ得ニ白癩病ヲ乃至諸惡重病。又云ク當ニ世世ニ無レ眼等云云。明心ト與ハ圓智ト現ニ得ニ白癩一道阿彌ハ成ニ無眼ノ者ト。國中ノ疫病ハ頭破七分也以レ罰ヲ推レ德ヲ我門人等ハ福過十號無レ疑ヒ者也。夫人王三十年代欽明ノ御宇ニ始佛法渡以來至ニ于桓武ノ御宇ニ。二十代二百餘年之間雖レ有ニ六宗ニ佛法未定ヲ。爰ニ延曆年中ニ有ニ一聖人一出ニ現此國ニ所謂傳教大師是也。此人自レ先キ弘通糾ニ明シ六宗ヲ爲ニ七寺ヲ弟子ト終ニ建ニ叡山ヲ爲ニ本寺ト取テ諸寺ヲ爲ニ末寺ト。日本ノ佛法唯一門王法モ非ニ一法定リ國清。論ニ其功一源。出ニ已今當ノ文。其後弘法慈覺智證ノ三大師密事ヲ於漢土ニ謂ニ大日ノ三部ハ勝ニ法華經。剩教大師ノ所レ削眞言宗ノ宗ノ一字副レ之ヲ八宗ト云云。三人一同ニ申シ下勅宣ニ弘通シ日本ニ每レ寺破ニ法華經ノ義ヲ。是偏ニ爲レ破ニ已今當ノ文ヲ成ニ釋迦多寶十方ノ諸佛ノ大怨敵ト矣。然後佛法漸ク廢王法次第ニ衰。天照太神正八幡等ノ久住ノ守護神ハ失レ力ヲ。梵帝四天ハ去

國^ヲ已^ニ爲^シ成^リ亡^ニ國^ニ有^ル情^人誰^カ不^レ傷^差哉。所詮三大師之邪法ノ所以興^ル所謂
東寺、叡山ノ總持院、與^ニ園城寺三所。不^レ禁止^セ國土ノ滅亡、與^ニ衆生、惡道、無^キ
疑^ト者歟。予粗^ク勘^テ此旨^ヲ雖^シ示^ス國主^ニ敢^テ無^シ叙用^ノ可^レ悲^ム可^レ悲^ム。

明治三十五年三月二十六日正中山ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ十三丁百八十二行ニ
シテ卷ノ初ニ常師ノ御筆ニテ判建治三、四、十及末代法華等ノ細注ノ別紙アリ(稻田海素慶記)

○四條金吾殿御返事 微下ニ考五二

はるかに申^テ承^テ候はざりつればいふせく候つるにかたがたの物と申^テ御つか
いと申^テよろこび入^ッて候。又まほりまいらせ候。所領の間の御事は上^カよりの御
文ならびに御消息引^キ合^セて見候畢。此事は御文なきさきにすい(推)して候。
上には最大事とをばしめされて候へども。御きんず(近習)の人人のざんろう
(譏笑)にてあまりに所領をさらう上をかるしめたてまつり候。おうあう(縦横)
の人^んこ^うを^レく候に。かくまで候へば且^ク御恩をばねさへさせ給^フべくや候
らんと申すらんとすい(推)して候なり。うれにつけては御心^んあるべし御用
意あるべし。我身と申^テを^レや(親)るい(類親)しんと申^テ。かたがた御内に不便^ん
いはれまいらせて候大恩の主なる上。すぎにし日蓮が御かんの時。日本一

同にくむ事なれば弟子等も或は所領をを^レかたよりめされしかば。又方方
の大人も或は御内内をいだし或は所領をわい(進)なんぞせしに。其御内になに
事もなかりしは御身にはゆゆしき大恩と見へ候。このうへはたとひ一分の御
恩なくともうらみまいらせ給^フべき主にはあらず。うれにかさねたる御恩を
申^テ所領をさらはせ給^フ事御どかにあらずや。賢人は八風と申^テて八^つのかせにを
かさねぬを賢人と申^テなり。利^{うらみの}衰^{をころひ}毀^{やぶれ}譽^{ほまれ}稱^{なへ}譏^{うしろ}苦^{くるしみ}樂^{たのしみ}也。を^レ心は
利あるによるこはすをとるうるになげかず等の事也。此八風にをかされぬ人
をば必天はまほらせ給^フ也。しかるをひり(非理)に主をうらみなんぞし候へば。
いかに申せども天まほり給^フ事なし。訴訟を申^テと叶^ヒぬべき事もあり。申^テぬ
に叶^ヒぬを申^テば叶^ヒぬ事も候。夜めぐりの殿原の訴訟は申^テすは叶^ヒぬべき
よしをかながへて候しにあながちになげかれし上。日蓮がゆへにめされて候
へばいかでか不便に候はざるべき。ただし訴訟だにも申^テ給はずばいのりて
み候はんと申せしかば。さうけ給^フ候ぬと約束ありて。又をりかみ(折紙)をし
きりにかき人人訴訟るんなんぞありと申せし時に。此訴訟よも叶^ヒじとをも
ひ候しがいま(今)までのびて候。たいかくどの(大學殿)もものたいうどの(右

備門大夫殿の事どもは申すまゝにて候あいだ。いのり叶たるやうにみゐて候。はさりどの(波木井殿)の事は法門は御信用あるやうに候へども此の訴訟は申すまゝには御用となりしかば。いかんがと存して候しほどもに。さりとてはと申て候しゆへにや候けんすこしするし候か。これにをもうほどもなかりしゆへに又をもうほどもなし。だんな(檀那)と師とをもひあわぬいのりは水の上に火をたく(焚)がごとし。又だんなと師とをもひあひて候へども。大法を小法をもつてをか(犯)してとしひさし(年久)き人人の御いのりは叶候はぬ上。我身もだんなもほろび候也。天台の座主明雲と申せし人は第五十代の座主也。去安元二年五月に院勘をかほりて伊豆國へ配流。山僧大津よりうばいかへす。しかれども又かへりて座主となりぬ。又すぎにし壽永二年十一月に義仲にからめとられし上頸うちきられぬ。是はながされ頸さらるるをどが(失)とは申さず。賢人聖人もかゝる事候。但し源氏、頼朝と平家、清盛との合戦の起し時。清盛が一類二十餘人起請をかき連判をして願を立てて平家の氏寺と叡山をたのむべし。三千人は父母のごとし。山のなげきは我等がなげき山の悦は我等がよるこびと申して。近江、國二十四郡を一向によせて候しかば。大衆と座主と一

同に内には眞言の大法をつくし。外には悪僧どもをもて源氏をい(射)させしかども。義仲が郎等ひぐち(樋口)と申せしをのこ(男)義仲とただ五六人計り。叡山中堂にはせのぼり調伏の壇の上にあしを引出してなわ(繩)をつけ西ぎか(坂)を大石をまるば(轉)すやうに引下(ろ)して頸をうち切りたりき。かゝる事あれども日本の人人眞言をうとむ事なし又たづぬる事もなし。去承久三年辛巳五六七八の三箇月が間京夷の合戦ありき。時に日本國第一の秘法どもをつくして。叡山東寺 七大寺 園城寺等 天照太神 正八幡 山王等に一一に御いのりありき。其中に日本第一の僧四十一人也。所謂前の座主慈圓大僧正 東寺御室三井寺の常住院の僧正等は度々義時を調伏ありし上。御室は紫宸殿にして六月八日より御調伏ありしに。七日と申せしに同十四日にいくさにまけ勢多迦が頸さられ。御室をもひ死に死しぬ。かゝる事候へども眞言はいかなるどがともあやしむる人候はず。をよる眞言の大法をつくす事明雲第一度慈圓第二度に日本國の王法ほろび候畢。今度第三度になり候。當時の蒙古調伏此なり。かゝる事も候が此は秘事なり人にはあはして心に存知せさせ給へ。されば此事御訴訟なくて又うらむる事なく。御内をばいでず我かまくら(鎌倉)

にうち(打居)てささぎささよりも出仕とをき(遊)やうにて。とささぎさししで
てればするならば叶(叶)事も候なん。あながちにわるびれてみへさせ給(給)べから
ず。よく(慈)と名聞(名聞)どの。

○乘明聖人御返事

啓三六三五

鈔二五五三

語五三〇

拾八三三

扶二五二八

自(自)相州(相州)鎌倉(鎌倉)青島(青島)二結送(結送)遣(遣)甲州(甲州)身延(身延)嶺(嶺)候(候)畢(畢)。昔(昔)金珠(金珠)女(女)金錢(金錢)一文(一文)爲(爲)木
像(像)薄(薄)九十一(九十一)劫(劫)爲(爲)金色(金色)身(身)。其夫(其夫)金師(金師)今(今)迦葉(迦葉)未(未)來(來)光(光)明(明)如(如)來(來)是(是)也(也)。今(今)乘
明(明)法師(法師)妙(妙)日(日)並(並)妻(妻)女(女)銅(銅)錢(錢)二(二)千(千)枚(枚)供(供)養(養)法(法)華(華)經(經)。彼(彼)佛(佛)也(也)此(此)經(經)也(也)經(經)師(師)也(也)佛(佛)弟
子(子)也(也)。涅槃(涅槃)經(經)云(云)諸(諸)佛(佛)所(所)以(以)師(師)所(所)謂(謂)法(法)也(也)乃(乃)至(至)是(是)故(故)諸(諸)佛(佛)恭(恭)敬(敬)供(供)養(養)法(法)華
經(經)第(第)七(七)云(云)若(若)復(復)有(有)人(人)以(以)七(七)寶(寶)滿(滿)三(三)千(千)大(大)千(千)世(世)界(界)供(供)養(養)於(於)佛(佛)及(及)大(大)菩(菩)薩(薩)辟(辟)支
佛(佛)阿(阿)羅(羅)漢(漢)是(是)人(人)所(所)得(得)功(功)德(德)不(不)如(如)受(受)持(持)此(此)法(法)華(華)經(經)乃(乃)至(至)一(一)四(四)句(句)偈(偈)其(其)福(福)最
多(多)。夫(夫)供(供)養(養)劣(劣)佛(佛)尚(尚)爲(爲)九(九)十(十)一(一)劫(劫)金(金)色(色)身(身)供(供)養(養)勝(勝)經(經)施(施)主(主)一(一)生(生)不(不)入(入)三
佛(佛)位(位)。但(但)除(除)去(去)眞(眞)言(言)禪(禪)宗(宗)念(念)佛(佛)者(者)等(等)謗(謗)法(法)供(供)養(養)之(之)譬(譬)如(如)崇(崇)重(重)脩(脩)羅(羅)歸(歸)敬(敬)帝(帝)釋(釋)
耳(耳)。恐(恐)謹(謹)言(言)。

卯月十二日

日蓮 花押

乘明聖人御返事

明治三十五年三月二十九日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ四丁三十
三行ナリ(稻田海素庵記)

○上野殿御返事

發上二

考三四四

五月十四日にも(幸)のかしら一駄(駄)わざとをくりたびて候。當時のいもは人
のいとまど申(申)珠(珠)のごとしくすりのごとし。さてはねはせつかはされて候事
うけ給(給)候(候)ぬ。尹(尹)吉(吉)甫(甫)と申(申)せし人(人)はただ一人(一人)子(子)あり伯(伯)奇(奇)と申(申)る。を(を)やも賢(賢)也
子(子)もか(か)しこ(こ)しいか(か)なる人(人)か(か)この中(中)をば申(申)たがふ(ふ)べきと(と)れも(も)ひ(ひ)じか(か)ども。繼(繼)
母(母)よりよりう(う)た(た)た(た)へ(へ)しに用(用)ざ(ざ)りし(し)は(は)ど(ど)に。繼(繼)母(母)す(す)ね(ね)ん(ん)數(數)年(年)が(が)間(間)や(や)う
や(や)うの(の)た(た)ば(ば)かり(り)を(を)な(な)せ(せ)し中(中)に。蜂(蜂)と申(申)む(む)しを(を)我(我)ふ(ふ)と(と)ころ(ころ)入(入)りて(て)い(い)ろ(ろ)ぎ(ぎ)
い(い)ろ(ろ)ぎ(ぎ)伯(伯)奇(奇)に(に)と(と)ら(ら)せ(せ)て。し(し)か(か)も(も)父(父)に(に)み(み)せ(せ)わ(わ)れ(れ)を(を)け(け)さ(さ)う(う)懸(懸)想(想)す(す)ると(と)申(申)な(な)し(し)て
う(う)し(し)な(な)は(は)ん(ん)と(と)せ(せ)し(し)也(也)。び(び)ん(ん)ば(ば)さ(さ)ら(ら)願(願)婆(婆)沙(沙)羅(羅)王(王)と(と)申(申)せ(せ)し(し)王(王)は(は)賢(賢)王(王)なる(る)上(上)佛(佛)の(の)御
だ(だ)ん(ん)な(な)檀(檀)那(那)の中(中)に(に)閻(閻)浮(浮)第(第)一(一)也(也)。し(し)か(か)も(も)この(この)王(王)は(は)摩(摩)竭(竭)提(提)國(國)の(の)主(主)也(也)。佛(佛)は(は)又(又)此(此)國
に(に)して(して)法(法)華(華)經(經)を(を)と(と)か(か)ん(ん)と(と)れ(れ)ば(ば)し(し)し(し)に。王(王)と(と)佛(佛)と(と)一(一)同(同)な(な)れば(ば)一(一)定(定)法(法)華(華)經(經)と(と)か(か)れ

上野殿御返事 (遠二二ノ三六)

千五百四十九

(外八ノ十三)

なんとみへて候しに。提婆達多だいばだつたと申せし人いかにがして此事をやぶらんとねもひしに。すべてたより(便)なかりしかば。とかうはかりしはどに。頻婆沙羅王の太子阿闍世王あじやせをとしごろ(年來)とかくかたらひてやうやく心をと。をや(親)と子とのなかを申したへて。阿闍世王をすかし父の頻婆沙羅王をころさせ。阿闍世王と心を一にし提婆と阿闍世王と一味となりしかば。五天竺の外道悪人雲かすみ(雲)のごとくあつまり。國をたび(給)たからをほどこし心をやわら(和)げすかししかば。一國の王すでに佛の大怨敵となる。欲界第六天の魔王無量の眷屬を具足してうち下摩竭提國の提婆阿闍世六大臣等の身に入りかはりしかば。形は人なれども力は第六天の力なり。大風の草木をなびかす(靡)よりも大風の大海の波をたつるよりも。大地震の大地をうごかすよりも大火の連宅をやくよりも。さはがし(騒)くをぢ(畏)わなゝさし事也。さればはるり(波瑠璃)王と申せし王は阿闍世王にかたらはれ釋迦佛の御身したしき人數百人切ころす。阿闍世王は醉象すひぞうを放ちて弟子を無量無邊ふみころさせつ。或は道に伏兵をすへ或は井に糞を入る。或は女人をかたらひてらら事いひつけて佛弟子をころす。舍利弗目連が事にあひかる(加留陀夷)が馬のくる

にうづまれし。佛はせめられて。百九十日馬のむぎをまいりしこれ也。世間の人のねもはく悪人には佛の御力もかなはざりけるにやと思ひ。信じたりし人人も音こゑをのみてももの申さず眼をとぢてもものをみる事なし。ただ舌をふり手をかきし計り也。結句は提婆達多釋迦如來の養母蓮華比丘尼を打ちころし佛の御身より血を出せし上。誰の人かかたうどになるべき。かくやうやうになりての上。いかがしたりけん法華經をとかせ給ぬ。此法華經に云。而此經カモ者如來現在猶多ニシテ怨嫉ニシテ滅度ノ後と云云。文の心は我が現在して候だにも此經の御かたさかくのごとし。いかにいわうや末代に法華經を一字一點もとさ信せん人をやと説れて候也。此をもてれも候へば佛法華經をとかせ給て今にいたるまでは二千二百二十餘年になり候へども。いまだ法華經を佛のごとくよみ(讀)たる人は候はぬ歟。大難をもちてこり法華經しりたる人とは申すべきに。天台大師傳教大師こり法華經の行者とはみへて候しかども在世のごとくの大難なし。ただ南三北七南都七大寺の小難也。いまだ國主かたさどならず萬民つるぎ(鯁)をにぎらず一國悪口をはかす。滅後に法華經を信人シは在世の大難よりもすぐべく候なるに。同シはどの難だにも來らず何ニ況やす

ぐれたる大難多難をや。虎うろぶ(嘘)けば大風ふく龍ぎん(吟)すれば雲をこる。野菊のうろぶき驢馬のいはうるに風ふかず雲をこる事なし。愚者が法華經をよみ賢者が義を談する時は國もさわかず事もをこらす。聖人出現して佛のごとく法華經を談せん時。一國もさわぎ在世にすぎたる大難をこるべしとみわて候。今日蓮は賢人にもあらずまして聖人はれもひもよらず天下第一の僻人にて候が。但經文計リにはあひて候やうなれば。大難來り候へば父母のいさかへらせ給て候よりも。にくさもののことにあふよりもうれしく候也。愚者にて而も佛に聖人とれもはれまいらせて候はん事ころうれしき事にて候へ。智者たる上二百五十戒かたくたもちて萬民には諸天の帝釋をうやまふよりもうやまはれて。釋迦佛法華經に不思議なり提婆がごとしとれもはれまいらせなば。人目はよきやうなれども後生はれろしれろし。さるにては殿は法華經の行者に(似)させ給へりとうけ給はれば。もつてのほかに人のしたしき(親)もうとき(疎)も日蓮房を信じてはよもまどぬなん。上の御氣色かみもあしかりなるとかたうと(方人)なるやうにて御けらくむ(教訓)候なれば。賢人までも人のたばかりはをろろしき事なれば。一定法華經すて給となん。なかなか色

みへてありせばよかりなん。大魔のつきたる者どもは一人をけらくん(教訓)しをとしつれば。うれをひつかけ(引懸)にして多のの人をせめをとすなり。日蓮が弟子にせう(少輔)房と申のと(能登)房といゐるなご(名越)の尼なんぞ申せし物どもは。よく(慈)ふかく心をくびやうに愚癡にして而も智者となのりしやつばらなりしかば。事のをこりし時たよりをわてねほくの人をれとせしなり。殿もせめをとされさせ給らならばするが(駿河)にせうせう信するやうなる者も。又信せんとれもふらん人人も皆法華經をすつべし。さればこの甲斐國にも少少信せんと申人人候へども。ねほろげならでは入まいらせ候はぬにて候。なかなかしき人の信するやうにて。なめり(亂語)て候へば人の信心をもやぶりて候也。ただをかせ給へ梵天帝釋等の御計ラビとして日本國一時に信する事あるべし。爾時うらのとき我も本より信たり信たりと申人人ころねほくをはせずらんめとれば候。御信用あつくをはするならば人ためにあらず我故父の御ため。人は我をや(親)の後世にはかはるべからず。子なれば我ころ故をやの後世をばとふらふべけれ。郷かう一郷知るならば半郷は父のため半郷は妻子眷屬をやしなふべし。我命いのちは事出きたたらば上かみにまいらせ候べしとひとへに

もひきりて。何事につけても言をやわらげて法華經の信をうすくなさんずるやうをたばかる人出来せば。我が信心をこゝろむるかどればして各各これを御けうくん(教訓)あるはうれしき事也。ただし御身のけうくんせさせ給へ。上の御信用なき事はこれにもしりて候を。上をもてれどさせ給、ころをかしく候へ。参つてけうくん申どもひ候つるに。うわて(上手)うたれまいらせて候。閻魔王に我身といとをしとればす御め(妻)と子とをひつばられん時は。時光に手をやすらせ給候はんずらんと。にくげにうちいひてねはすべし。にいた(新田)殿の事まことにてや候らん。をきつ(沖津)の事きくへて候。殿もびんぎ(便宜)候はば其義にて候べし。かまへてれば(大)きならん人申、いだしたるらんはあはれ法華經のよきかたきよ。優曇華(うゑんげ)か盲龜(めうきん)の浮木(うきぎ)かどればしめして。したたかに御返事あるべし。千丁萬丁する人もわづかの事にたちまちに命をすて所領をめさるる人もあり。今度法華經のために命をすつる事ならばなにはをしかるべき。藥王菩薩は身を千二百歳が間やきつくして佛になり給。檀王は千歳が間身をゆか(牀)となして今の釋迦佛といはれさせ給、ずかし。さればひが事をすべきにはあらず。今はすてなばかへりて人わらは(笑)れになるべし。かた

うせ(方人)なるやうにてつくりれとして。我もわらひ人にもわらはせんとするがさくわい(奇慥)なるに。よくよくけうくんせさせて人のねほくきかんところにて人をけうくんせんよりも。我身をけうくんあるべしとてかつばとた(立)せ給へ。一日二日が内にこれへきこへ候べし。事なほければ申さず又又申へし。恐恐謹言。

五月十五日

日蓮花押

上野殿御返事

明治三十六年一月十七日富士大石寺ニ於テ日興上人ノ御寫ヲ以テ校正ス但シ大本三十九丁右七行(一五五二の二三行)「日蓮」ヨリ左五行「うに」マテ御眞蹟ノ斷編同山ニ在リ又興師ノ御筆ニテ建治三年到來トアリ(稲田海素慶記)

○下山御消息 啓三二 鈔二〇三 語四三三 拾六三三 扶二二〇

於ニ例時ニ者尤モ可レ被レ讀マ阿彌陀經ニ歟等云云。此事は仰々候はぬ已前より親父の代官といひ私と申。此四五年が間は無退轉。例時には阿彌陀經を讀、奉り候しが。去年之春の末へ夏の始より阿彌陀經を止めて一向に法華經の内自我偈

下山御消息 (遺三二ノ四一)

千五百五十五

(内二十六ノ十三)

讀誦し候。又同くば一部を讀奉らむとはげみ候。これ又偏に現當の御祈禱の爲也。但阿彌陀經念佛止て候事は此日比日本國に聞へさせ給り日蓮聖人去文永十一年の夏の比。同甲州飯野御牧波木井の郷の内身延の嶺と申す深山に御隱居せさせ給候へば。さるべき人人御法門可承之由候へども御制止ありて入られず。ねばろげの強縁ならではかなひがたく候しに。有人見參の候と申候しかば信じまいらせ候はんれう(料)には參候はず。ものの様をも見候はんために。閑所より忍て參り御庵室の後に隱れ。人人の御不審に付てあらあら御法門とかせ給候き。法華經と大日經華嚴般若深密楞伽阿彌陀經等の經經の勝劣淺深等を先として説給しを承候へば。法華經と阿彌陀經等の勝劣は一重二重のみならず天地雲泥に候けり。譬ば帝釋と猿猴と鳳凰と鳥鵲と大山と微塵と日月と螢炬等の高下勝劣也。彼彼の經文と法華經とを引合てたくらへさせ給しかば愚人も辨つ可し白白也赤赤也。されば此法門は大體人も知れり始てねどるくべきにわらず。又佛法を修行する法は必ず經經の大小權實顯密を辨べき上。よくよく時を知り機を鑑て申すべき事也。而に當世日本國は入毎に阿みだ經並に彌陀の名號等を本として。法華經を

忽諸し奉る。世間に智者と仰がるる人人我も我も時機を知れり知れりと存せられげに候へども。小善を持って大善を打奉り。權經を以て實經を失ふどがは。小善遠て大惡となる藥變て毒となる親族還て怨敵と成が如し難治の次第也。又佛法には賢なる様なる人なれども。時に依り機に依り國に依り先後の弘通に依る事を辨へざれば。身心を苦めて修行すれども驗なき事なり。設一向に小乘流布の國には大乘をば弘通する事はあれども。一向大乘の國には小乘經をあながちにいむ(忌)事也。しるてこれを弘通すれば國もわづらひ人も惡道まぬかれがたし。又初心の人には二法を並て修行せしむる事をゆるさず。月氏の習には一向小乘の寺の者は王路を行かず。一向大乘の僧は左右路をふむ事なし。井の水河の水同く飲事なし。何況一房に栖なんや。されば法華經に初心の一向大乘の寺を佛説給に但樂受持大乘經典乃至不受餘經一偈。又云、又不親近求聲聞比丘比丘尼優婆塞優婆夷。又云、亦不問訊等云云。設親父たれども一向小乘の寺に住する比丘比丘尼をば一向大乘の寺の子息これを禮拜せず親近せず。何況其法を修行せんや。大小兼行の寺は後心の菩薩也。今日本國は最初に佛法渡り候し比大小雜行にて候

しが。人王四十五代聖武天皇の御宇に唐の揚州龍興寺の鑑真和尚と申せし人。漢土より我朝に法華經天台宗を渡給て有しが。圓機未熟とやればしけん此の法門をば己心に收めて口にも出さし給はず。大唐の終南山の豐徳寺の道宣律師の小乗戒ヲ日本國ノ三所に建立せり。此レ偏に法華宗の流布すべき方便也。大乘出現の後には肩を並べて行々よとにはあらず。例々ば儒家の本師たる孔子老子等の三聖は佛の御使として漢土に遣されて。内典の初門に禮樂の文を諸人に教へたりき。止觀に經を引いて云ク我遣三聖ヲ化ニ彼震旦ニ等云云。妙樂大師云ク禮樂前ニ馳セ眞道後ニ啓クと云云。佛は大乘の初門に且小乗戒を説給しかども。時すぎぬれば禁云ク涅槃經ニ云ク若有レ人言シ如來ハ無常ニ云何是人舌不ニ墮落ニ等云云。其後人王第五十代桓武天王の御宇に傳教大師と申せし聖人出現せり。始には華嚴三論法相俱舍成實律の六宗を習ヒ極給フのみならず。達磨宗の淵底を探り究め給ひ。剩へいまだ日本國に弘通せざる天台眞言の二宗をも尋テ顯ハして淺深勝劣ヲ心中に究竟し給へり。去延暦二十一年正月十九日ニ桓武皇帝高雄寺に行幸なり給。南都七大寺の長者善議勤操等の十四人ヲ教大師に召シ合テ六宗と法華宗との勝劣を糾明せられしに。六宗の碩學

宗宗毎に我宗は一代超過の由各各に立テ申されしかども。教大師の一言に萬事破レ畢シぬ。其後皇帝重テ口宣す。和氣弘世を御使として諫責せられしかば。七大寺六宗ノ碩學一同に謝表を奉リ畢。一ツ十四人之表ニ云ク此界合靈而今而後悉ク載リ妙圓之船ニ早ク得レ濟ニ彼岸ニ云云。教大師云ク二百五十戒忽捨テ畢云云。又云ク正像稍過ニ已テ末法太ク有リ近ニ。又云ク一乘之家都テ不レ用ヒ。又云ク無レ以テ穢食ヲ置テ寶器ト。又云ク佛世之大羅漢已ニ被レ此呵嘖ヲ滅後ノ小蚊虻何ッ不レ隨ハ此云云。此レ又私の責にはあらず。法華經には正直捨テ方便ヲ但説ク無上道ヲ云云。涅槃經には邪見之人等云云。邪見方便と申スは華嚴大日經般若經阿彌陀經等の四十餘年の經經也。捨者天台ノ云ク廢也又云ク謗者背也。正直初心の行者の法華經を修行する法は。上に擧るところの經經宗宗を抛テ一向に法華經を行ずるが眞の正直の行者にては候也。而ルを初心の行者深位の菩薩の様に彼彼の經經と法華經とを並テ行すれば不正直の者となる。世間の法にも賢人は二君に仕へず貞女は兩夫に嫁がすと申ス是也。又私に異義を申スべきにあらず。如來は未來を鑑ミさせ給て。我滅後正法一千年像法一千年末法一萬年が間。我法門を弘通すべき人人並に經經を一一にきりあてられて候。而ルに

此を背、人世に出来せば設智者賢王なりとも用へべからず。所謂我滅後の次、日より正法五百年の間は一向小乘經を弘通すべし。迦葉阿難乃至富那奢等の十餘人也。後、五百年には權大乘經の内華嚴方等深密般若大日經觀經阿彌陀經等を。彌勒菩薩 文殊師利菩薩 馬鳴菩薩 龍樹菩薩 無著菩薩 天親菩薩等の四依、大菩薩等の大論師弘通すべしと云云。此等の大論師は法華經の深義を知、食さざるにあらず。然而法華經流布の時も來らざる上釋尊よりも仰付られざる大法なれば。心には存して口に宣給はず。或時は粗口に囀る様なれども實義をば一向に隠して演給はず。像法一千年、内に入ぬれば月氏の佛法漸く漢土日本に渡り來る。世尊眼前に藥王菩薩等の迹化他方の大菩薩に法華經の半分迹門十四品を譲り給ふ。これは又地涌の大菩薩末法の初に出現せさせ給て。本門壽量品の肝心たる南無妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生に唱へさせ給ふべき先序のため也。所謂迹門弘通の衆は南岳天台妙樂傳教等是也。今の時は世すでに上行菩薩等の御出現の時刻に相當れり。而に余愚眼を以てこれを見先に先相すべしあらはれたる歟。而諸宗所依の華嚴大日阿彌陀經等は其流布の時を論すれば正法一千年の内後、五百年乃至像法の始の譯

論の經經也。而に人師等經經の淺深勝劣等に迷惑するのみならず。佛の讓、狀をもわすれ時機をも勘へず。猥ニ宗宗を構へ像末の行となせり。例は白田に種を下して玄冬に穀をもとめ。下弦に満月を期し夜中に日輪を尋る如し。何況律宗なむと申、宗一向小乘也。月氏には正法一千年の前の五百年の小法。又日本國にては像法の中比法華經天台宗の流布すべき前に且らく機を調養せむがため也。例せば日出んとて明星前に立ち雨下らむとて雲先たこるが如し。日出雨下後の星雲はなにかせん。而に今は時過ぬ。又末法に入りて之を修行せば重病に輕藥を授け大石を小船に載るが如し。遂行せば身は苦く暇は入りて暇なく。華のみ開きて菓なからん。故に教大師像法の末に出現して法華經の迹門戒定慧の三が内其中圓頓戒壇を叡山に建立し給ひし時。二百五十戒忽に捨テ畢。隨つて又鑑眞の末の南都七大寺、一十四人三百餘人も加判して大乘の人となり。一國舉つて小律儀を捨テ畢。其授戒の書を可ん見分明也。而を今邪智の持齋法師等昔し捨テし小乘經を取り出して。一戒もたもたぬ名計りなる二百五十戒の法師原有つて。公家武家を誑惑して國師とのしる。剩我慢を發して大乘戒の人を破戒無戒とあなづる。例は狗犬が師子を吠

へ猿猴が帝釋をわなづるが如し。今の律宗の法師原は世間の人人には持戒實語の者の様には見ゆれども。其實を論せば天下第一の大不實の者也。其故は彼等が本文とする四分律十誦律等の文は大小乗の中には一向小乗、小乗の中にも最下の小律也。在世には十二年の後方等大乘へうつる程の且、くのやすめ(息言)滅後には正法の前、五百年は一向小乗の寺也。此亦一向大乘の寺の毀謗となさんがためなり。されば日本國には像法半に鑑真和尚大乘の手習とし給る。教大師彼宗を破し給て人をば天台宗へとりこし。宗をば失つべしといへども。後に事の由を知らしめんがために我が大乘の弟子を遣してたすけをさ給る。而して今の學者等は此由ヲ知らずして六宗は本より破れずして有りどもへり無墓無墓。又一類の者等天台、才學を以て見れば我律宗ハ幼弱なる故に。漸漸に梵網經へうつりし結句は法華經の大戒を我が小律に盜入して還て圓頓の行者を破戒無戒と咲へば。國主は當時の形貌の貴げなる氣色にたばらかされ給て。天台宗の寺に寄せたる田畠等を奪取て彼等にあたへ。萬民は又一向大乘の寺の歸依を抛てて彼寺にうつる。手づから火をつけざれども日本一國の大乘の寺を燒失。拔目鳥にあらざれども一切衆生の眼ヲ拔ぬ。佛の記

給ふ阿羅漢に似たる闍提是也。涅槃經云、我涅槃後無量百歲ニ四道ノ聖人悉ク復涅槃。正法滅後於ニ像法ノ中ニ當ニ有ニ比丘ニ似ニ像持律ニ少シ讀ニ誦ニ經ヲ貪ニ嗜飲食ヲ長ニ養其身ヲ。乃至雖服袈裟猶如獵師ノ細視徐行一如貓伺鼠。外現賢善内懷貪嫉如下受。啞法婆羅門等實非沙門。現沙門像邪見熾盛。誹謗正法等云云。此經文に世尊未來を記置給。抑釋尊は我等がために賢父たる上明師也聖主也。一身に三徳を備へ給へる佛の佛眼を以て未來惡世を鑑給て記置給。記文ニ云。我涅槃後無量百歲云云。佛滅後二千年已後と見へぬ。又四道聖人悉ク復涅槃云云付法藏の二十四人を指す歟。正法滅後等云云像末の世と聞たり。當ニ有ニ比丘ニ似ニ像持律ニ等云云今末法の代に比丘、似像を撰び出さば日本國には誰の人をか引出。大覺世尊をば不妄語の人とし奉るべき。俗男俗女比丘尼をば此經文に載たる事なし但比丘計也。比丘は日本國に數を不知。然而其中に三衣一鉢身に帶せねば似像と定がたし。唯持齋法師計相似たり。一切の持齋の中には次下の文に持律とつけり。律宗より外は又脱ぬ。次下の文に少讀誦經云云相州鎌倉ノ極樂寺の良觀房にあらずば誰を指し出。出。經文をたすけ奉るべき。次下の文に猶如獵師ノ細

視徐行^{スルカ}如^ク貓^ノ伺^フ鼠^ヲ外現^ニ賢善^ヲ内懷^シ貪嫉^ヲ等云云兩火房にあらざば誰をか三衣一鉢^ノ獵師伺猫として佛説を可信^ス。哀哉^イ當時の俗男俗女比丘尼等檀那等が山の鹿家の鼠となりて。獵師猫に似たる兩火房に伺れたばらかされて。今生には守護國土の天照太神正八幡等にすてられ。他國の兵軍にやぶられて。猫の鼠を捺^レ取^ルが如く獵師の鹿を射死^スが如し。俗男武士等は射伏^{イセウキ}切伏^キられ俗女は捺^レ取^ラれて他國へれもむかぬ。王昭君楊貴妃が如くになりて。後生には無間大城に一人もなく趣^クべし。而^ルを余此事を見^ル故に彼が檀那等が大悪心をわろれず強盛にせむる故に。兩火房内諸方に讒言を企てて余が口を塞^ガんとはげみし也。又經^ニ云^ク供^ニ養^ス汝^ヲ者^ハ墮^シ三惡道^ニ等云云。在世の阿羅漢を供養せし人尙三惡道まぬかれがたし。何況^{カニ}滅^カ後の誑惑の^ノ小律の法師原をや。小戒の大科をばこれを以て可^シ知^ル。或は又驢^ノ乳^ニも譬^タり還て糞となる。或は狗犬にも譬^タり大乘の人の糞を食す。或は猿猴或は瓦礫と云云。然^レば時を辨^ヘず機を^シらすして小乘戒を持^ツば大乘の障^{サハ}りとなる。破れば又必惡果を招^ク。其上今の人人小律の者どもは大乘戒を小乘戒に盜^シ入れ驢^ノ乳^ニ牛乳^ニを入れて大乘の人をあざむく。大偷盜の者大謗法の者。其どがを論^ス

れば提婆達多も肩を並^ヘがたく瞿伽利尊者が足も及^ハざる閻浮第一の大惡人也。歸依せん國土安穩なるべしや。余此事を見るに自身だにも辨^ヘなばさてころあるべきに。日本國に智者とればしき人人一人も不知^ラ。國すでにやぶれなんとす。其上佛の諫曉を重^シする上二分の慈悲にもよをされて。國に代^リて身命を捨て申せども。國主等彼にたばらかされて用^ユる人一人もなし。譬^ヘば熱鐵に冷水を投げ睡眠の師子に手を觸^ルが如し。爰に兩火房と申^ス法師あり。身には三衣を皮の如くはなつ事なし。一鉢は兩眼をまほるが如し。二百五十戒堅く持ち三千の威儀をと^ノのべたり。世間の無智^ノ道俗國主よりはじめて萬民にいたるまで。地藏尊者の伽羅陀山より出現せる歎迦葉尊者の靈山より下來するかと疑ふ。余法華經の第五卷^ノ勸持品を拜見したてまつれば未代に入りて法華經の大怨敵三類あるべし。其第三の強敵は此者かと思^ハ見畢^ス。便宜^ニあらば國敵をせめて彼れが大慢を倒^シて佛法の威嚴^ヲをあらはさんと思^ハ處に。兩火房常に高座にして歎^テ云^ク日本國の僧尼には二百五十戒五百戒。男女には五戒八齋戒等を一同に持^ツせんと思^ハふに。日蓮が此願の障^リとなると思^ハ云^ク。余案^ニ云^ク現證に付て事を切^キんと思^ハ處に。彼常に雨を心に任^テ下^ス由披

露あり。古へも又雨を以て得失をあらはす例これ多し。所謂傳教大師と護命と守敏と弘法と等也。此に兩火房上より祈雨の御いのりを仰せ付けられたりと云云。此に兩火房祈雨あり。去文永八年六月十八日より二十四日也。此に使を極樂寺へ遣す年來の御歎きこれなり。七日が間に若一雨も下ば御弟子となりて二百五十戒具に持上。念佛無間地獄と申事ひがよみなりけりと申べし。余だにも歸伏し奉らば我弟子等をはじめて。日本國大體かたぶき候なんと云云。七日が間に三度の使をつかはす。然れどもいかんがしたりけむ一雨も不下上之上。頽風 颯風 旋風 暴風等の八風十二時にやむ事なし。剩二七日まで一雨も不下上風もやむ事なし。されば此事は何事ぞ。和泉式部と云し色好み能因法師と申せし無戒の者。此は彼の兩火房がいむところの三十字がかし。彼月氏の大盜賊南無佛と稱せしかば天頭を得たり。彼兩火房並に諸僧等の二百五十戒眞言法華の小法大法の數百人の佛法の靈驗。いかなれば姪女等之誑言大盜人が稱佛には劣らんとあやしき事也。此を以て彼等が大科をばしらるべきに。さはなくして還て讒言をもちゐらるは實とはればへず。所詮日本國亡國となるべき期來る歟。又祈雨の事はたとひ雨下せりと

も雨の形貌を以て祈者の賢不賢を知事あり。雨種種也或は天雨或は龍雨或は脩羅雨或は饑雨或は甘雨或は雷雨等あり。今の祈雨都て一雨も不下上二七日が間。前よりはるかに超過せる大旱魃 大惡風 十二時に止事なし。兩火房眞の人ならば忽に邪見をもひるがへし跡をも山林にかくすべきに。其義なくして面を弟子檀那等にさらす上。剩讒言を企て日蓮が頸をさらせまいらせんと申上。あづかる人の國まで狀を申下て種をたんとする大惡人也。而を無智の檀那等恃估して現世には國をやぶり後生には無間地獄に墮ちなん事の不便さよ。起世經云、有諸衆生爲放逸汚清淨行故天不下雨。又云、有不如法慳貪嫉妬邪見顛倒故天則不下雨。又經律異相云、有五事無雨一三略之四雨師姪亂五國王不理治雨師瞋故不雨云云。此等の經文の龜鏡をもて兩火房が身に指當て見よ少もくもりなからん。一には名は持戒ときこゆれども實には放逸なる歟。二には慳貪なる歟。三には嫉妬なる歟。四には邪見なる歟。五には姪亂なる歟。此五にはすぐべからず。又此經は兩火房一人には不可限昔をかみ今をもしれ。弘法大師の祈雨の時二七日之間一雨も下らざりしもあやしき事也。而を誑惑の心強盛なり

し人なれば天子の御祈雨の雨を盗り取て我が雨と云云。善無畏三藏金剛智三藏不空三藏の祈雨之時も小雨は下たりしかども三師共に大風連連と吹いて。勅使をつけてをばれしあさましさと。天台大師傳教大師の須臾と三日が間に帝釋雨を下して小風も吹かざりしもたどく(貴)がればゆるればゆる。法華經云、或は有阿練若納衣在空閑乃至貪著利養故與白衣說法爲三世所恭敬如六通羅漢。又云常在在大衆中欲毀我等故向國王大臣婆羅門居士及餘比丘衆誹謗說我惡乃至惡鬼入其身罵詈毀辱我。又云濁世惡比丘不知知佛方便隨宜所說法惡口而響聲數數見擯出等云云。涅槃經云有闍提作羅漢像住於空處誹謗方等大乘經典諸凡夫人見已皆謂眞阿羅漢是大菩薩等云云。今予法華經と涅槃經との佛鏡をもつて。當時の日本國を浮へて其影をみるに。誰の僧が國主に六通の羅漢の如くたどまれて。而も法華經の行者を讒言して頸をきらせんとせし。又いづれの僧か萬民に大菩薩とわがれたる。誰の智者が法華經の故に度度處處を追はれ頸をきられ弟子を殺され。兩度まで流罪せられて最後に頸に及ばんとせし。無眼無耳の人は除く有眼有耳人は經文を見聞せよ。今の人人は人

毎どに經文を我もよむ我も信たりといふ。只にくむどころは日蓮計也。經文を信するならば慥かにのせたる強敵を取り出して經文を信じてよむしとせよ。若不爾者經文の如く讀誦する日蓮をいかれるは經文をいかるれにあらずや。佛使をかるしむる也。今の代の兩火房法華經の第三の強敵とならずば。釋尊は大妄語の佛多寶十方の諸佛は不實の證明也。又經文まことならば御歸依の國主は現在には守護の善神にすてられ國は他の有となり。後生には阿鼻地獄疑なし。而に彼等が大惡法を尊るる故に理不盡の政道出來す。彼の國主の僻見の心を推するに。日蓮は阿彌陀佛の怨敵父母の建立の堂塔の讎敵なれば。假令政道をまげたりとも佛意には背かじ天神もゆるし給へしとをもはるる歟。はかなしはかなし。委細にかたるべけれども此は小事なれば申さず心有者推して知ぬべし。上に書キ舉るより雲泥大事なる日本第一の大科。此國に出來して年久くなる間。此國既に梵釋日月四天大王等の諸天にも捨られ守護の諸大善神も還つて大怨敵となり。法華經守護の梵帝等鄰國の聖人に仰付て日本國を治罰し。佛前の誓狀を遂とをばしめす事あり。夫正像の古へは世濁世に入るといへども始なりしかば國土さしも不亂。聖賢も間